

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の方法

1. 発掘区とグリッドの設定

グリッドは四等三角点（世界測地系、X座標=7701.398、Y座標=58320.507）を基準点とし、この基準点と任意に設定したプラスチック杭K-10（世界測地系、X座標=7745.983、Y座標=58309.567）を結んだ線上をAラインとし、東西方向をアルファベット順（h～a・A～K）、南北方向をアラビア数字順（1～20）とし、1区画を5 m×5 mとして設定した。また、設定はトータルステーションを用いて町教委が直営で実施した。

発掘区はTR1～7までの7箇所である。TR1～4とTR6は遺跡中央部の竪穴住居跡が分布していない空間を選択し、集落の構成要素を探る目的で設定した。

しかし、それらの調査区だけでは遺跡の内容確認を行うためには不十分であるため、検討委員会の意見をふまえTR5は自然崩壊の危機にあるオホーツク文化期の竪穴上に設定した。一方、TR7は岬の中央部に位置しており、隣接する22号・23号竪穴の上層に形成された廃棄層のサンプリング等を目的として調査区を設定した。

2. 発掘及び整理作業の経過

発掘作業は平成25～28年度までの4ヶ年であり、竪穴住居跡1軒（TR5）とトレンチ6列（TR1～4・6・7）を掘削した。また、出土遺物は原則全点の出土地点を記録し、部位の判別可能な動物骨や遺跡外から持ち込まれた可能性のあるレキに関しても可能な限り地点計測し、取り上げ台帳に記載することとした。機材の都合上、取り上げにはTR1～4が平板、TR5～7はトータルステーションを用いた。以下、年度ごとに発掘作業の経過を解説する。

[平成25年度]

TR1～3を掘削し、複数の遺構を確認した（平河内編2014）。TR1の土坑1基については内容確認のために調査区内にかかる部分を掘削したが、焼土灰範囲や硬化面などは上面確認のみとした。TR2では配石遺構の性格を探るため、一部のレキを除去し下層の状況を確認するに留めた。

[平成26年度]

自然崩壊の5号竪穴（TR5）とトレンチ1列（TR4）を

調査し、TR4からは1号墓と配石を伴う土坑を検出した。1号墓は配石を伴うため、墓坑の平面形や軸方向を確認するために配石を除去し、下層へと掘り下げを続けた。また、本遺跡での墓の検出は初例であったため、墓の典型的な形態を探ることを目的として半截ではなく完掘することとした。さらに、その南側からは配石と伴う土坑が検出され、隣接する墓との関係性やその性格を検証するために、こちらも完掘することとした。

一方、TR5では5号竪穴上層に配石遺構が構築されており、写真と図面で記録を作成し、配石の除去は翌年度へ譲ることとした。

[平成27年度]

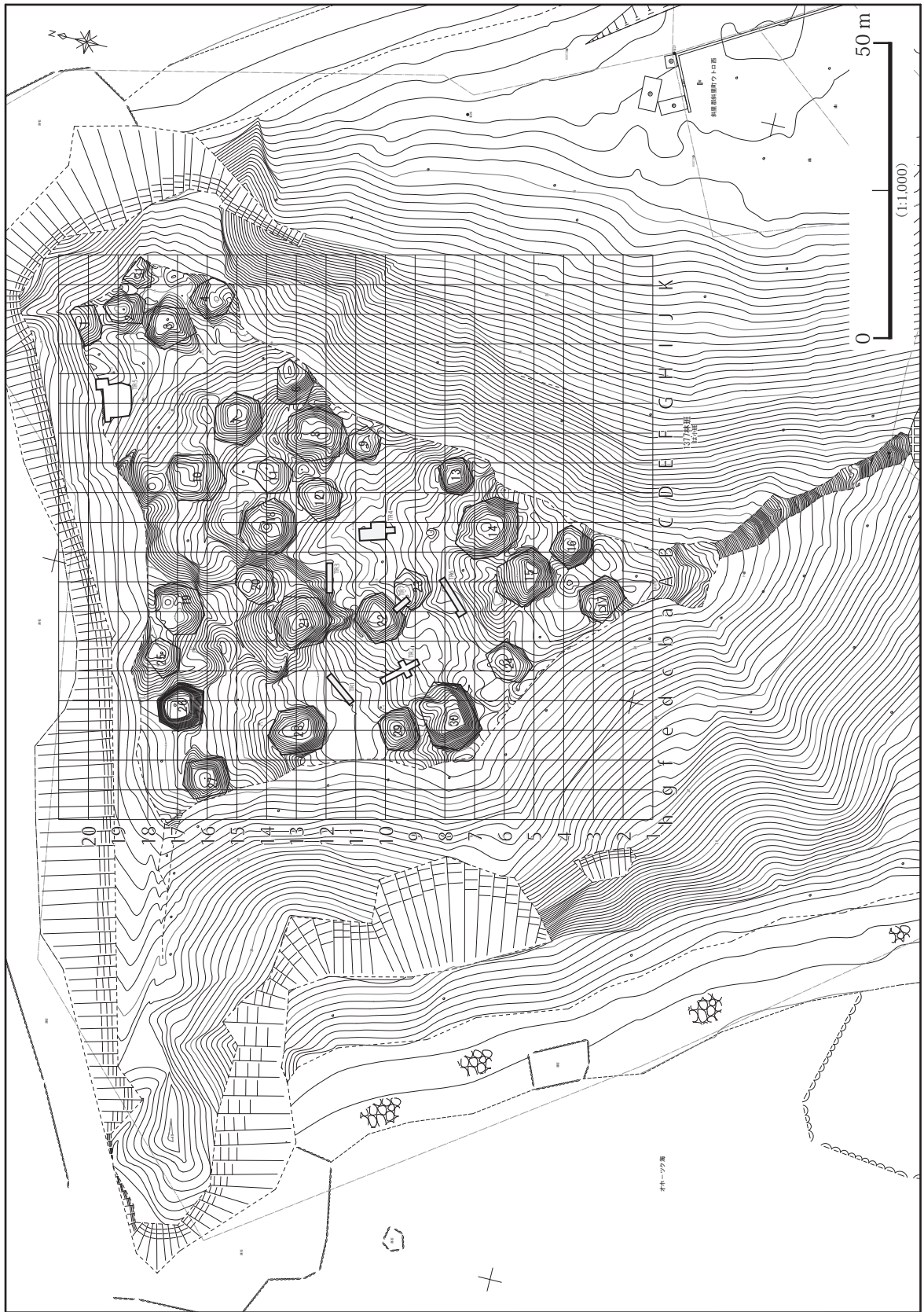
TR5の配石遺構を全面除去し、5号竪穴の床面へと掘り下げを行った。その際、竪穴の層位確認のために延長していた調査区北側で2号墓を検出した。5号竪穴と同様に、2号墓も自然崩壊の危険性が高く、崩落によって失われる前に記録すべきと判断し完掘する方針となった。また、5号竪穴では床面からヒグマ骨を集積した骨塚が検出されたことから、一括で取り上げるのではなく、検討委員会の意見をもとに部位の判別できる動物骨に関しては地点計測を行って取り上げを行った。そのため、竪穴の完掘には至らず、床面炭化材一部を検出するに留まった。

また、3ヶ年分の調査成果が蓄積されたため検討委員会を設置し、より効果的な調査方法を検討して翌年度の調査計画を立案した。

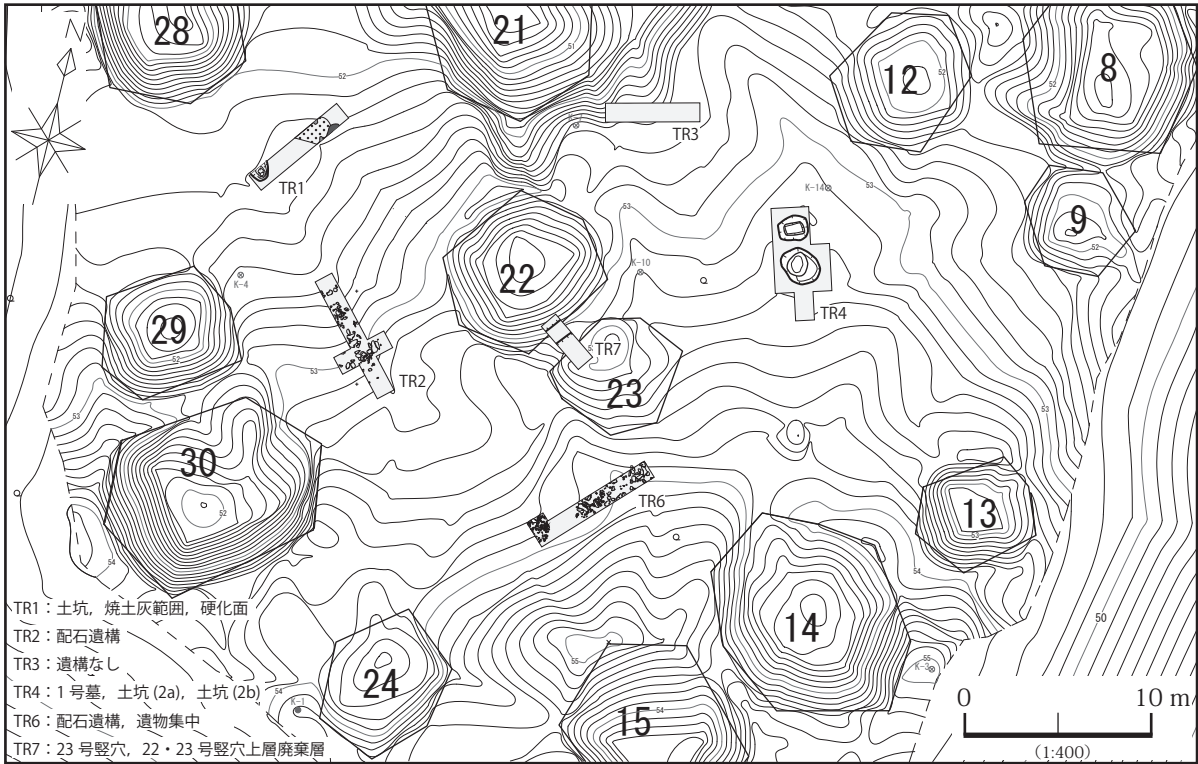
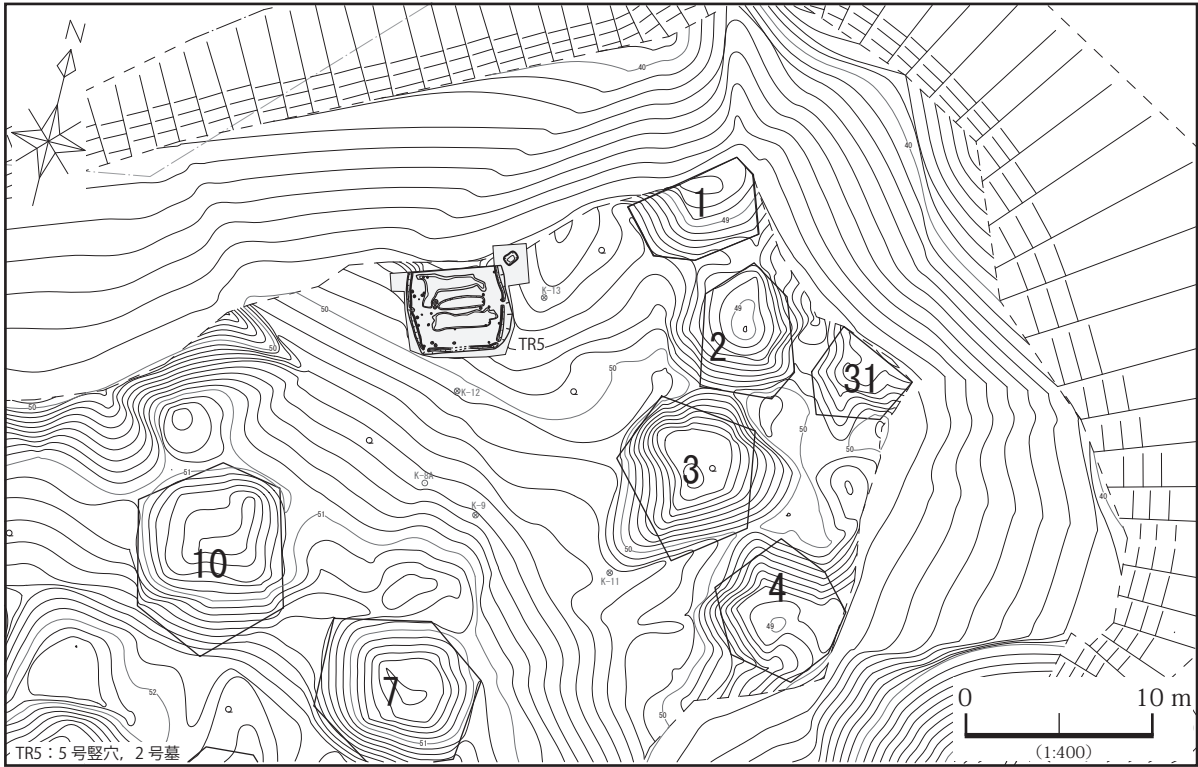
[平成28年度]

まず5号竪穴の床面を精査し、焼失に伴う炭化材の広がりを確認した。さらに、その下からは浅く掘り込んだ床面に粘土を充填して成形した貼床を検出し、記録後は貼床を除去し、建て替えの痕跡を探ったが見当たらなかったため、本竪穴については調査完了とした。

同時に調査を進めていたTR6では表土直下のⅡ層中から角礫を主体とした配石遺構が検出された。まずは配石の分布範囲を確認、その後調査区北東端のサークル状に組まれた配石を一部除去し、小規模な掘り込みを確認し半截した。これより、他の配石下にも土坑が伴う可能性が浮上したため、調査区中央でも同様に下層を確認した



第4図 調査区およびグリッド配置図



第5図 遺構配置図

が土坑は伴わなかった。そのため配石部分はⅡ層中の確認面で掘削を止め、調査区北側長軸に沿ってサブトレンチを設定し、層位の確認を行った。その際、配石が見られない南西部分のⅢ層上面から動物骨を伴う遺物集中が出土し、内容確認のために調査区を一部拡張して記録した後、取り上げを実施し調査完了とした。

一方、廃棄層の調査を目的としたTR7ではコラムサンプルの採取が優先事項であったため、50 cm角の小区を設定し土壌を採取した。その際、廃棄層の保存状態が良く、想定よりも調査に時間がかかったため、調査区の南西部（Aライン）を優先して掘り下げを行った。その結果、廃棄層の下層からは22号縦穴の掘り上げ土が堆積、さらにその下層から魚骨集中が検出された。これより、副次的に22・23号縦穴と廃棄層の新旧関係を明らかにできた。しかし、時間的制約から残りの北東部（Bライン）については覆土の一部を残し調査を終了することとなった。発掘作業は以上の4ヶ年であり、平成29年年度は整理作業および報告書作成に専念した。

また、整理作業は平成25～29年度までの5ヶ年かけて実施した。全出土遺物について、洗浄・乾燥・注記・接合を行い、報告書に掲載するものは復元、拓本・実測、写真撮影を実施した。また、廃棄層にて採取したコラムサンプリングは洗選別後、乾燥・フルイがけ（3mm・1mm）を実施し、さらに肉眼による微細遺物選別を行った。

3. 層序

調査区内の堆積層はⅠ～Ⅳ層までを確認した。主な包含層はⅠ～Ⅲだが、TR2ではⅣ層上面からも遺物が出土している。また、隣接するチャシコツ岬下B遺跡では縦穴住居跡内からTa-a（樽前山a火山灰）とMa-b5（摩周岳b5降下軽石）が確認されているが、今回の調査では肉眼でテフラを確認することはできなかった。以下、基本層位について解説する。

Ⅰ層：表土の腐植土層を含む黒色土層。縄文中期から現代の遺物までを含む。層厚5～25 cm。

Ⅱ層：基本の土色は黒褐色土層。中に焼土や炭化物、灰などの層を挟在する区域もある。主としてオホーツク文化期の遺構・遺物、縄文時代中期の遺物を包含する。層厚10～30 cm。

Ⅲ層：暗黄褐色土層。部分的に暗褐色土を含む。主にオホーツク文化期と縄文中期の遺物を包含する。TR2

での確認層厚30 cm。

Ⅳ層：黄灰ないし黄褐色土層。剣先スコップでも掘削が困難な締まりある土層。無遺物層。

4. 遺物の分類

土器：本報告では器形、文様、胎土、製作方法などから時期・型式を分類した。ただし、オホーツク土器やトビニタイ土器は胴部が無文のものが多く、分類が困難なため「不明」として扱うこととした。よって、無文に分類されるものは完形品もしくは口縁部破片から判断している。

Ⅰ群 擦文土器

Ⅱ群 トビニタイ土器

a類 無文

b類 貼付文

c類 貼付文+沈線文

Ⅲ群 オホーツク土器

a類 無文：口縁部文様が無文のものも含む。

b類 刻文：刻文を含むものすべて。

c類 沈線文：沈線文を含むものすべて。

d類 単独貼付文：紐状貼付文が1本単独のみで構成され、かつ刻みや刺突、ひねりなどを施した紐状貼付文を含むもの（意匠文のみも含む）。

e類 単位貼付文：紐状貼付文が2本以上1単位で構成されるもの。あるいは施文のない紐状貼付文を含むもの。

f類 不明：風化や残存部位から分類できないもの。

Ⅳ群 続縄文土器

Ⅴ群 縄文土器

a類 前期

b類 中期

石器：石器については、出土が確認されたものを以下のように分類した。よって、従来の斜里町の石器分類群と違う体裁になっていることを書き記しておく。また、石鏃については石鏃最大長が5cmを超えるものや大型の三角形石鏃については銛先鏃の可能性が高いが、ここではまとめて扱った。未製品や欠損品については観察表（表3）にその旨を記載した。

Ⅰ群 石鏃・銛先鏃

a類：柳葉形石鏃（長軸と短軸の比での細分可能）

- b類：ひし形石鏃（逆刺の状況により細分可能）
- c類：三角形石鏃（平基と凹基とで細分可能）
- d類：将棋駒形石鏃（鏃身部側縁の状況により細分可能）

II群 石錐

III群 削器

- a類：刃部調整はされているが定型的でないもの
- b類：安山岩製ナイフ

IV群 搔器

- a類：ラウンドタイプ
- b類：サイドタイプ

V群 剥片・破片

- a類：リタッチドフレイク（縁辺部に二次調整があるもの）
- b類：フレイク及びチップ（調整が見られない剥片や破片）

VI群 石核・原石

- a類：明瞭なプラットフォームを有するもの
- b類：明瞭なプラットフォームを有さないもの
- c類：石核状フレイク、残核状のものに微細調整が見られる。

VII群 石斧

VIII群 たたき石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの
- c類：円レキを素材としたもの

IX群 くぼみ石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの

X群 すり石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの
- c類：円レキを素材としたもの
- d類：その他の石を素材としたもの

XI群 砥石

XII群 石錘

- a類：穿孔の見られるもの
- b類：有溝の見られるもの

XIII群 石製品

- a類：円レキ有孔石製品
- b類：円板状有孔石製品
- c類：両頭調整石製品

骨角器

銚頭、骨鏃、釣針軸、骨針、骨斧、刺突具、彫像、原材（素材）、ヘラ状製品、円盤状製品、骨匙が出土している。

金属器

刀子、鉄片、鉄針、鉤状鉄製品、棒状鉄製品、貨幣（神功開寶）が出土している。

繊維製品

炭化した織物断片のみである。詳細は第3章4節を参照されたい。

5. 掲載遺物の選定

本報告にあたり以下のような基準を設け、掲載遺物の選別を行った。

土器：遺構内外を問わず、口縁部から胴部、底部については細片を除く全点を掲載した。ただし、オホーツク土器に限っては胴部が無文であることから、貼付文や沈線文などが付され時期を特定できるものや、元の器形を想定し得る大破片に限定し選択することとした。また、破片数の少ない擦文土器、続縄文土器、縄文土器は部位を問わず全点掲載した。

その中で、遺構の検討の際に重要な要素となる一部の土器については同じ層中の出土土器から抽出して掲載している。具体的には、第30図、第46図の2箇所であるが、第46図の配石遺構では完形のトビニタイ土器4個体が出土しており、配石遺構の時期判断に有用であることから覆土出土土器片から擦文土器とトビニタイ土器を抽出して配石遺構に帰属するものとした。一方、第30図は5号竪穴床面出土土器の中から骨塚に伴うと判断される位置関係から出土したものを抽出した。その他の土器図版については時期毎に口縁部から底部、完形個体という順に配置している。

石器：基本、加工痕跡のあるものについては剥片並びにレキ石器を含め全て掲載している。剥片石器の中で、典型的な石核とは言えないが、円レキの原石面を残し微細な加工痕を有し、石核に比類するものを石核状フレイクとして呼称、新設した。加工痕のないレキの中でも特徴的なものがあり、今回、利尻島杵形岬周辺に分布する杵

形溶岩と呼ばれる石材と同じものが見つっている。点数は多くはないが、当時の交易を考える上では重要となるキーアイテムであり、今回の報告では掲載することとした。

骨角器：出土骨角器全点を掲載した。基本的には地点計測遺物であるが、一部廃棄層に含まれる動物遺体の同定作業中に発見されたものも含まれている。また、素材や残片と考えられるものについても加工痕があるものは掲載することとした。

金属器：出土点数が少ないため全点を掲載した。ただし、攪乱や表土中から得られた明らかに現世遺物を判断されるものについては掲載しないこととした。また、神功開竈は斜里町国民健康保険病院で、その他は北海道埋蔵文化財センターにてX線写真撮影を依頼し、実測図と拓本の作成を行った。

繊維製品：2号墓から出土した炭化織物のみであり、第3章4節の中で写真等を掲載している。

(平河内毅、松田功)

第2節 遺構

1. 遺構の概要

検出した遺構はすべてオホーツク文化～トビニタイ文化に属するものであり、他時期の遺構は検出されていない。初年度に設定した調査区TR1～3では土坑1基と焼土木炭範囲、配石遺構1基と、構築の意図が明確な遺構を検出することができなかった（平河内編2014）。しかし、次年度以降に設定した調査区TR4～7では竪穴住居跡2軒（5・23号竪穴）、土坑墓2基、土坑2基、配石遺構2基、廃棄層1箇所、遺物集中1基と、多種多様な遺構を検出することができ、オホーツク文化期の集落機能を考える上で豊富な情報を得ることができた。以下、平成26年度～28年度の発掘調査によって新たに検出された遺構について個別に解説を行う。

2. 5号竪穴（TR5-Pit3）

調査グリッドF-18・19、G-18・19区に位置する竪穴住居跡である。チャシコツ岬の縁辺に位置し、海（北西）側は竪穴の壁が崩落寸前であった。そのため、自然崩壊に伴う本調査として3ヶ年にわたり発掘調査を実施し、完掘した。発掘調査に伴って海側への土砂流出が予想されたが、その対策として海側を掘削せずに残し、壁面をBラインセクションとすることとした。また、Bラインとは直行しないが、南北方向をAラインセクションとしてベルトを設定し、掘削を行った。以下、竪穴の形態および特徴的な内容について記載する。

規模・形態（第6・7図）

本竪穴はオホーツク文化期の焼失住居である。規模は長軸5.4 m、短軸（掘削部）4.4 mであり、軸方向は岬の縁辺に沿って東北東を向く。平面形は緩やかな六角形を呈し、地表面から床面までの深さは約40～70 cmである。また、掘り込み面はⅡ層中、埋土の状況は第6図を参照されたい。

竪穴の内容は一般的なオホーツク文化期の竪穴同様、貼床や石組炉、骨塚を有するがいずれも内容が特徴的なものであった。まず、貼床であるが床面の一部を5 cm程度掘り込んで粘土を充填し、床面と貼床面の高さが揃うように成形されていた。周辺のウトロ遺跡やチャシコツ岬下B遺跡の竪穴では床面を掘り込むことなく粘土を床面上に盛っており、本遺跡のような充填型の例は稀であ

る。また、貼床は焼失時の熱によって赤褐色に変色し、レンガ状に硬化しているが、廃絶後の風化の影響が各所で崩壊が顕著であった。しかし、残存部分や掘り込みの形態からは重複や切り合い関係はみとめられない。

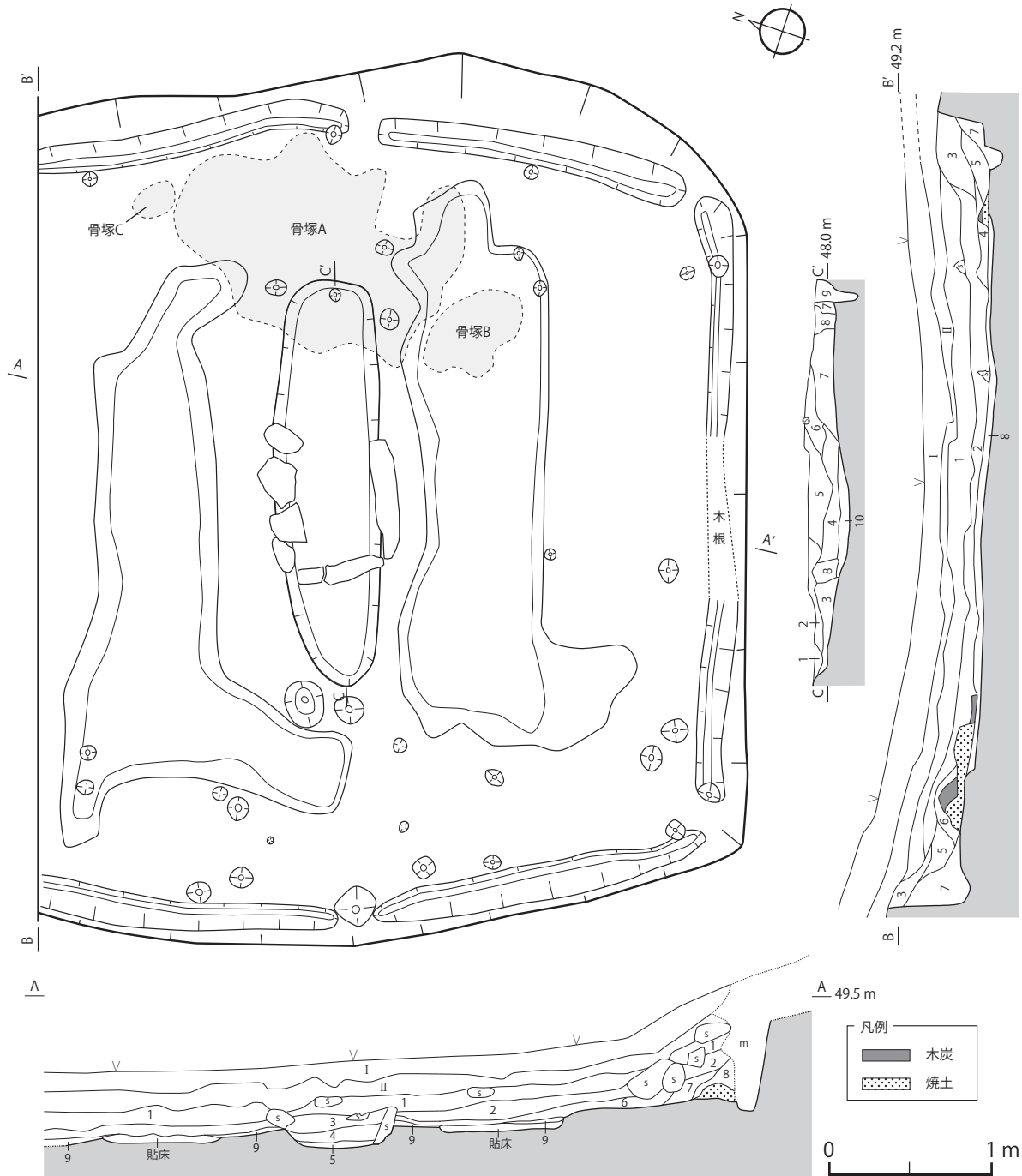
一方、貼床に囲まれた中央部からは長軸約2.5 mの長楕円形の掘り込みが検出され、その中心には東側を開口するように角礫を組み上げた石組炉が構築されていた。小規模な住居にしては炉が大きく、石組炉の両側には玄武岩質の黒色海砂を充填し、囲炉裏的な構造をとっている点が特徴的である。この海砂が充填された掘り込み（以下、囲炉裏）内には焼土が無く、柱穴も検出されていることから石組炉とは異なる機能を有していたと推察する。

また、竪穴の構造に関する痕跡としては柱穴と周溝が検出された。柱穴には径が小さく、深さは3cm程度のもの（第7図24・25・26）も含まれるが、内部に柱状の炭化材が残存していたため小規模ではあるが柱穴として扱った。柱穴配列を見るかぎり、主に奥壁側で2本1対となっている箇所（第7図1・4、3・5、6・15、18・31、19・30、32・33）がみとめられる。このような配列となる理由としては、10 mを超える大型の竪穴の場合は1つの柱穴に複数本の柱をまとめて立てている例がみられるが、本竪穴のように5 m規模の場合はそこまでの強度は必要なく、近い距離に個別に柱を立てて対応していると考えられる。ただし、柱穴9のみ内部に少なくとも2本の炭化材が残存しており、支柱穴は複数本が同じ柱穴内に立てられる場合もあったようである。

周溝は床面外縁に竪穴の輪郭一辺につき一条めぐり、貼床と同様に重複や切り合いは確認されなかった。すなわち、竪穴の平面形や貼床、周溝などの状態から総合的に判断して、本竪穴は同一箇所での建て替えを行っていないものと推察される。

骨塚（第8～12図）

本竪穴では北東壁側の広い範囲に3基の骨塚が遺されていた。まず、最も規模の大きい骨塚Aは約1.8 mの範囲に分布し、ヒグマの掌先・足先の部位を主体として構成されていた。出土時には骨塚Aの上部に黄褐色土が5 cmほど堆積しており、壁の埋め土あるいは屋根上にあった土が倒壊に伴ってなだれ込んだものと考えられる。よっ



TR5 Pit3 (5号竪穴) 土層説明

A-A' ライン

1. 黒褐色土+灰褐色土、粘性なし、しまりなし
2. 黒褐色土+暗黄褐色土 (木炭を多く含む)、粘性弱、しまり普通
3. 黒色砂層、粘性なし、しまりなし
4. 黒褐色土層、粘性弱、しまり弱
5. 赤褐色粘土、粘性なし、しまり強
6. 暗褐色土+暗黄褐色土、粘性弱、しまり弱
7. 暗褐色土、粘性弱、しまり強
8. 暗黄褐色土、粘性強、しまり普通
9. 黒褐色土 (焼土粒と木炭を含む)、粘性普通、しまり弱

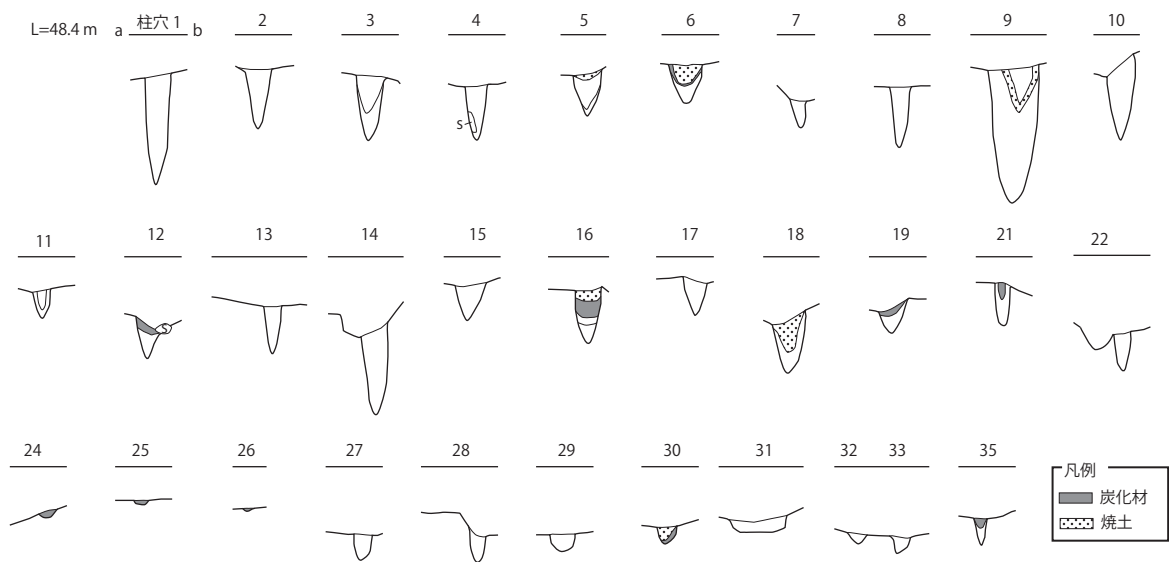
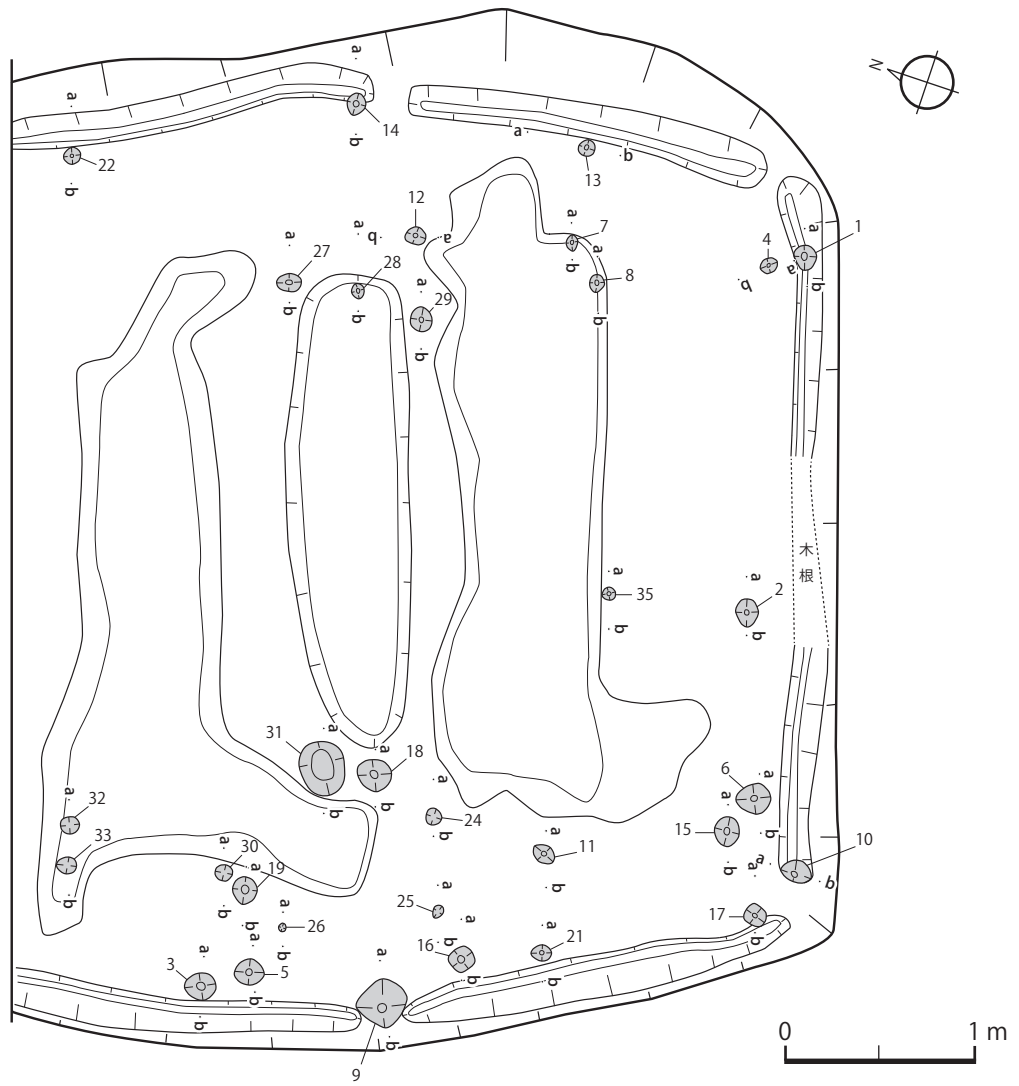
B-B' ライン

1. 黒褐色土+灰褐色土、粘性なし、しまりなし
2. 黒褐色土+暗黄褐色土 (木炭を多く含む)、粘性弱、しまり普通
3. 暗褐色土、粘性弱、しまり弱
4. 暗褐色土+黄褐色土、粘性普通、しまり普通
5. 暗黄褐色土、粘性強、しまり強
6. 黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり普通
7. 黄褐色ローム、粘性強、しまり普通
8. 黒褐色土 (焼土と木炭を含む)、粘性普通、しまり弱

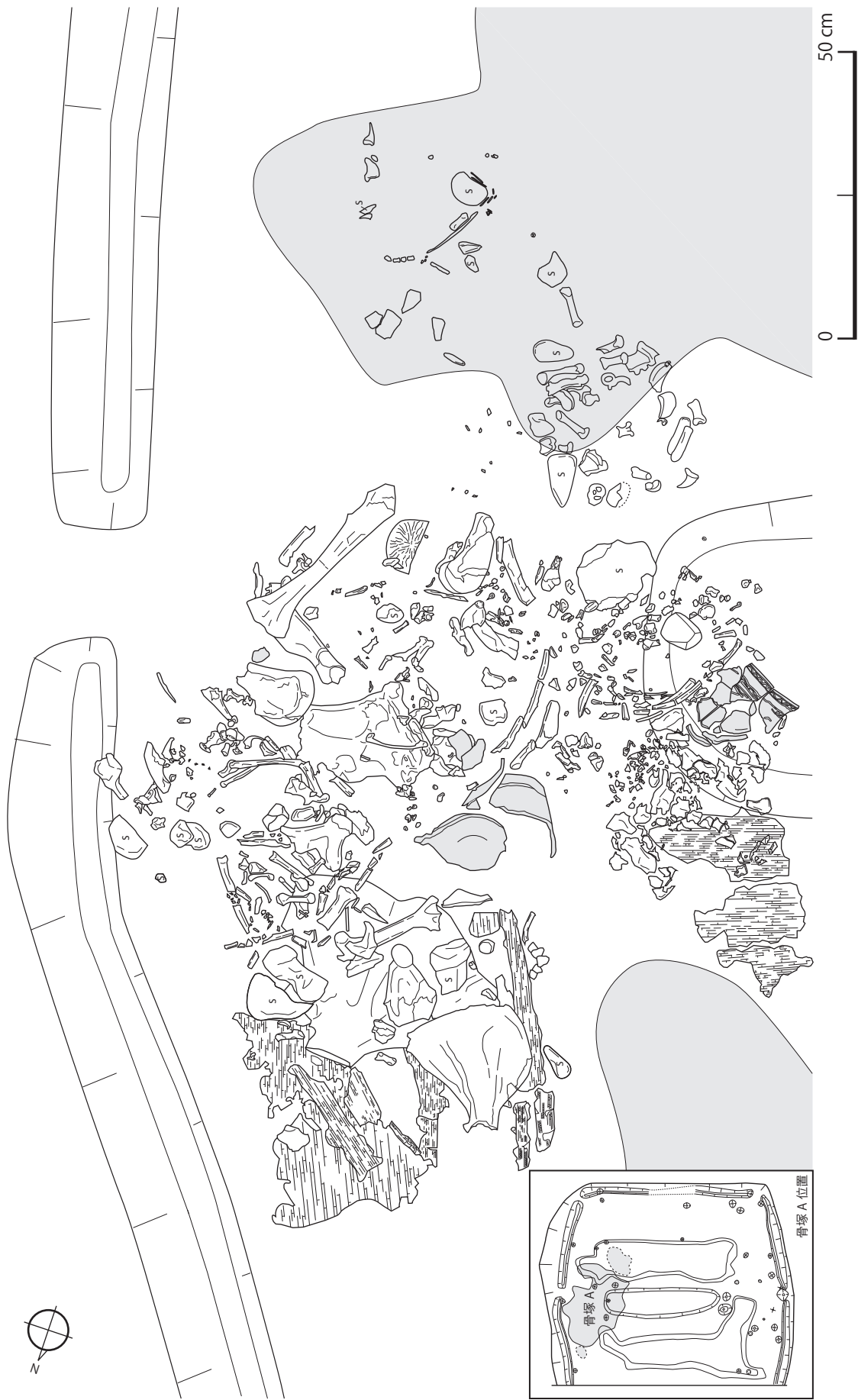
C-C' ライン

1. 茶褐色粘土、しまり強い
2. 黒色砂、粘性なし、しまりなし
3. 茶褐色砂 (焼骨を多数含む)、粘性強、しまり弱
4. 黒色砂層、粘性なし、しまりなし
5. 黄褐色土+赤褐色土、粘性普通、しまり普通
6. 黒褐色砂層、粘性なし、しまりなし
7. 茶褐色砂層、粘性なし、しまりなし
8. 暗褐色土、粘性普通、しまりなし
9. 暗褐色土、粘性普通、しまり普通 (柱穴 28)
10. 赤褐色土、粘性なし、しまり強 (レンガ状)

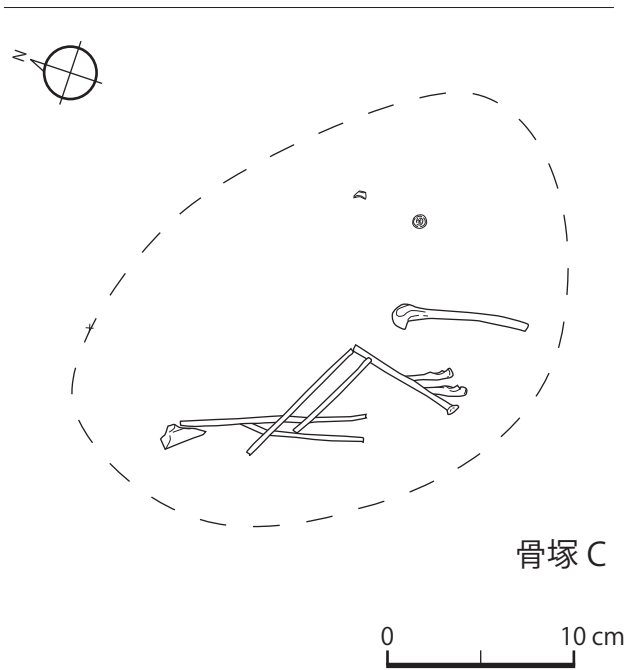
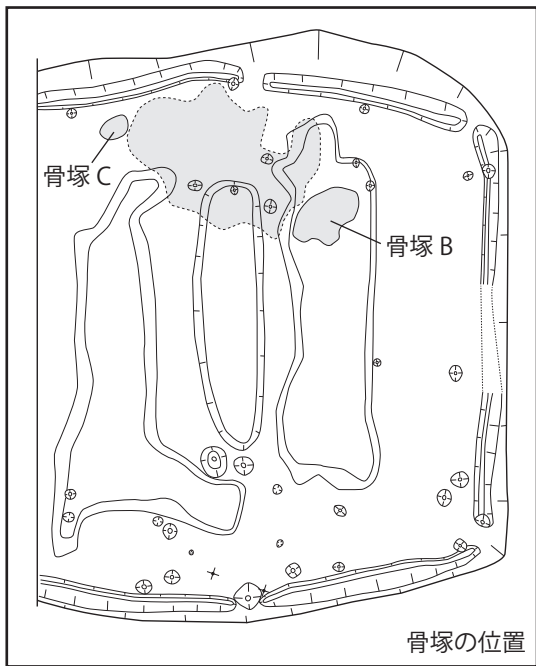
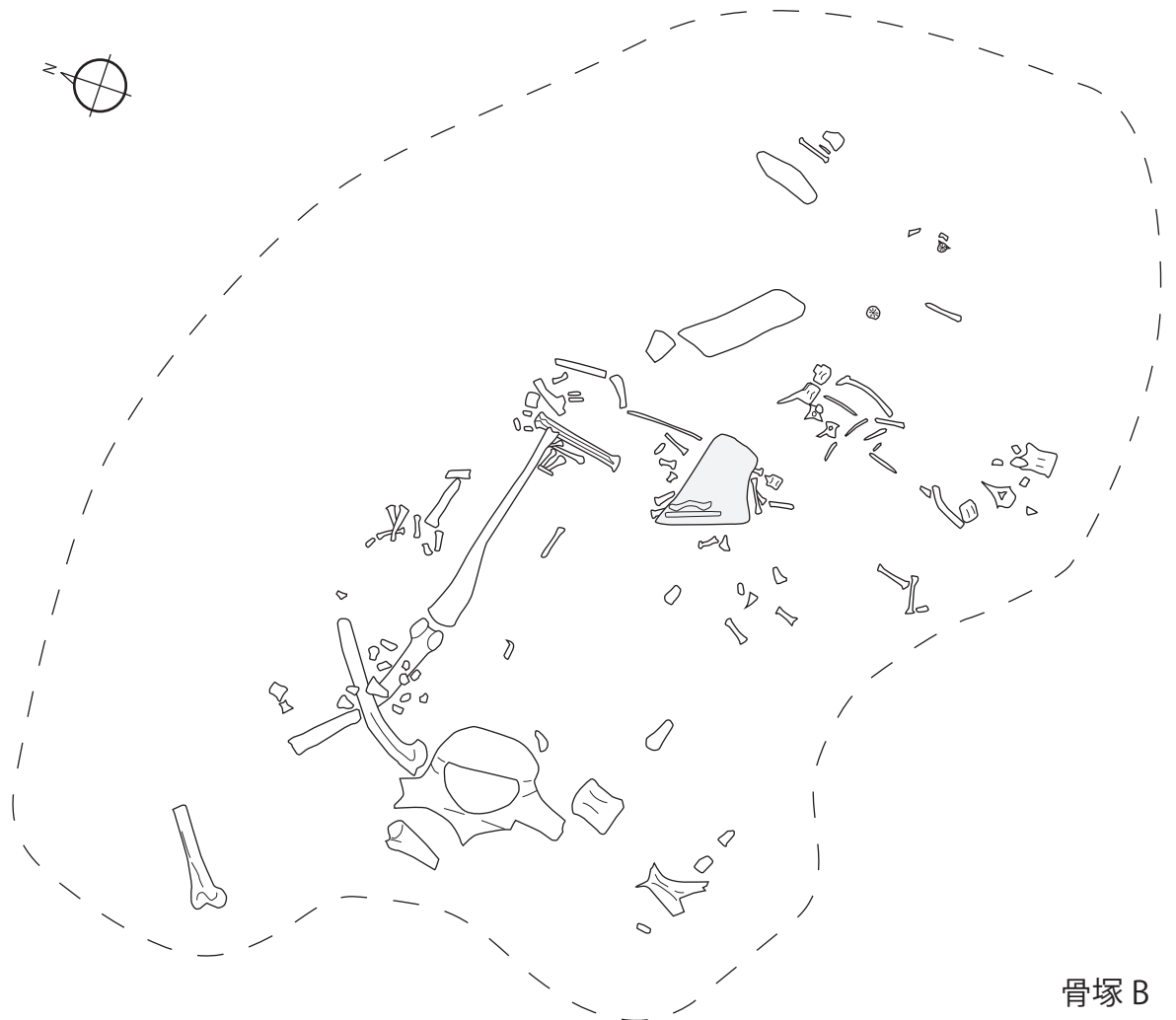
第6図 5号竪穴(TR5-Pit3)



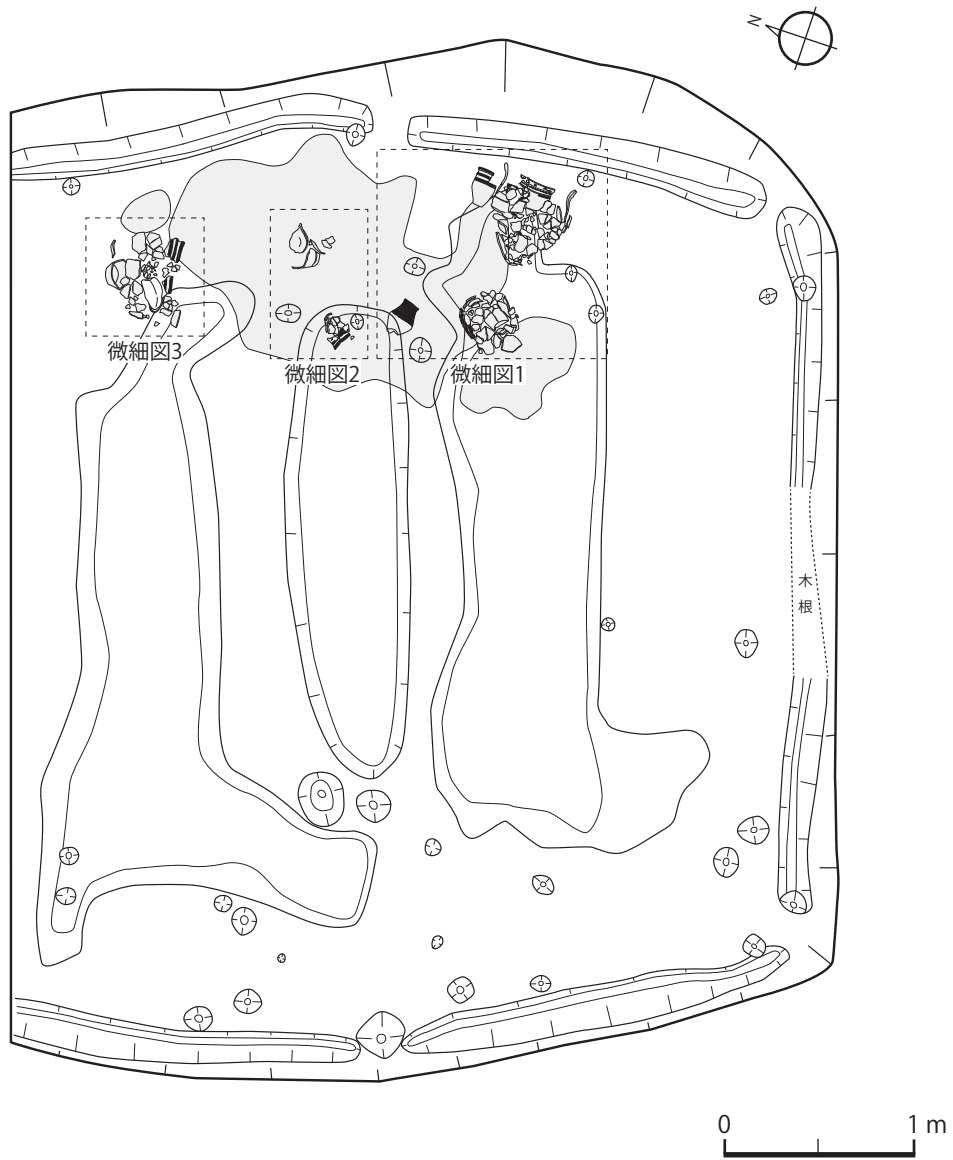
第7图 5号竖穴(TR5-Pit3)柱穴配置图



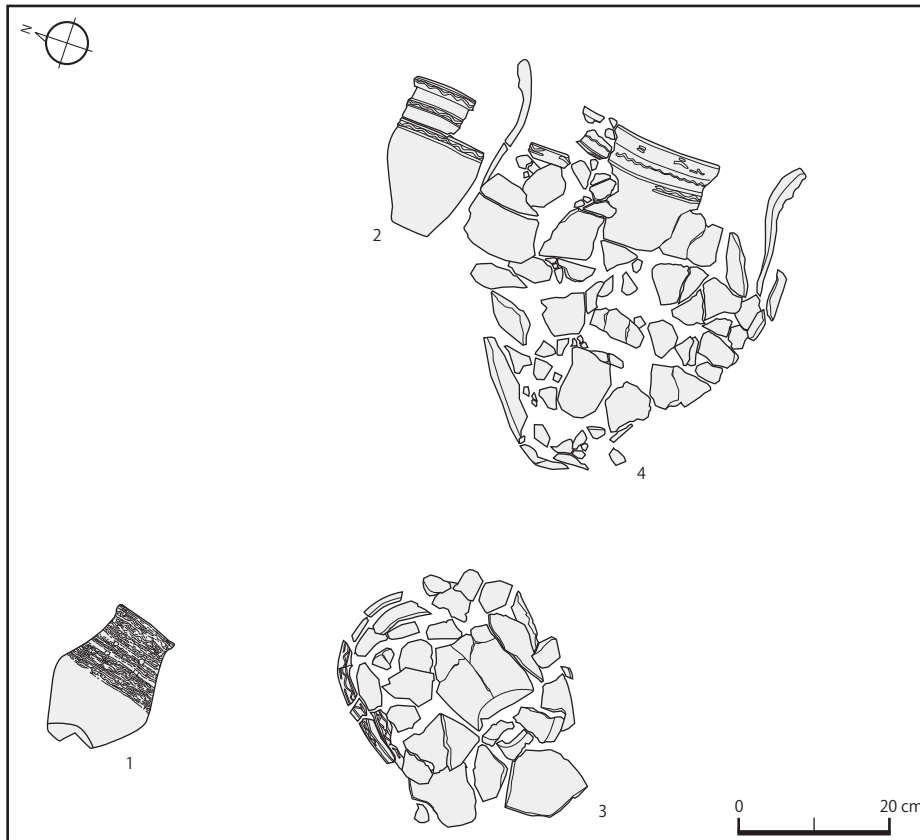
第8図 5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚A 微細図



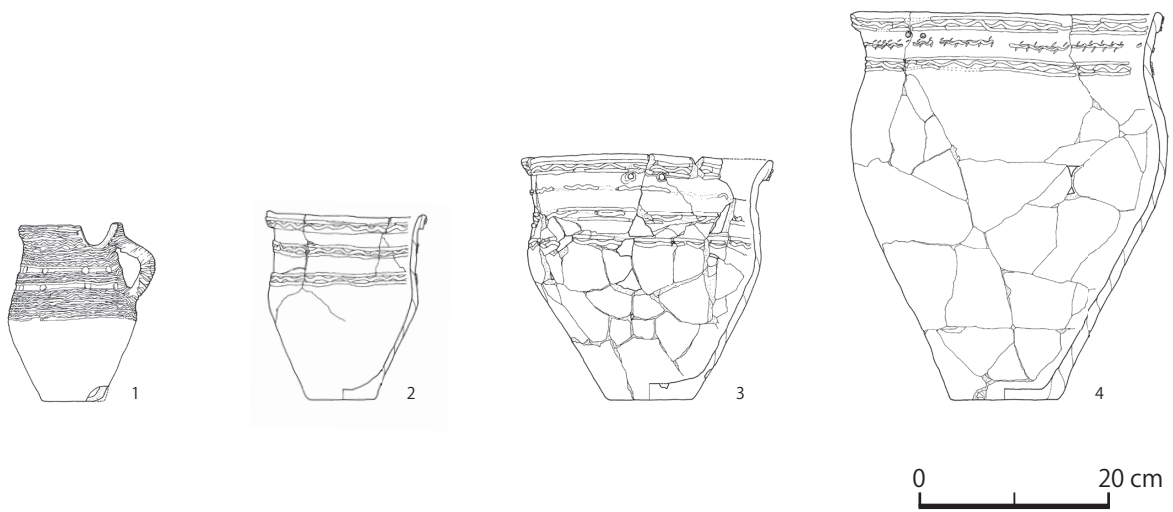
第9図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚B・C 微細図



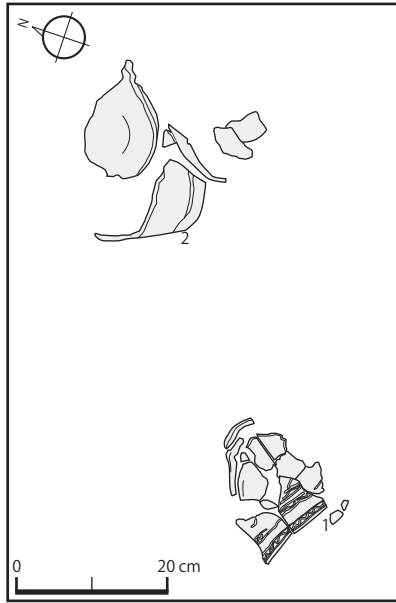
第10図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚出土土器 位置図



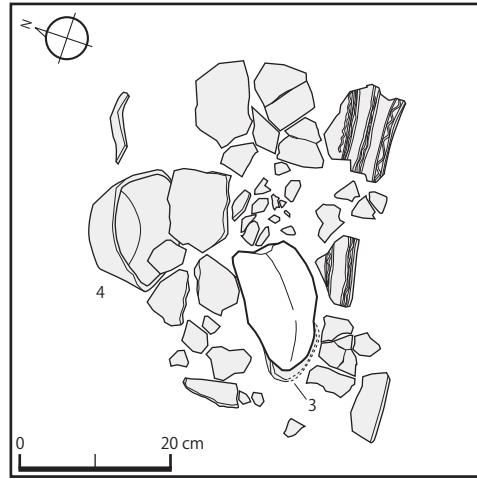
微細図 1



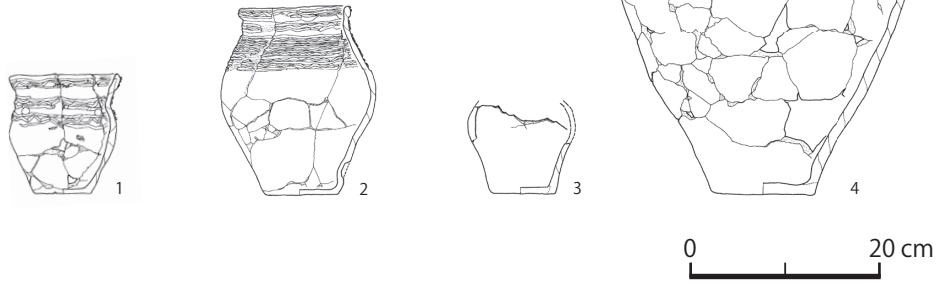
第11図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚出土土器 微細図(1)



微細図 2



微細図 3



第12図 5号竪穴 (TR5-Pit3) 骨塚出土土器 微細図(2)

て、集積されていた動物遺体が住居倒壊の際に分散し、範囲が囲炉裏や貼床上まで及んだものと推察される。また、一部では骨塚下に板材が敷かれている箇所が確認された点も留意すべきである。

一方、ヒグマを主体とする骨塚Aに対し、やや南側の貼床上に位置する骨塚Bはキタキツネやエゾクロテンなどの中型食肉目を主体としたものであった。骨塚Bは貼床に接地し、規模は0.5 m以下である。位置に関しては骨塚Aの集中部からやや離れた位置に集積が認められたため、独立するものとして扱った。

次いで規模の小さな骨塚Cは骨塚Aの北側に位置するが、保存状態が極めて悪く、現場段階では粉化した動物骨の中に小動物の四肢骨と魚骨がかろうじて確認出来る程度であった。そのため、本来の構成については不明確である。

以上のように規模や内容の異なる3基の骨塚がすべて開口部側から検出されているわけであるが、その周囲には約8個体の完形のオホーツク土器が伴っていた。これらの土器にはセット関係が見られ、大型土器と中型もしくは小型の土器が揃って出土する傾向がうかがえる。具体的には第11図2・4が同一方向に口縁を向けて置かれ、1は把手部が下になり、底部に穿孔があることから1・3はおそらく倒置された状態で置かれていたと推察される。また、第12図3・4も同一方向に口縁を向けて配置されている状況が確認された。

つまり、本竪穴では多数の完形土器や骨塚すべて開口部側に集中し、奥壁部には完形土器はおろか一切の骨集積も認められないという偏りが認められるのである。この特異な状況については3章総括の中で改めてふれることとしたい。また、これらの骨塚を構成する動物遺体については第3章8節の分析を参照されたい。

床面炭化材（第13図）

竪穴床面から多量の床板材、周溝からは壁材や柱材が検出された。第13図に示されるように、一部では貼床上にも床板材が残存していることから、広い範囲が板敷きであった可能性があげられる。これらの床板材の木目を観察したところ、ほとんどの床板材が近接する壁面と直角方向に木目が向いているが、骨塚Aの下に敷かれた板材のみ例外であった。この状況は骨塚Aとの関連で考える必要があり、意図的に木目の方向を変えていた可能性や何らかの構造物があったことも考えられる。

また、板材は床面だけでなく壁面に沿って立った状態

で検出されており、土留め用であったと推察される（第13図761・828・829・831・832・833・3540）。このように床面炭化材は大きく床板材と壁材に分けられるが、例外的に炉の木杵ともとれる丸太材（第13図644）や樹皮（第13図274・647・796）も含まれる。

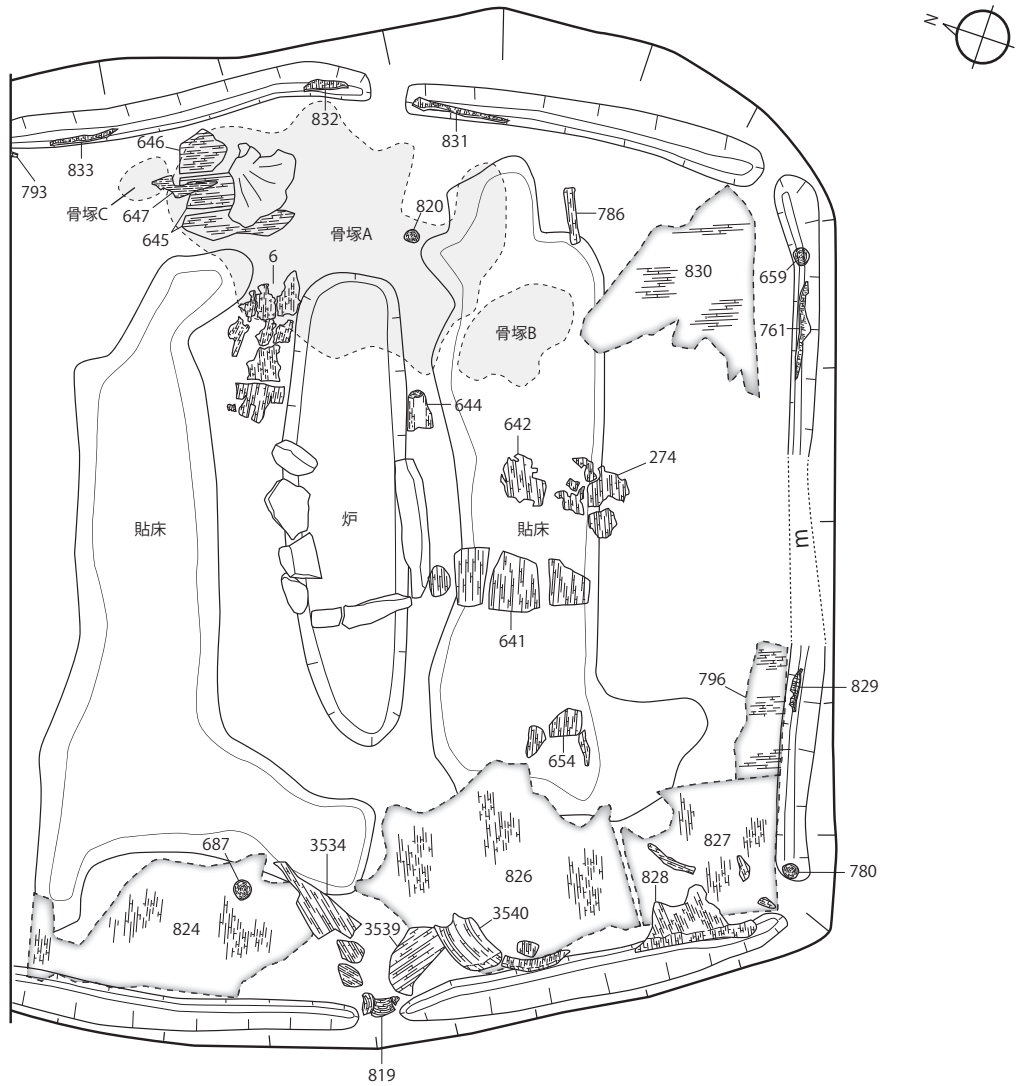
これら多くの材は比較的保存状態が良好であったが、床板材などは継ぎ目などが現場で確認出来ない程に灰化しており、炭化材範囲を一括で図化するほかない状況であった（第13図796、824、826、827、830）。そのため、保存状態の悪い炭化材については比較的状态の良い部分をサンプリングし、その他の炭化材と合わせて樹種同定を実施した。同定結果については第3章5節に詳細を掲載するため、本節ではその概要を記す。

床面炭化材のうち最も多く利用されていたのがモミ属であり、遺跡周辺の環境からトドマツと推察される。主に南北の壁材（第13図828・831・833・3539・3540）や貼床上の床板材（第13図641・642・654）などに利用され、骨塚Aの下にも板材として敷かれている（第13図646）。さらに、主柱穴9内や柱穴12からも検出されており、柱材としても使用されていることから場所を問わず、最も一般的に用いられていたものと捉えられる。

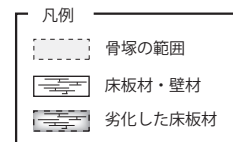
次いで多いのはイチイである。イチイは反りや割れが少なく、柱材としても十分な強度を保持している。そのため、本竪穴でも主として柱材として利用されている（第13図659・687・780）。この他に針葉樹だけでなく、カツラ、コナラ属コナラ節、クルミ属、ニレ属、トネリコ属など広葉樹も利用されているが、主に遺跡の周辺に多く生育していた加工が容易なモミ属（トドマツ）やイチイを建築材として選択していたと考えられている（第3章5節）。

形成年代

床面で検出された柱材2点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、2点とも一致した結果を示しており、1σ 暦年代範囲が8世後葉～9世紀前葉、2σ 暦年代範囲で8世紀中葉～9世紀後葉という結果であった。この結果は床面出土土器群の時期ともほぼ整合的といって良いだろう。ただし、測定資料が最終形成年輪ではないため、古木効果の影響も考慮し、1σ 暦年代範囲よりもやや新しい年代となる可能性も考えられる。



番号は樹種同定した炭化材(第3章5節を参照)



第13図 5号竪穴(TR5-Pit3)床面炭化材 位置図

3. 5号竪穴上層配石遺構 (TR5)

本遺構はF-18・19、G-18・19区に位置する。5号竪穴を掘削中に覆土中から検出されたものであり、当初は竪穴の屋根上にあったレキが竪穴の倒壊に伴って落下したのと考えたが、レキは一切被熱しておらず、竪穴中央だけでなく壁面に沿って扁平なレキが敷かれていることから5号竪穴とは別の遺構と認識した。面的な広がりを確認するべく調査を継続した結果、配石に伴って複数の完形土器群が出土したことからも、5号竪穴廃絶後に構築された配石遺構であると認定した。

規模・形態 (第14図)

配石は約4 mの範囲にわたって認められた (第14図)。検出面の深さは地表面から約20～30 cmであり、5号竪穴の床面からは明らかに離れて存在していた。主に扁平な角礫を用いており、直径30～40 cm程度のものが主体となって構成されている。これらのレキはチャンコツ崎の上では採取できない岩石 (安山岩) であり、外部からの持ち込みが想定される。

レキの配置を見るかぎり、中央部だけでなく南側の斜面にも広がっており、一見雑然と配されているようにとれる。しかし、下層に5号竪穴の骨塚が存在する位置にはレキの集中が存在せず、全く範囲が重ならないことから意識的に避けて本遺構を構築した可能性が高い。したがって、本遺構が構築される際に下層の骨塚あるいはそれに伴う土器群の一部が露出していたと推察される。

出土土器群 (第14・15図)

配石遺構と同一面から4個体の完形土器がまとまって出土しており、配石遺構に伴い同時に廃棄されたものと推察される (第14・15図)。これら土器群の出土地点は中央部の配石群を挟んでおおまかに東西に分かれ、東側からは大型と中型 (第15図1・3)、西側からはやや大型と小型のトビニタイ土器が出土した (第15図2・4)。配置は意識的ともとれるが、何を意図しているのかは不明である。

形成年代

配石遺構と同レベルで出土した炭化材1点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 σ 暦年代範囲が8世紀初頭～中葉という結果であった。本来であれば5号竪穴よりも新しい年代値となるはずであるがやや古い測定値が出ており、要因としては古木効果の影響が考えられる (第3章6節)。

また、年代値とは不整合であるが、配石遺構と同一面

から完形のトビニタイ土器群 (第46図10～13) が出土しており、トビニタイ文化期に属するものと推察される。

4. 23号竪穴 (TR7-Pit6)

A-8、a-9、A-8、a-9区に位置する竪穴住居跡である。本竪穴はチャンコツ岬の中央付近に位置し、22号竪穴と隣接している。これら22・23号竪穴の上層にはオホーツク文化期の廃棄層が形成されており、柱状サンプルの採取および竪穴の時期確認のため1 m×3 mのトレンチ (TR7) を設定し調査を実施した。以下、竪穴の形態および22号竪穴と廃棄層との関係について記載する。

規模・形態 (第16図)

本竪穴はオホーツク文化終末期の竪穴住居跡である。地表面での観察から規模は7 m程度で、軸方向はおおよそ22号と同じ北東方向と考えられる。床面までの深さは掘削部で地表面から約0.8～1.1 mと深く、上層に廃棄層が厚く堆積していることがうかがえる。

これらの廃棄層 (1～3層) の下層には黄褐色土を基本とする土層 (4～7層) が厚く堆積しており、22号竪穴構築時の掘り上げ土と考えられる。それらを除去すると23号竪穴の床面から魚骨集中が検出され、わずか1片ではあるが魚骨中から貼付文系のオホーツク土器も出土している。

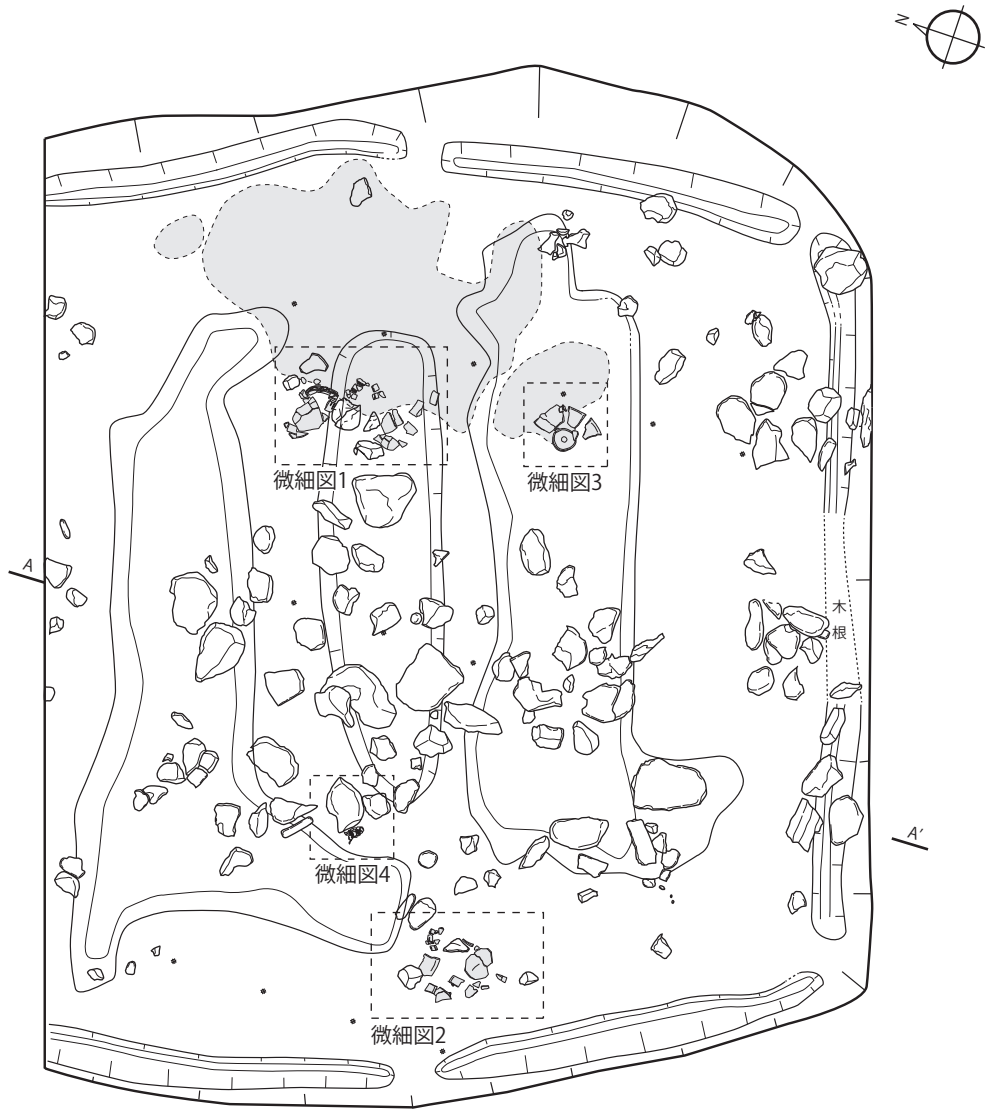
竪穴の一角しか調査していないため詳細な内容は不明であるが、貼付文系のオホーツク土器の出土および周溝の存在と合わせてもオホーツク文化期の竪穴住居跡であることは疑いない。

切り合い関係

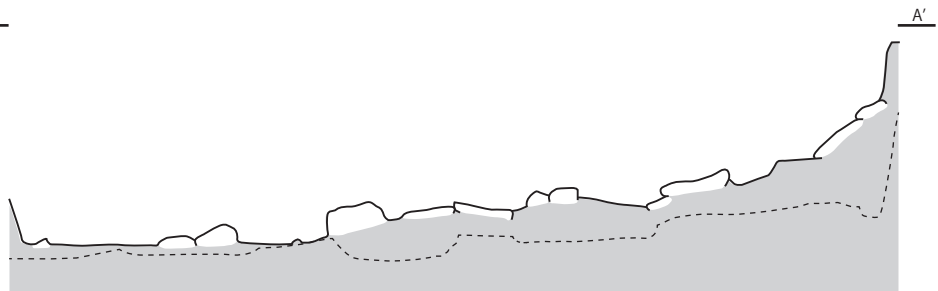
調査の結果、23号竪穴には22号竪穴の掘り上げ土と考えられる黄褐色土の堆積が確認された。したがって、23号廃絶後に22号が構築されたと推察される。さらに、廃棄層は両竪穴にまたがるように堆積していることから、22号竪穴の廃絶後間もなく形成されたことがわかる。つまり、23号→22号→廃棄層の順に遷移していると推察される。

形成年代

床面の魚骨集中から得られた炭化種実1点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 σ 暦年代範囲が7世紀初頭～中葉という結果であった。床面出土土器はオホーツク文化後期～終末期頃のものであるが、一方で年代値としては土器の示す時期よりも古い



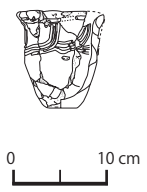
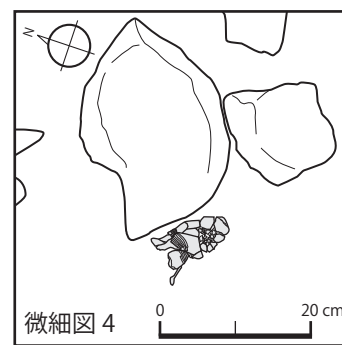
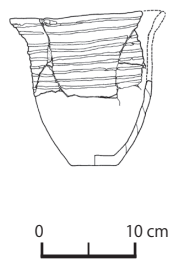
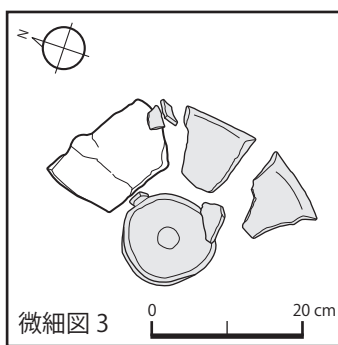
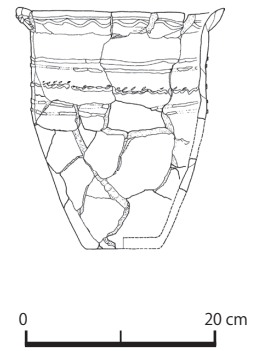
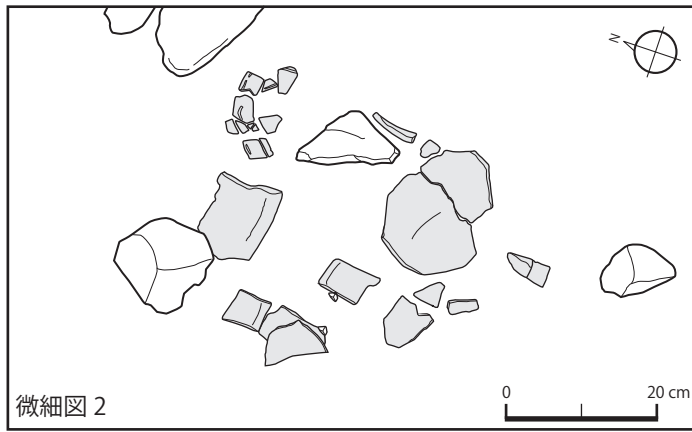
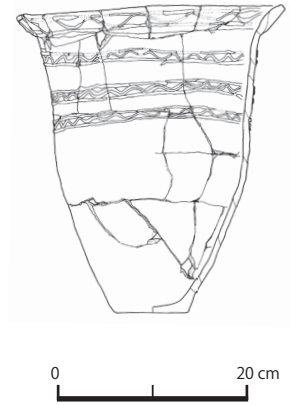
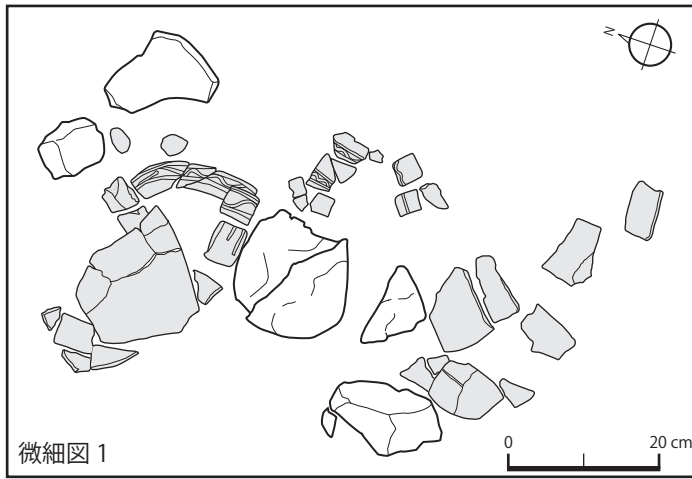
49.8m A



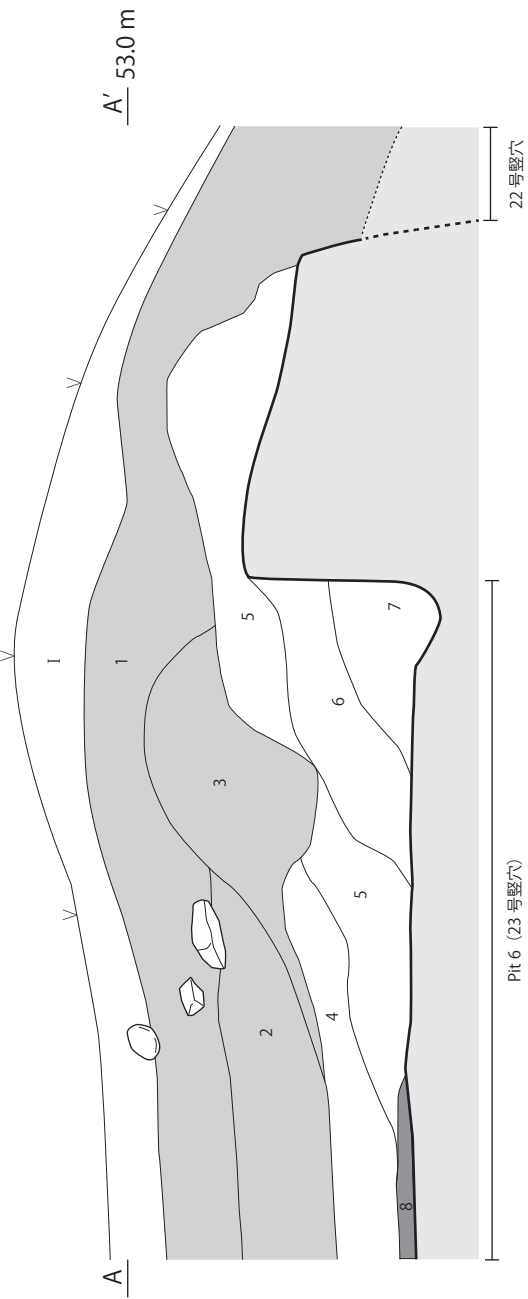
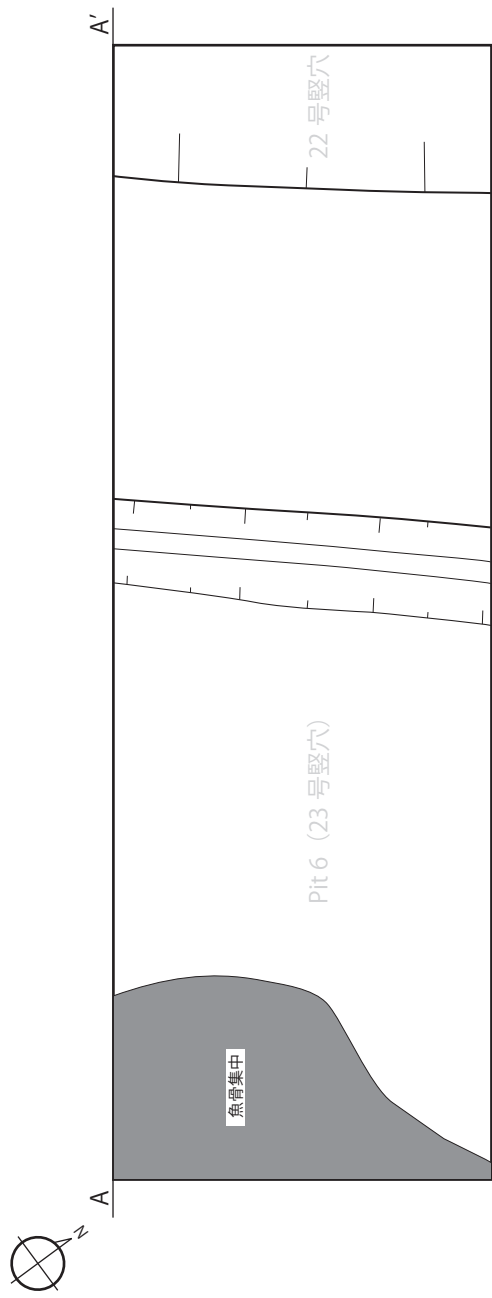
配石遺構南北 エレベーション (竖穴床面は想定ライン)

0 1 m

第14図 5号竖穴上層配石遺構 (TR5)

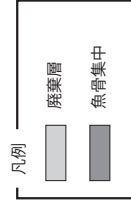


第15図 5号竪穴上層配石遺構(TR5)出土土器 微細図



TR6 Pit 5 23号竖穴土層説明

1. 廃棄層：暗褐色土+海砂、粘性無し、しまり無し
2. 廃棄層：褐色土+海砂（1より細粒）、粘性無し、しまり無し
3. 廃棄層：白色砂（焼骨片含む）+暗褐色土、粘性無し、しまり無し
4. 22号掘り上げ土：暗黄褐色土（廃棄層の骨片を部分的に含む）
5. 22号掘り上げ土：暗黄褐色土、粘性普通、しまり強
6. 22号掘り上げ土：黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり強
7. 22号掘り上げ土：黄褐色土、粘性普通、しまり強
8. 魚骨集中



第16図 23号竖穴 (TR7-Pit6)

値が得られている。前述のように、本竪穴が22号竪穴や廃棄層よりも古いことは切り合い関係からも明らかであるが、7世紀頃まで遡るといのは少々疑問の残る点であり、今後再検証すべき課題である。

5. 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7)

22・23号竪穴の窪地に形成されたオホーツク文化期の廃棄層である。

平成27年度に遺跡内を踏査した際、地表面に多量の魚骨が露出していたことから、一帯を廃棄場と認識し、平成28年度に調査を実施した。調査にあたっては廃棄層の分層が困難であったため、東西方向をA、B、南北方向を1～6に分け、50 cm角の小区を設定し、コラムサンプルを採取した。最も良好なコラムサンプルが得られたA-1・B-1については動物遺体の同定を委託業務として実施したため、結果は第3章8節を参照されたい。

堆積状況 (第17図)

1層を除去すると暗褐色土と海砂から成る廃棄層(1層)が20～30cm程堆積しており、22号竪穴および23号竪穴の窪地を埋める形で堆積がみとめられた。23号竪穴の窪地の方が明らかに浅く、平面形も不明瞭なことから23号竪穴に集中的な廃棄を行ったと推察される。

続く2層は層厚25cm程で、海砂がより細粒となり土壌も褐色であるため、1層と区別して扱った。1・2層はいずれも大量の魚骨を包含し、貼付文系のオホーツク土器片なども多く出土している。

さらに下層には白色砂と暗褐色土からなる3層が堆積し、他の廃棄層より焼骨片が多く含んでいる印象を受けた。層厚は最大45 cm程で、Aライン断面図では盛り上がるような堆積状況が認められることから、局所的な廃棄に伴うものと推察される。また、3層の上面から奈良時代の貨幣である神功開宝1枚が出土しており、当該期に廃棄層中に混入にしたものと考えられる。

形成年代

廃棄層中から出土した炭化種子1点について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1σ暦年代範囲が8世後葉～9世紀前葉という結果であった。この結果は、廃棄層中より出土した神功開寶の流通時期とも整合的であり、本遺跡の年代幅を考える上でも重要な要素といえる。

6. 1号墓 (TR4-Pit1)

調査グリッドB-10区に位置する土坑墓である。集落

内の平坦地利用を探るべく設定したトレンチ (TR4) 内から検出されたものであり、墓の検出は初例であったため内容解明を目的として完掘することとした。調査にあたっては、南北方向をA-A'、東西方向をB-B'としてセクション面を設定し、埋土の状況観察や記録等を行った。以下、墓の形態や時期等について記載する。

規模・形態 (第18・19図)

N-64°-Eを軸とするオホーツク文化期の土坑墓である。平面形は不整形であるが、坑底は意識的に隅丸長方形に掘削されている。全体規模は長軸約1.5 m、短軸1.3 mであるが、坑底が段状に深くなる構造であった。坑底面は長軸約1.0 m、短軸約0.6 mとひと回り小さくなる。掘り込み面はⅡ層中、最深部までの深さは約45 cmであり、底面は平坦で段状に緩やかに立ち上がる。

埋土は1～5層まで分層でき、暗褐色土と黒色土から成る2層は遺体の腐蝕に伴う土層沈下がみられる。

また、墓坑周辺に配されたレキは直径約5 cmのものから40 cm程のものまで大小様々であるが円礫を用いる点に関しては一貫性がみられる。平面分布範囲は約1.5～2.0 m、墓坑の外部にまで広がっている。一方、垂直分布は墓坑上から2層中までであり、土層の沈下に伴って墓坑内に落ち込んでいる様子が確認された。

遺物分布 (第20図)

第20図は掲載遺物の出土地点を示したものである。平面分布を見るかぎり、墓坑の範囲内に分散する傾向がみとれる。完形土器は墓坑中央よりやや西側から出土し、歯列の出土地点の真上にあたる。これより、完形土器は被葬者の頭部に被せられた状態(被甕)であったと推察される。また、人骨の周囲からは鉄製針1点が出土している。一方で、坑底から出土する例の多い刀子に関しては逆に北側の覆土上層から出土しているため、埋葬後に置かれたか混入した可能性も考えられる。

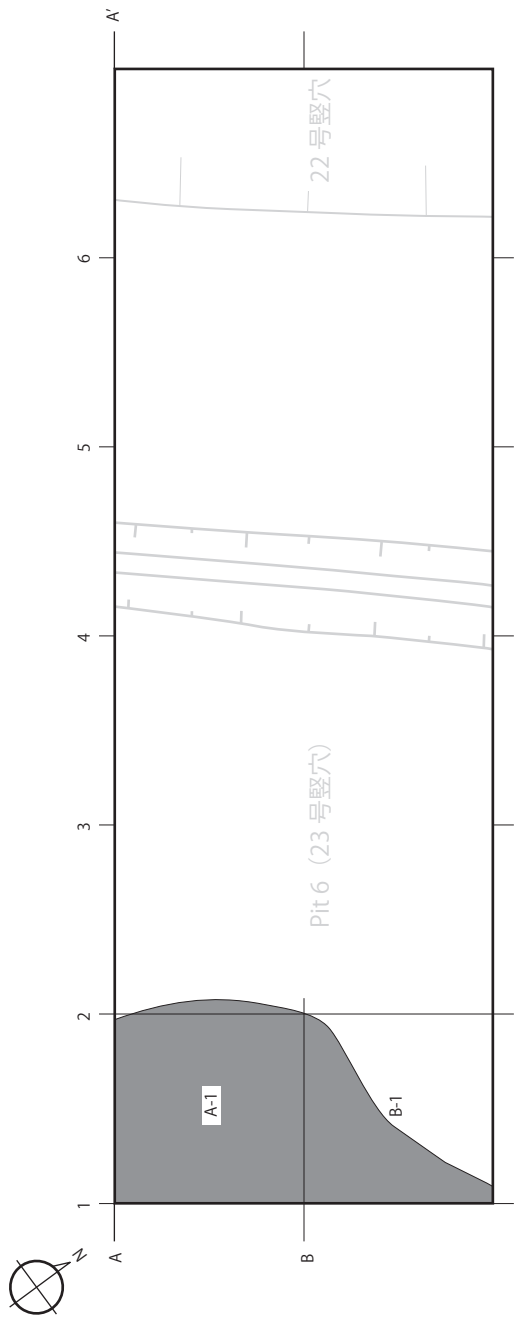
埋葬遺体 (第20図)

頭位は被甕の位置および人骨(歯)の出土位置から判断して南西である。人骨は歯のみの出土であったため詳細な埋葬姿勢は不明であるが、墓坑の規模と被甕および人骨(歯)の出土地点から屈葬と推察する。

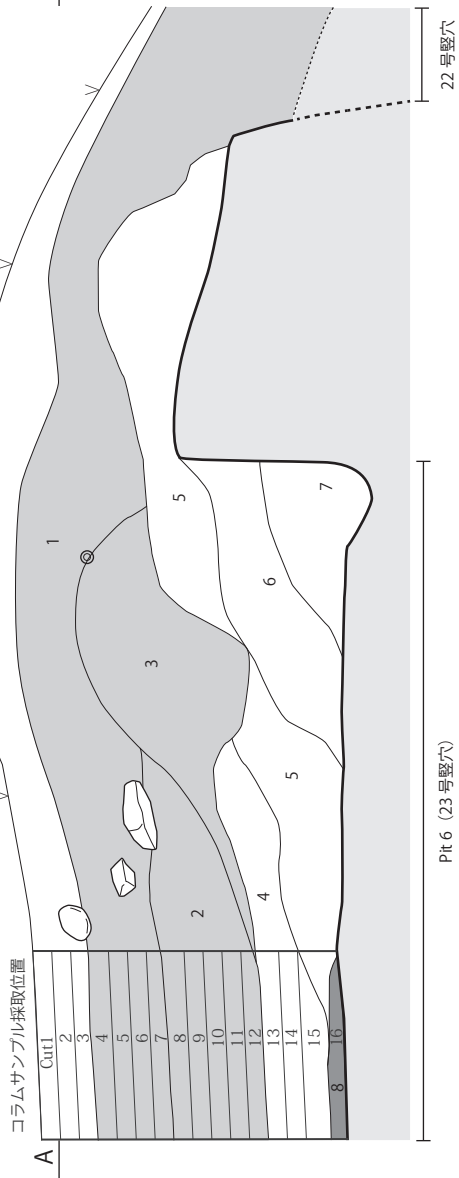
また、出土した人骨(歯)は摩耗が弱く、年齢は20歳に達していたかどうかという分析結果であった(第3章7節石田)。

形成年代

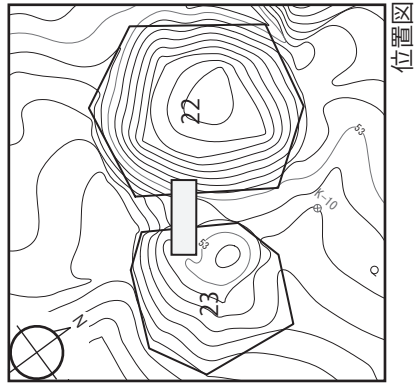
出土土器(第53図3)の内面付着炭化材1点について



コラムサンプル採取位置
A' 53.0 m

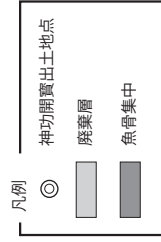


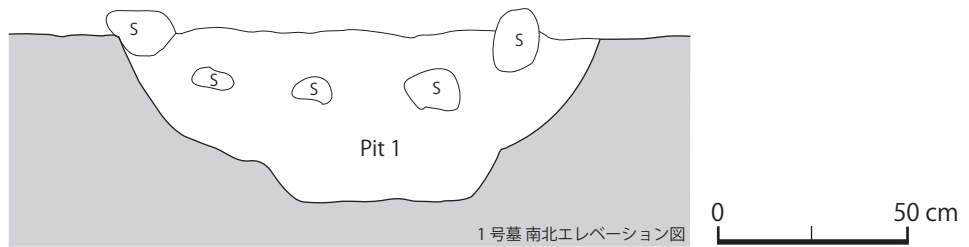
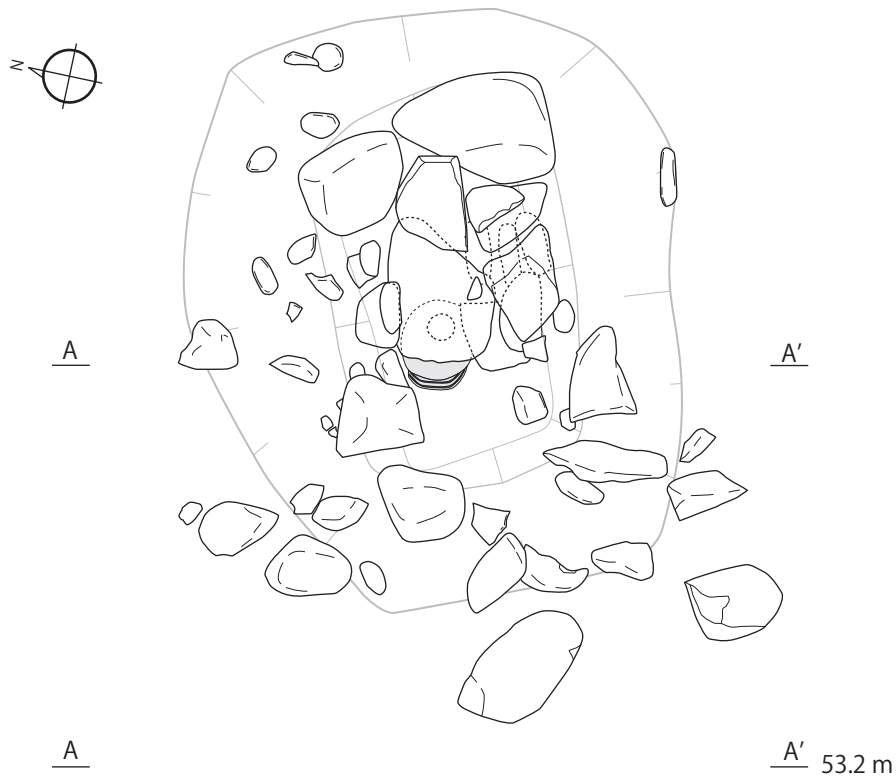
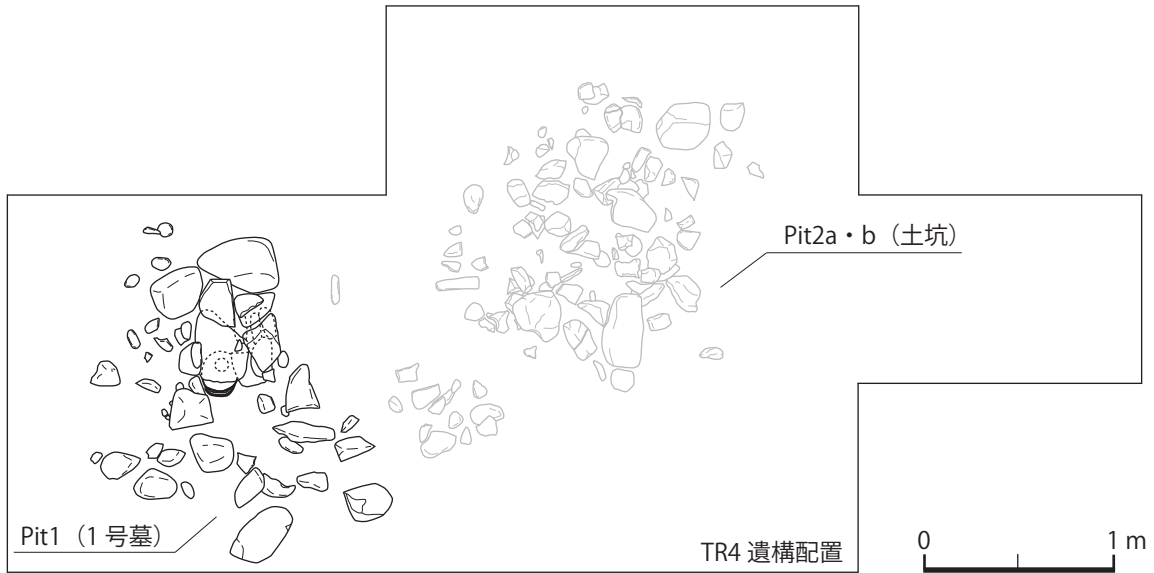
第17図 22・23号竖穴上層廃棄層 (TR7)



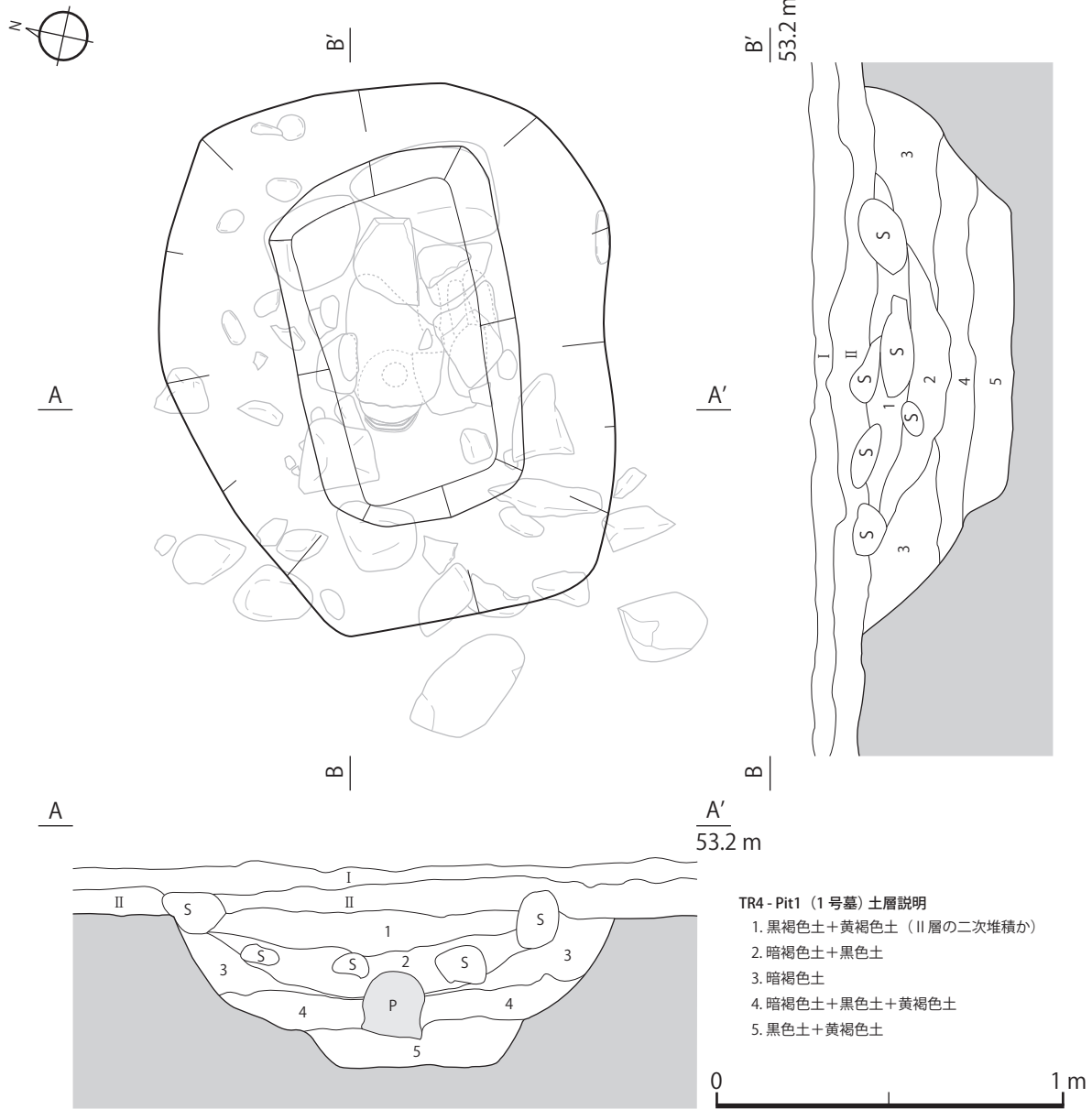
TR6 Pit 5 23号竖穴土層説明

1. 廃棄層：暗褐色土+海砂、粘性無し、しまり無し
2. 廃棄層：褐色土+海砂 (1より細粒)、粘性無し、しまり無し
3. 廃棄層：白色砂 (焼骨片含む)+暗褐色土、粘性無し、しまり無し
4. 22号堀り上げ土：暗黄褐色土 (廃棄層の骨片を部分的に含む)
5. 22号堀り上げ土：暗黄褐色土、粘性普通、しまり強
6. 22号堀り上げ土：黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり強
7. 22号堀り上げ土：黄褐色土、粘性普通、しまり強
8. 魚骨集中

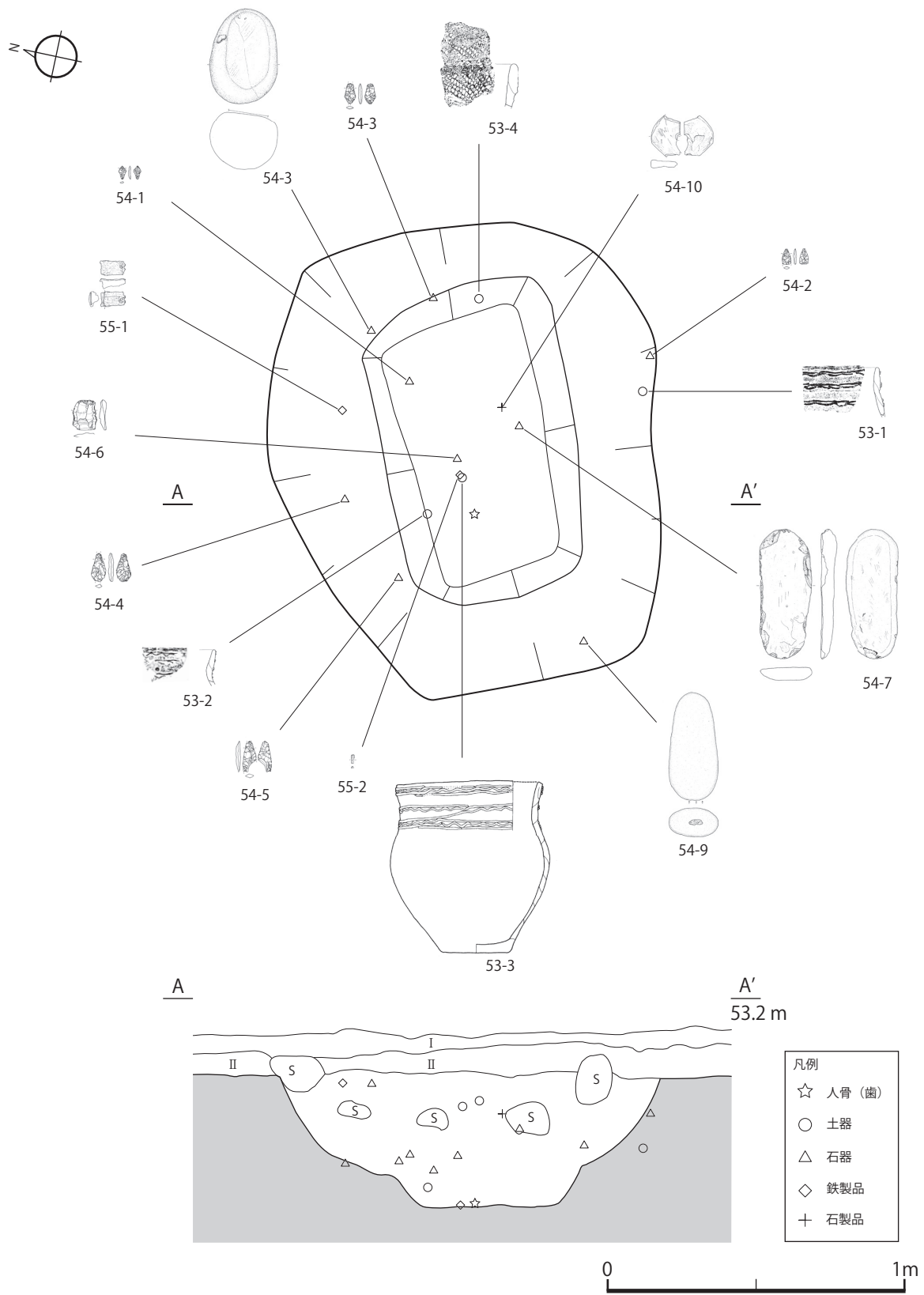




第18図 TR4遺構配置および1号墓積石分布図



第19図 1号墓 (TR4-Pit1)



第20图 1号墓(TR4-Pit1)揭载遗物分布图

て、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 σ 暦年代範囲が5世後葉～6世紀前葉という結果であった。この結果は出土土器の時期と不整合であり、オホーツク文化前期に頃相当する。年代値が古く出た要因としては、土器内で煮炊きされた海産物に由来する海洋リザーバー効果が考えられる。これを受け、遺構の年代値を検証するために覆土中出土の炭化種実（クルミ核）で再測定したところ、1 σ 暦年代範囲8世紀後葉～9世紀前葉という測定結果であった。出土土器の時期ともほぼ整合的であり、1号墓の年代は後者が信頼に値するといえよう。

7. 2号墓 (TR5-Pit4)

調査グリッドG-19区に位置する土坑墓である。5号竪穴の層位を確認するためにトレンチを拡張した際に検出されたものである。岬の縁辺部にあつて自然崩壊の危機に晒されていたため、5号竪穴同様に完掘することとした。調査にあつては、東西方向をA-A'、南北方向をB-B'としてセクション面を設定し、埋土の状況観察や記録等を行った。以下、墓の形態や時期等について記載する。

規模・形態 (第21・22図)

N-53°-Eを軸とするオホーツク文化期の土坑墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底はやや起伏がみられる。規模は長軸約0.7 m、短軸約0.5 mと小さく、掘り込み面はⅡ層中、最深部までの深さは0.5 m程度であった。立ち上がりは南西側では急に、北東側は緩やかである。埋土は1～5層まで分層でき、中でも2・3層は黄褐色土を基本とすることから、Ⅳ層に由来する墓坑の掘削土と考えられる。また、遺体の腐蝕に伴う土層の沈下もみとめられた。

さらに、墓坑上部には直径30～50 cm程の円礫が約1.3 mの範囲に円形に積み重ねられていた。これらの使用された礫はすべて岬外からの搬入されたものであり、おそらく海岸部で採取したものと推察する。

遺物分布 (第23図)

出土遺物はほぼすべてが墓坑上部に分布が偏る傾向がみられる。刀子などの副葬品だけでなく人骨（歯）も墓坑上から出土しており、歯に伴ってオホーツク土器の底部と口縁部破片が出土している。また、石器の出土が全く見られない一方で、覆土中からは合計12.0 gの黒曜石の細片が確認された。1号墓とは異なる状況であり、本

遺跡の葬送儀礼を考える上で重要な要素といえる。

その他、特筆すべきは繊維製品の出土である。墓坑上部の配石除去中に確認されたもので、墓坑から若干離れた位置で発見された。繊維製品の詳細な分析結果は第3章4節を参照されたい。

埋葬遺体

頭位は人骨（歯）の出土位置から判断して南西である。出土人骨は歯のみであったため埋葬姿勢の復元は困難であるが、歯列の出土状況から、頭部が墓坑上に露出するような姿勢で埋葬されたと推察される。また、被葬者の年齢は永久歯の形成段階から4歳前後という分析結果であった（第3章4節）。

切り合い関係

5号竪穴に近接した位置で検出され、2号墓の積石の一部が竪穴の輪郭にかかっている状況が見てとれる（第21図）。5号竪穴の上屋が存在する状態ではこの位置に2号墓を構築することは不可能であることから、5号竪穴廃絶後に構築されたものと推察される。

形成年代

覆土中から得られた炭化種実1点について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 σ 暦年代範囲が8世前葉～中葉、2 σ 暦年代範囲は8世紀中葉～9世紀後葉という結果であった。2 σ 暦年代範囲でみると5号竪穴と同時期であり、出土土器の時期とも整合的である。

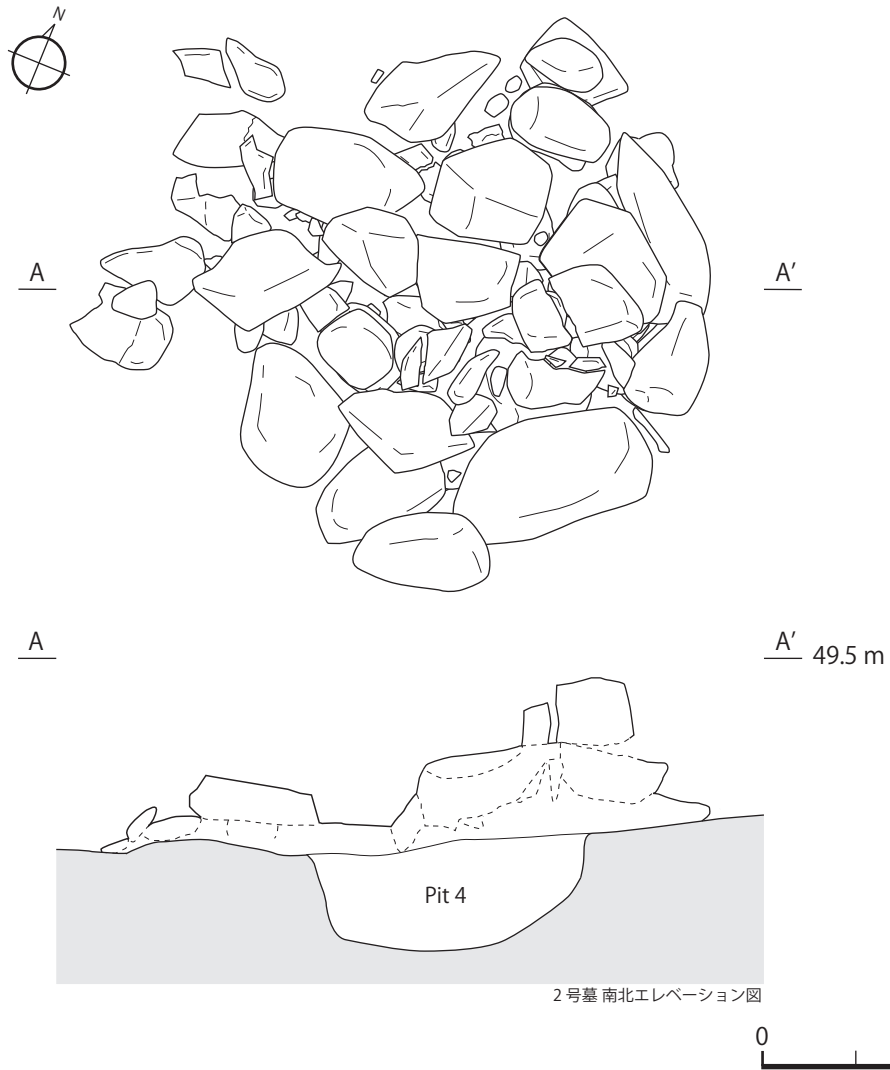
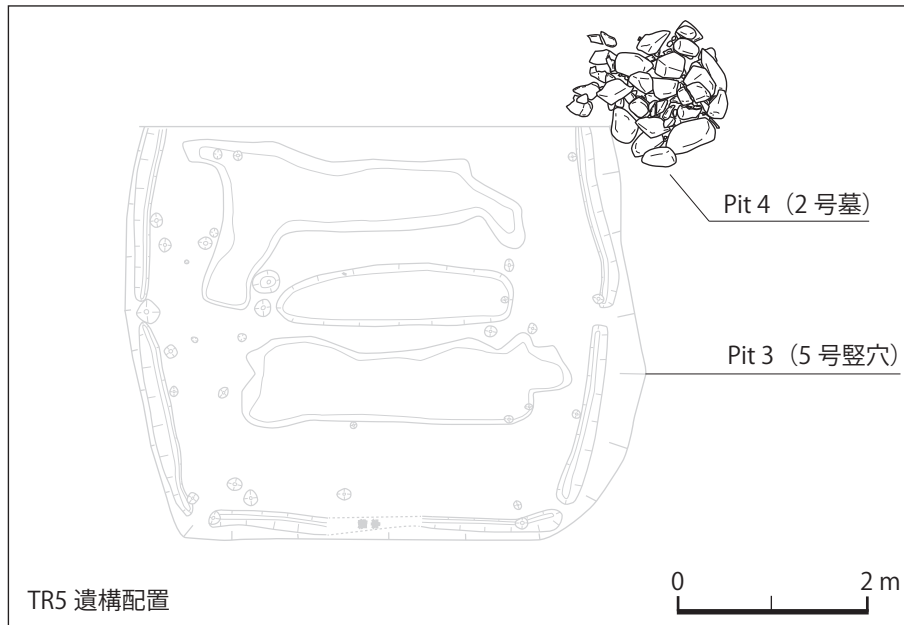
8. 土坑 (TR4-Pit2a)

本遺構は1号墓と同じ調査グリッドB-10区に位置する配石を伴う土坑である。

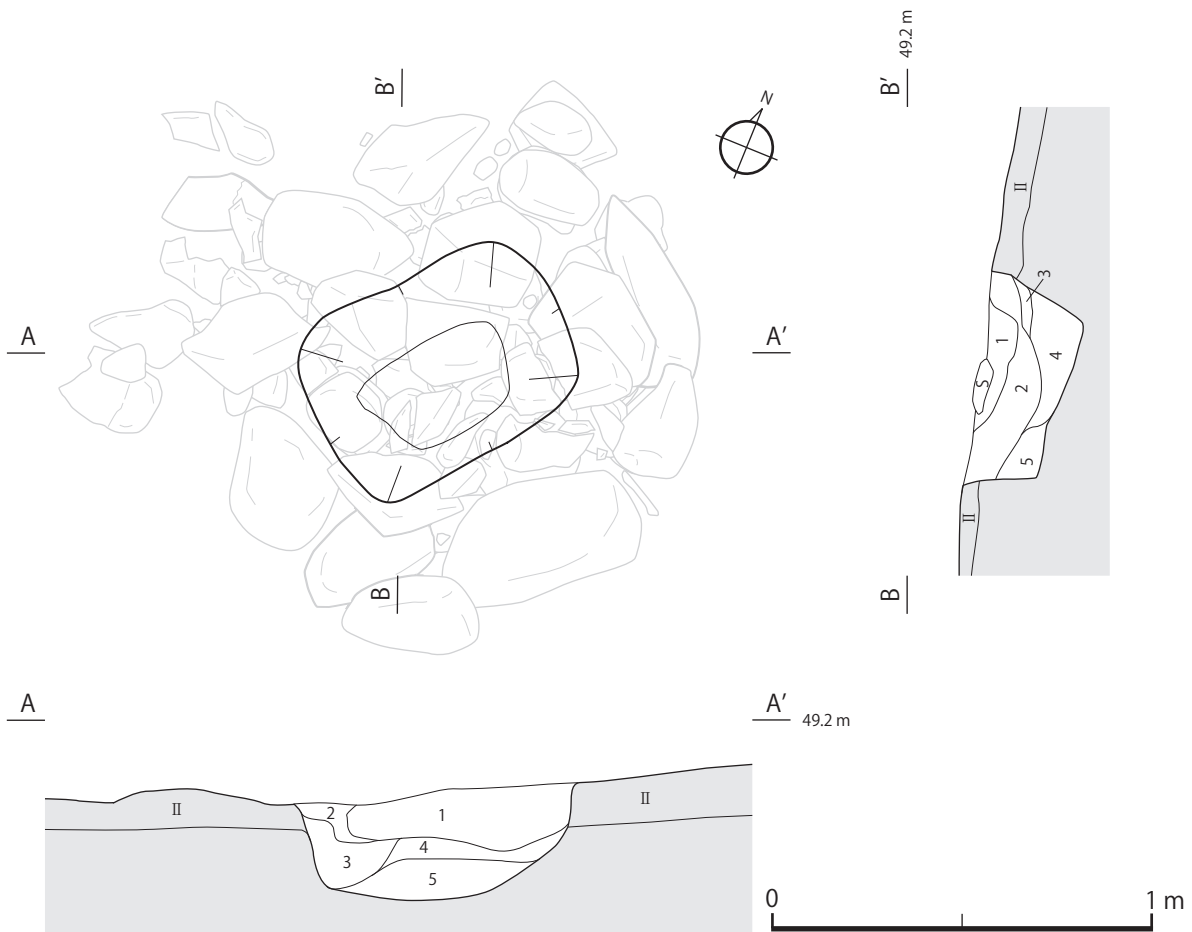
I層を除去したところ配石が確認されたため広がりを確認し、A-A'ラインにサブトレンチを設定して下層の状況を確認した。調査の結果、隣接する墓とは異なる皿状の掘り込みを持つ土坑であることが明らかとなった。さらに、底面を精査したところ、下層の古い土坑（Pit2b）を切って構築されている状況が確認された。以下、土坑の形態や切り合い関係等について記載する。

規模・形態 (第24図)

配石は約2.5 mに範囲にわたって認められた。配置に規則性はみられないが、およそ土坑の範囲内にまとまる傾向がみられる。礫は例によって遺跡外からの搬入であるが、被熱破砕したような角礫も散見される点特徴的である。



第21図 TR5遺構配置図および2号墓積石分布図



TR5 Pit4 (2号墓) 土層説明

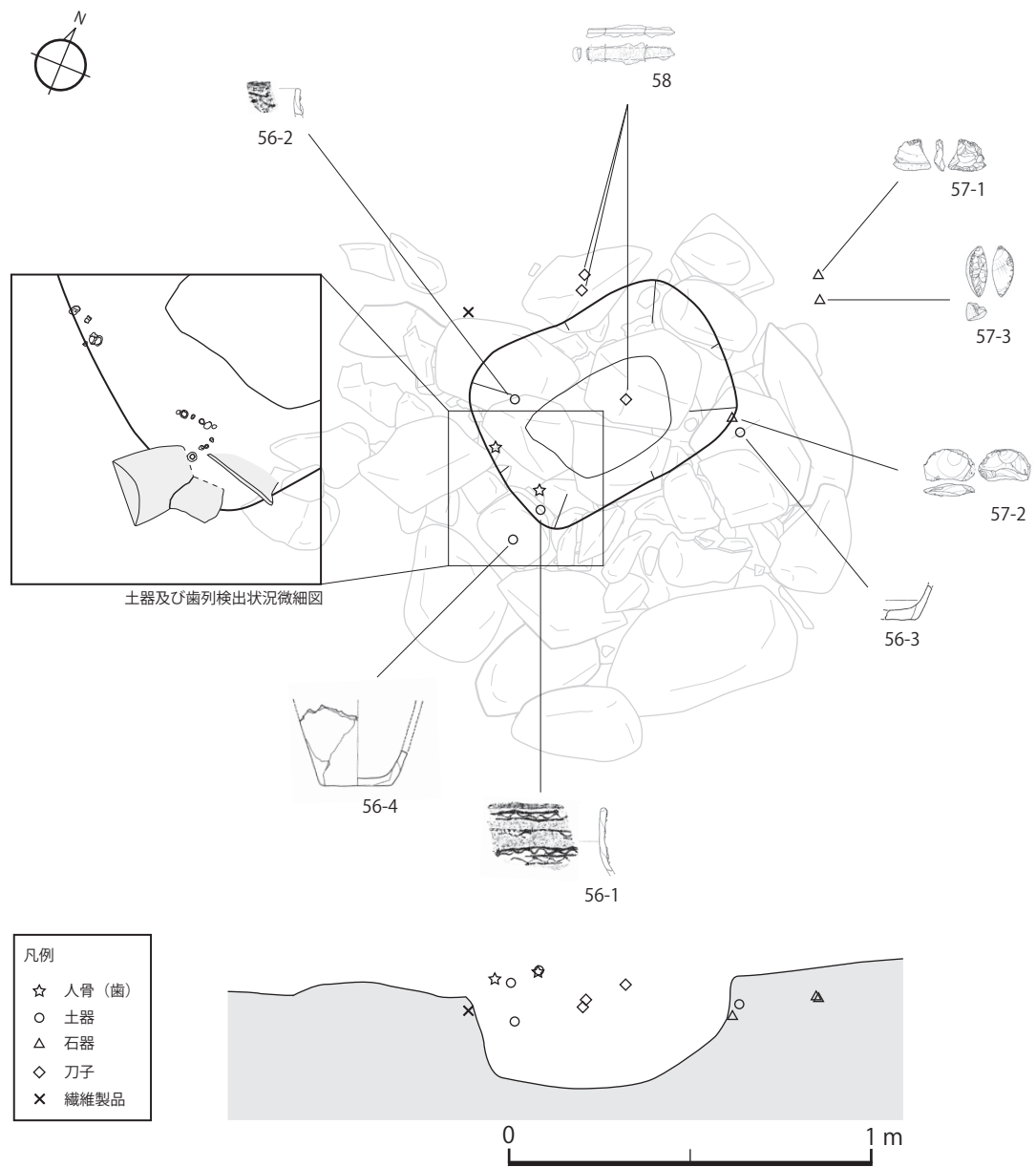
A-A' ライン

1. 暗褐色土 (II層混じり)、粘性なし、しまりなし
2. 黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまりややあり
3. 黄褐色土、粘性あり、しまりややあり
4. 暗褐色土+褐色土、粘性なし、しまり普通
5. 褐色土、粘性なし、しまりなし

B-B' ライン

1. 黄褐色土 (木炭を含む)、粘性あり、しまりややあり
2. 暗褐色土+黄褐色土 (木炭を含む)、粘性弱、しまり普通
3. 黄褐色土、粘性あり、しまりややあり
4. 褐色土、粘性なし、しまりなし
5. 暗褐色土+褐色土 (木炭を含む)、粘性なし、しまり普通

第22図 2号墓 (TR5-Pit4)



第23図 2号墓 (TR5-Pit4) 掲載遺物分布図

土坑はⅡ層中から掘り込まれており、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約2.2 m、短軸1.7 mと本遺跡で検出された土坑の中では最も大型である。壁面の立ち上がりは緩やかであり、最深部で約25 cmと浅い皿状の掘り込みであった。

埋土は1・2層に分層でき、1層の黒褐色土は土坑全体を覆うが、灰褐色土含む2層は一部でのみ確認された。

切り合い関係

埋土等の観察から、本遺構は下層に存在した土坑(Pit2b)を切って構築されている。よって、新旧関係はPit2b→Pit2aの順に遷移していると推察される。

形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、底面出土土器(第59図)からオホーツク文化終末期～トビニタイ文化期に属するものと推察される。

9. 土坑 (TR4-Pit2b)

本遺構は調査グリッドB-10区において、土坑(Pit2b)と重複する位置で検出された土坑である。以下、形態および切り合い関係等について記載する。

規模・形態 (第25図)

上層にPit2aが存在するため、Pit2bの上半は破壊されているものと推察する。そのため、掘り込み面は不明瞭、平面形は残存部で不整楕円形を呈する。規模は残存部から判断して長軸約1.25 m、短軸1.05 mと小型である。底面には若干の起伏がみられ、壁面の立ち上がりは緩やかである。

埋土は1・2層に分層でき、1層は少量の木炭を含む暗黄褐色土、2層は締まりのない暗褐色土であった。

切り合い関係

本遺構は上層に存在する土坑(Pit2a)によって切られている。よって、新旧関係はPit2b→Pit2aの順に遷移していると推察される。

形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、底面出土土器(第63図)からオホーツク文化後期～終末期に属するものと推察される。

10. 配石遺構 (TR6-Pit5)

本遺構は調査グリッドA-7・8、a-7・8区に位置する。高所の平坦地利用を探るために設定したトレンチ(TR6)内で検出され、当初は墓の存在を想定して広

りを確認したが1号墓や2号墓とは異なり、分散的な礫の分布傾向であった。

また、遺構の内容を精査するには配石確認面では不十分であり、下層の状況も把握する必要があった。そのため、調査区の北東端にあってサークル状に礫が組まれた箇所について一部礫の除去・半截したところ、小規模な掘り込み(Pit5)を確認された。これより、他の配石下にも土坑が伴う可能性が浮上したため、調査区中央でも同様に下層を確認したが土坑の存在は確認できなかった。以下、配石遺構および土坑(Pit5)の形態等について記載する。

規模・形態 (第26図)

配石範囲は掘削部で約4.5 mにわたり、Ⅰ～Ⅱ層中に存在していた。主に角礫を用い、直径50～60 cm程度の大礫だけでなく5 cm程度の小礫も多くみられる。これらの礫は他の配石遺構と同様にチャシコツ崎の上では採取できない岩石(安山岩)であり、外部からの持ち込みが想定される。

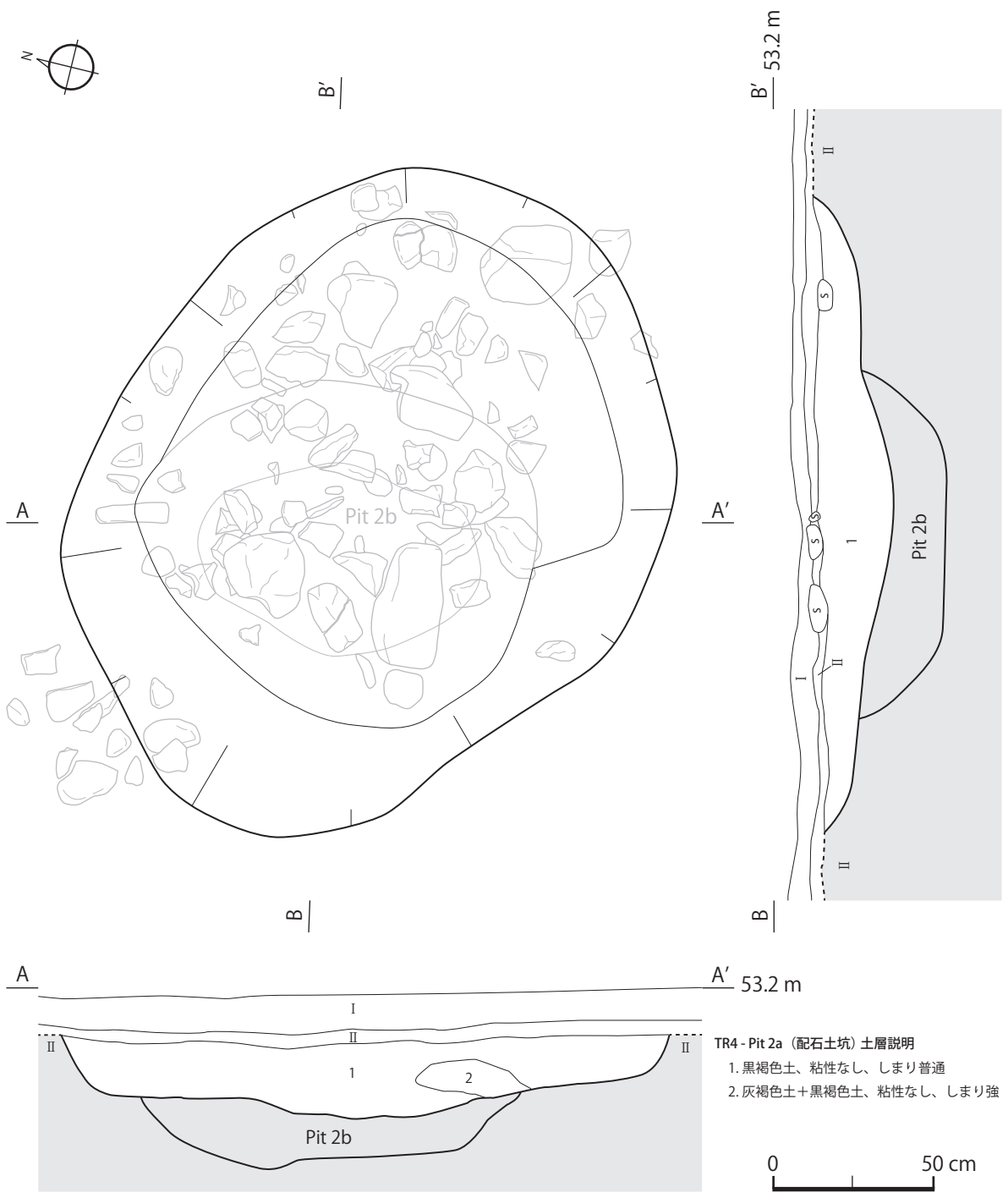
調査の結果、円形に礫が組まれる箇所の直下に土坑(Pit5)が伴う状況が確認され、規模は掘削部から想定して約0.8 mと上部の配石範囲と同程度であった。掘り込みはⅠ層下部～Ⅱ層上面と推察され、底面にはかなり起伏があることから礫を差し込むために掘削された印象を受ける。また、覆土中からは遺物の出土は見られなかったが、被熱したヒグマの臼歯が1点出土しており、出土状況などについて以下に記載する。

ヒグマ歯の出土状況 (第26図)

本遺構からはヒグマの歯の出土が目立つ(第26図)。ちなみに、遺跡内でヒグマの歯が検出されたのは本遺構のみであり、5号竪穴の骨塚中からも発見されていない状況にある。加えて被熱した歯も含まれることから、本遺構と屋外の動物儀礼との関連性が示唆される。出土した歯は少なくとも2体分に由来するが、出土状況を見るかぎり屋内骨塚のように1ヶ所に集積されてはいなかったものと推察する。また、分布に規則性がなく、配石中に被熱したものとそうでないものが混在して分散する傾向は骨塚と大きく異なり、留意すべきである。

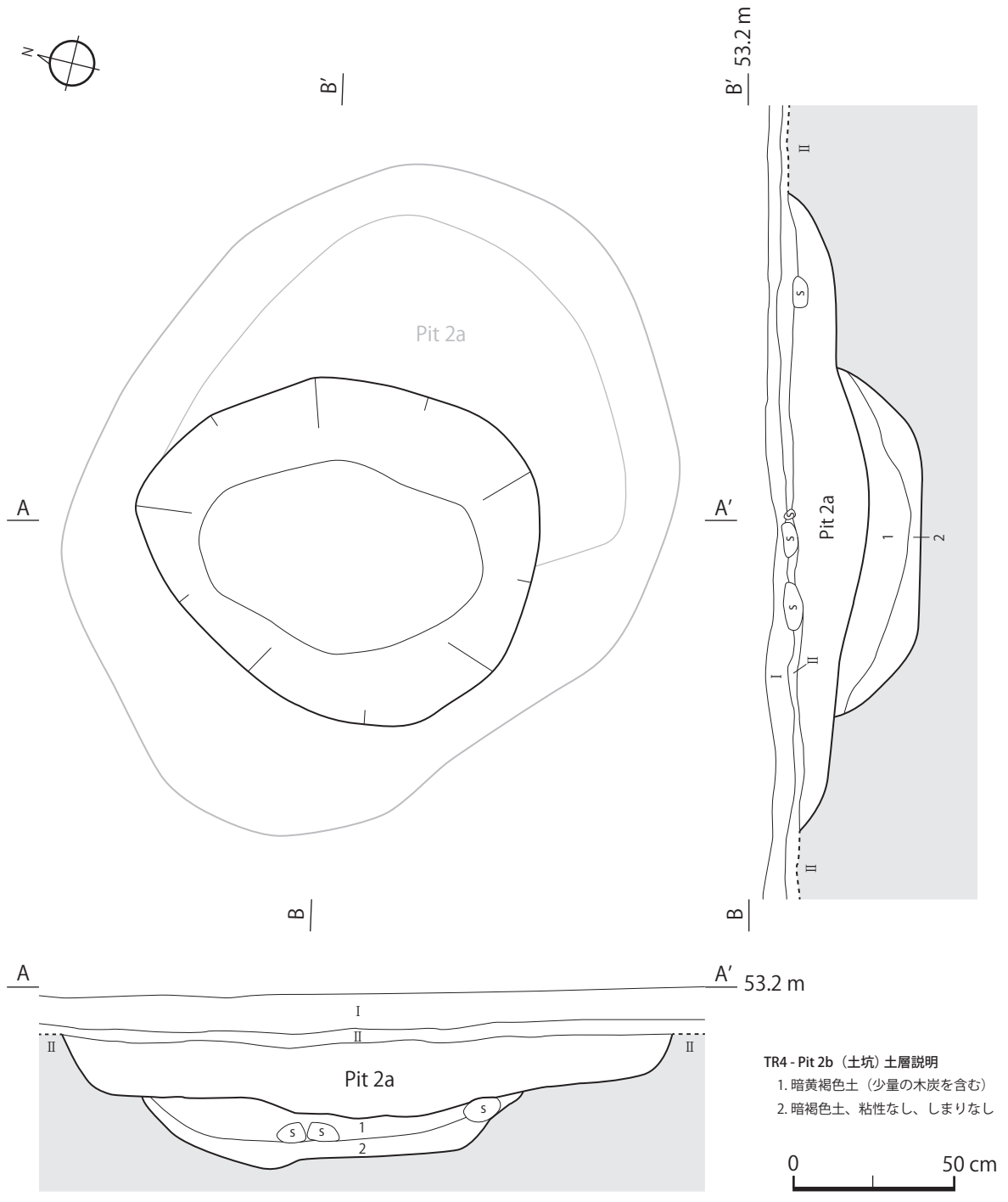
形成年代

炭化種実等が得られなかったため、AMS法による放射性炭素年代測定は実施していない。しかし、同一面から出土した完形土器等(第65図5・第67図21)から、オホーツク文化終末期～トビニタイ文化期に属するもの



TR4 - Pit 2a (配石土坑) 土層説明
 1. 黒褐色土、粘性なし、しまり普通
 2. 灰褐色土+黒褐色土、粘性なし、しまり強

第24図 土坑 (TR4-Pit2a)



第25図 土坑 (TR4-Pit2b)

と推察される。

11. 遺物集中 (TR6)

本遺構は調査グリッドa-7・b-7区に位置し、配石遺構 (Pit5) と同じTR6内で検出されたものである。以下、遺構の形態および出土動物遺体等について記載する。

規模・形態 (第27図)

オホーツク文化期の遺物を包含するⅡ層下部～Ⅲ層上面で検出され、隣接する配石遺構 (Pit5) よりも若干下層に存在した。分布は調査区内で約2.6 mの範囲にわたって認められ、さらに調査区外へと広がることが予想される。

遺物集中は主に、土器、石器、骨角器、動物遺体から構成され、鉄製品などの金属器は見られなかった。また、南東側では約0.85 mの範囲に黒曜石の剥片集中が

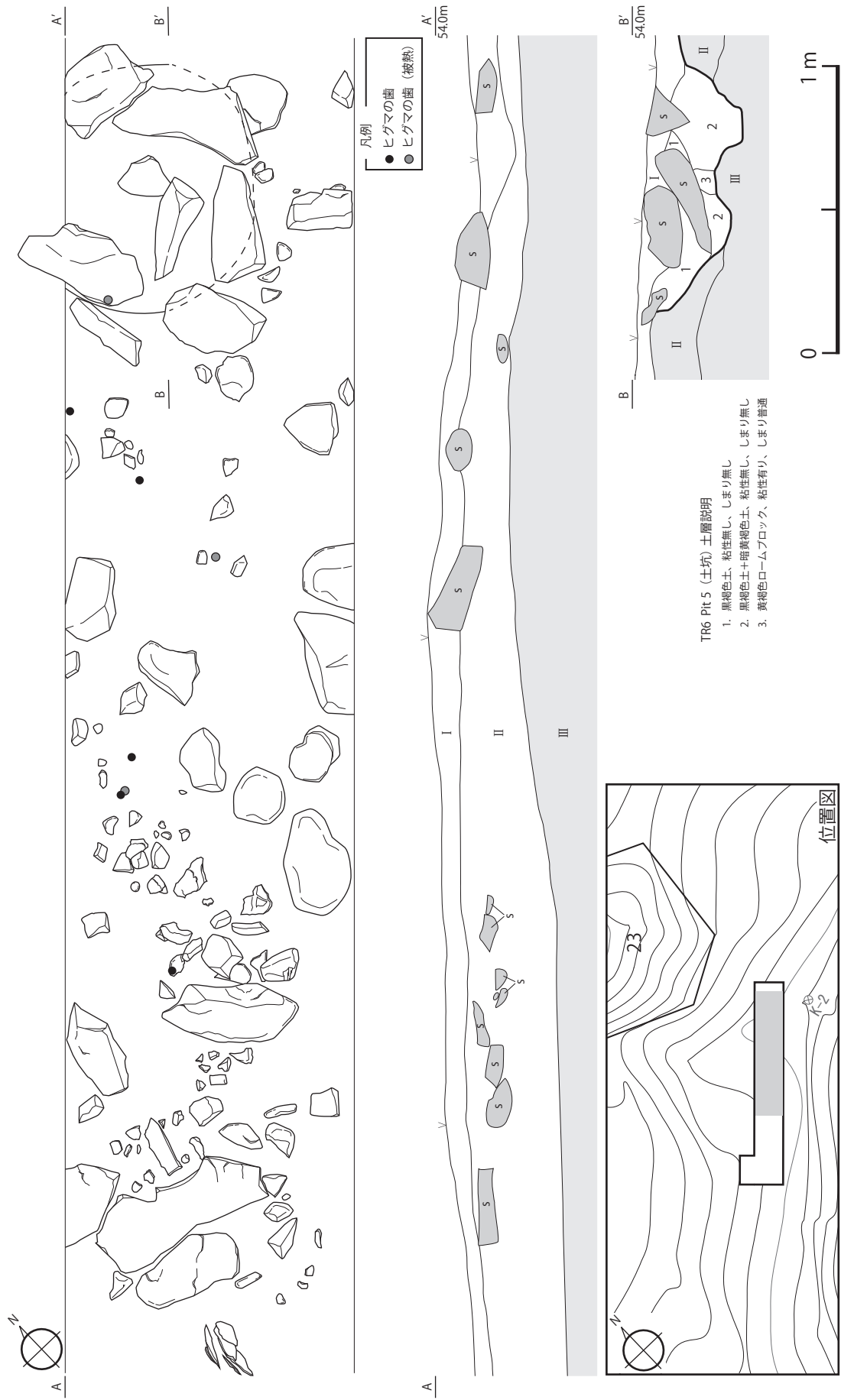
出土しており、遺物集中に伴うものと推察される。

特筆すべきは単なる遺物の集積ではなく、多くの動物骨を伴っている点である。最も遺物が集中する箇所では、鯨類の椎骨が連なって出土している。さらに、その両脇には欠損した釣針軸や骨斧などと共にアザラシ科の肩甲骨が出土しており、意図的な配置と推察される。同文化での類例が無いため、本遺構の位置づけは不明であるが道具類がまとまって出土し、黒曜石剥片が散らばる点は特徴的であり、屋外の儀礼場としての可能性も考えられる。

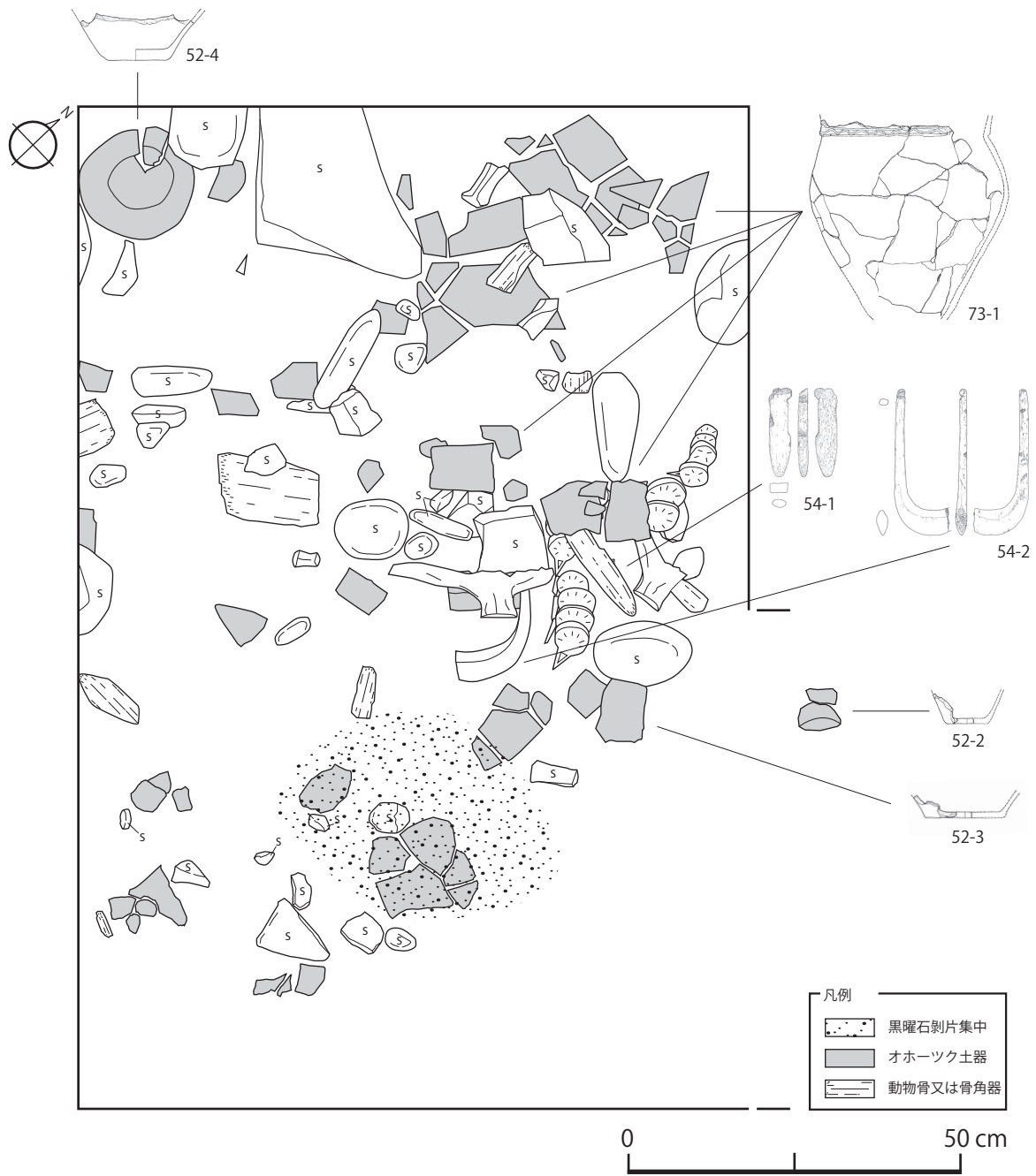
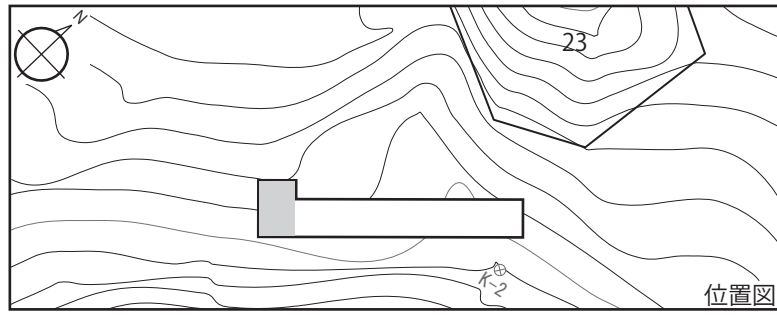
形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、出土層位および出土土器 (第73図) からオホーツク文化後期～終末期に属するものと推察される。

(平河内毅)



第26図 配石遺構 (TR6-Pit5)



第27図 遺物集中(TR6)

表1. 検出遺構一覧

図版	調査区	遺構名	Pit	時期	平面規模	軸方向	備考
—	TR1	土坑	—	オホーツク	—	—	
—	TR1	焼土木炭範囲	—	オホーツク	—	—	
—	TR2	配石遺構	—	オホーツク	—	—	
6～13	TR5	5号竪穴	3	オホーツク	長軸 5.4 短軸 (4.4)	N-72° -W	焼失、骨塚3基、 貼床、建て替えなし
14・15	TR5	上層配石遺構	—	トビニタイ	—	—	
16	TR7	23号竪穴	6	オホーツク	—	—	魚骨集中あり
17	TR7	上層廃棄層	—	オホーツク	—	—	神功開竈出土
18～20	TR4	1号墓	1	オホーツク	長軸 1.5 短軸 1.3	N-64° -E	積石を伴う
21～23	TR5	2号墓	4	オホーツク	長軸 0.7 短軸 0.5	N-53° -E	積石を伴う
24	TR4	土坑	2a	オホーツク～トビニタイ	長軸 2.2 短軸 1.7	N-57° -W	配石を伴う
25	TR4	土坑	2b	オホーツク	長軸 1.25 短軸 1.05	N-3° -W	
26	TR7	配石遺構	5	オホーツク～トビニタイ	—	—	動物遺体を伴う
27	TR6	遺物集中	—	オホーツク	—	—	動物遺体を伴う

第3節 遺物

1. 遺物の概要

土器：掲載土器244点のうち、オホーツク土器・トビニタイ土器が230点と全体の約94%を占める。オホーツク土器を時期毎にみると、刻文系土器4点、沈線文系土器2点、貼付文系土器154点と貼付文系土器が圧倒的多数を占めていることが分かる。一方、ごく少数ではあるが縄文土器9点、続縄文土器1点が出土しており、オホーツク文化期以前から本遺跡が利用されていたことを示唆している。

石器：掲載した石器201点のうち、剥片石器では石鏃が80点（38%）と最も多く、ついで石核状フレイク28点（13%）、リタッチドフレイク27点（13%）と続く。石核状フレイクとしたものは、円レキ面を残す黒曜石で、微細な刃部剥離調整の痕跡が見られるものや、一方で全く調整痕跡が見られないものもその特徴を勘案して含めて総称したものである。レキ石器ではすり石18点（8%）やたたき石13点（6%）が多く出土している。なお、石質について特に記載の無いものはすべて黒曜石製である。

骨角器：廃棄層中からの出土が最も多く、他の遺構からの出土は低調であった。器種は銚頭・骨鏃・釣針軸といった狩猟具だけでなく、骨針、骨斧、刺突具、ヘラ状製品といった実用的な道具、円盤状製品や骨匙、彫像など非実用的と考えられるものも出土している。

鉄製品：TR6を除く多くの調査区から鉄製品が出土している。刀子や鉄針が主体であるが、鉤状製品などもみとめられる。また、特筆すべきはオホーツク文化の遺跡では初例となる奈良時代の貨幣（神功開寶）が出土したことである。

その他：繊維製品として、2号墓の積石直下から布片が出土している。

以下、各遺構出土遺物、包含層出土遺物の順に個別に解説を行う。なお、掲載資料については観察表に詳細をまとめたため、本文中では主要な遺物を除き概要を記載することとした。

2. 5号竪穴（TR5-Pit3）出土遺物

（土器：第28～34図）

床面からの出土土器はオホーツク土器に限定される

（第28～30図）。文様は粘土紐による直線2本と波線1本の3本1単位の貼付文（以下、3本単位貼付文）を複数配置するものが一般的である。これらはⅢ群e類に分類され、オホーツク文化貼付文期後半に相当する。

第29図14は骨塚からやや離れた竪穴南東側から出土した小型土器である。器形は胴部に最大径を有する壺型で、口縁部は肥厚しない。文様は断面平坦な粘土紐を螺旋状に貼付し、3本単位貼付文直下に粒状貼付文を約2.5 cm間隔に連続して施文している。また、壁際から出土した影響か竪穴の焼失に伴う2次被熱は顕著でない。

一方、骨塚周辺からは復元可能なⅢ群e類土器が7個体出土しており、骨塚に伴うものとして床面出土土器の中から抽出して掲載することとした。出土時の位置関係については第10図を参照されたい。

以下、復元可能であった個体について解説を行う。第30図3～9は器形や容量も種々様々であるが、何れも竪穴の焼失に伴って2次被熱している。共通しているのは紐状貼付文の均整がとれておらず、途切れや太さ、波線のむらが目立つという点である。

3は器高19.1 cmと中型の甕である。最大径はわずかに口縁部が胴部を上回り、頸部は直立するようなプロポーションを示す。文様は3本単位貼付文を口縁部から胴部上半まで3段施文している。

4は逆位で出土した個体である。器形は口縁部に最大径を有する中型の甕で、頸部は直立気味である。文様は2段の3本単位貼付文間に波線文を配置し、胴部上半には2本1単位の紐状貼付文を施している。また、2次被熱によって若干器形が歪んでいる。

5は器高13 cmほどの小型土器である。最大径は口縁部と胴部でほぼ等しく、口縁はやや外反する。文様は3本単位貼付文を3段配置し、下半の単位貼付文間に粒状の貼付文を複数施文している。

6は胴部に最大径を有する壺型土器である。文様は他のⅢ群e類土器とは異なり、口縁部と頸部に3本単位貼付文をそれぞれ配置し、胴部上半には14本の多重貼付文を施している。また、強く火を受けた箇所とそうでない箇所が破片ごとにはっきりと分かれるため、竪穴焼失時にすでに半壊していたと推察される。

7は胴部に最大径を有する大甕である。文様は3本単

位貼付文を口縁部から3段配置し、下端にはひねりによる波線文を1本施文している。

8は本遺跡で最も大容量のオホーツク土器である。最大径は口縁部と胴部でほぼ等しく、胴部はあまり張り出さない縦長な器形である。文様は3本単位貼付文を口縁部と頸部に2段配置し、その間にひねりによって爪形の残る波線文を1本施文している。また、9は6と似た砲弾状を成し、側面の片側には把手を有している。口唇部から胴部まで多重の紐状貼付文が施文され、把手部分にも施文されている。さらに、底部には人為的な穿孔がみられるため、おそらく口縁の半月状の欠損も意図的と捉えられる。

また、第31図～第34図は覆土出土のオホーツク土器である。第31図はⅢ群e類の口縁部破片で、3本単位貼付文が主体である。中には7本1単位の多重貼付文が見られるもの(22)や、口唇部に突起がみられるもの(23)が含まれる。第32～33図はd・e類が主体であるが、風化により文様不明のもの(第32図11・13・14・16)もある。

第33図25は覆土出土のオホーツク土器のうち唯一の完形個体であり、逆位で出土した。文様は太く均整のとれていない紐状貼付文3本にへら状の工具で乱雑に刻みを付けており、Ⅲ群d類に分類される。器厚も不均一で粗雑な印象を受ける。

また、縄文中期の土器片も出土している(第34図)。

(石器：第35～38図)

竪穴床面や炉から出土している剥片石器中で注目すべきものは、第35図17・18・20、第38図5～7に示した石核状フレイクやすり石が多く出土していることである。第36図1のすり石には紐のような痕跡があり、第38図8は扁平のへら状状態で先端に打痕があり、僅かな窪みもある。炉の側から出ており、灰掻き用具の可能性もある。いずれのすり石も安山岩製である。第37図1・2は泥岩製の有孔石製品である。

覆土出土中では粗雑な刃部調整の石鏃が多く、床面と同様に石核状フレイクとすり石も多く出土している。特に注目したいのは第41図4・6、第42図である。第41図4は長軸8 cmの砂岩製の両頭調整石製品としたもので、両頭部を四角錐状に面取りし、握り部分には2列の窪みを作り出している。同図6は砂岩製の有孔有溝石錘であり、縦方向に二分された片割れである。横位に巡る6条の溝は規則的な間隔を保ち、装飾的な様相を呈してい

る。第42図のナイフおよび板状レキは全て玄武岩製である。注目すべきはこれらの石材が知床半島では産出せず、利尻島の杓形岬周辺に顕著にみられる杓形溶岩と呼ばれるものに成分・組成とも類似する点である。従来の調査ではレキとして遺物扱いしていなかった資料の一つであるが、今回のケースのように特殊な石材のものなどは特に注視する価値はあろう。

(骨角器：第43図)

床面と覆土中から出土した骨角器である。1は覆土出土であり、扁平なへら状製品の破片と推察する。2は海獣骨に先端加工を施したものである。用途は定かではないが裏面にわずかな窪みがもうけられており、柄などに装着して使用するものと推察する。3は鯨骨製の骨斧であり、基部には着柄のための加工があるが左右非対称である。先端部には使用に伴い摩滅している。4は用途不明の骨角器である。屈曲部に溝が掘られ、組み合わせ式となっているほか、長軸部は扁平で短軸部は厚みがあるという特徴を有する。

(金属製品：第44～45図)

床面から出土したものである。1は刀子の刃部破片である。2～4は鉄針で、断面は方形。そのうち2・3は両端が欠損しているため天地は不明であった。

第45図は覆土から出土したもので、1～6は刀子の破片である。4は意図的かは不明だが、切先が折れ曲がっている。5は平行して2ヶ所に刀子片が存在する。おそらく、折れ曲がったまま腐蝕し、湾曲部は欠損して一部のみ残存した結果と推察する。6は茎部分には木製の柄が残存している。7は不明棒状製品であり、両端が欠損しているため天地は不明である。

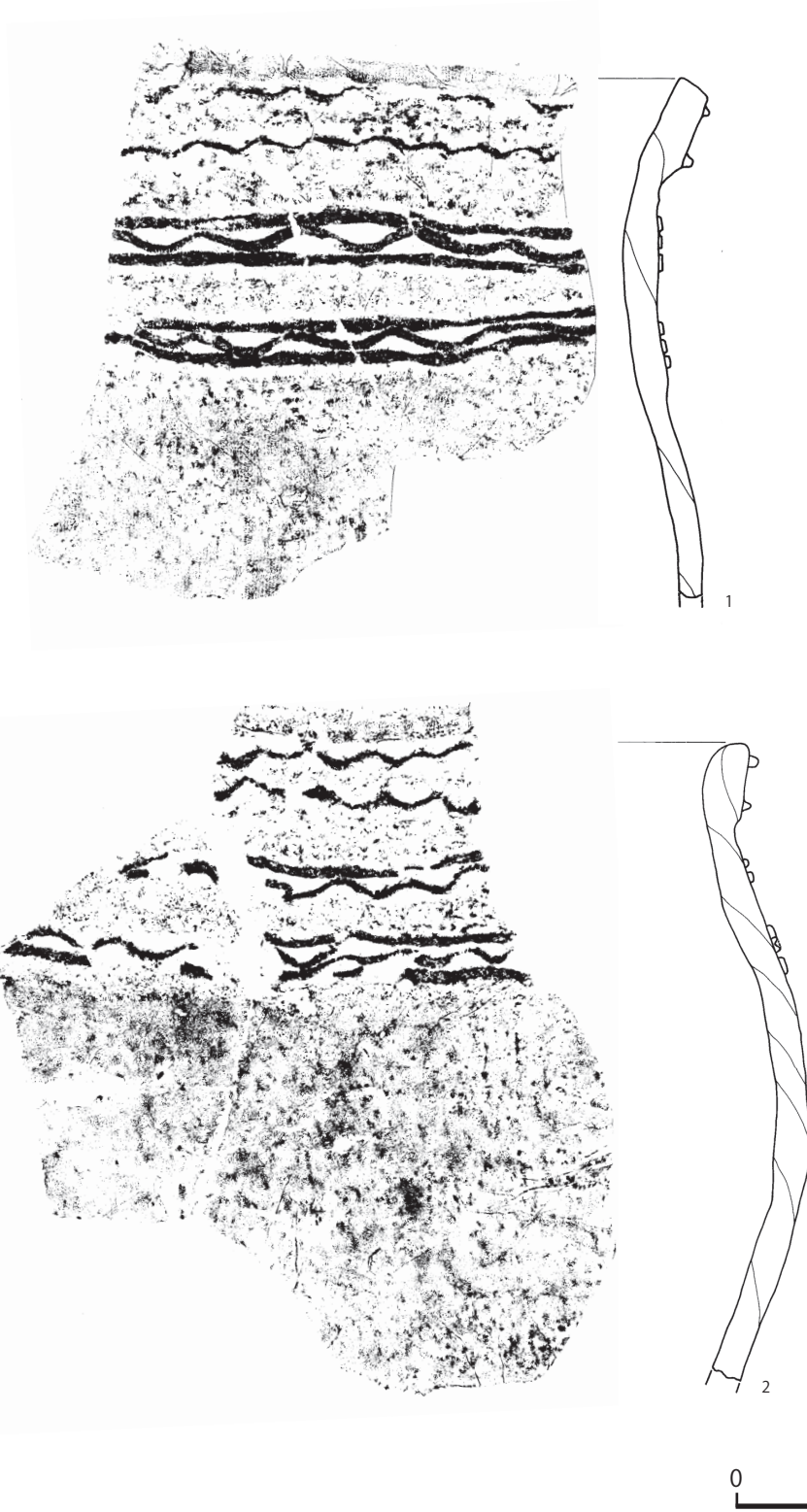
3. 5号竪穴上層配石遺構 (TR5) 出土遺物

(土器：第46図)

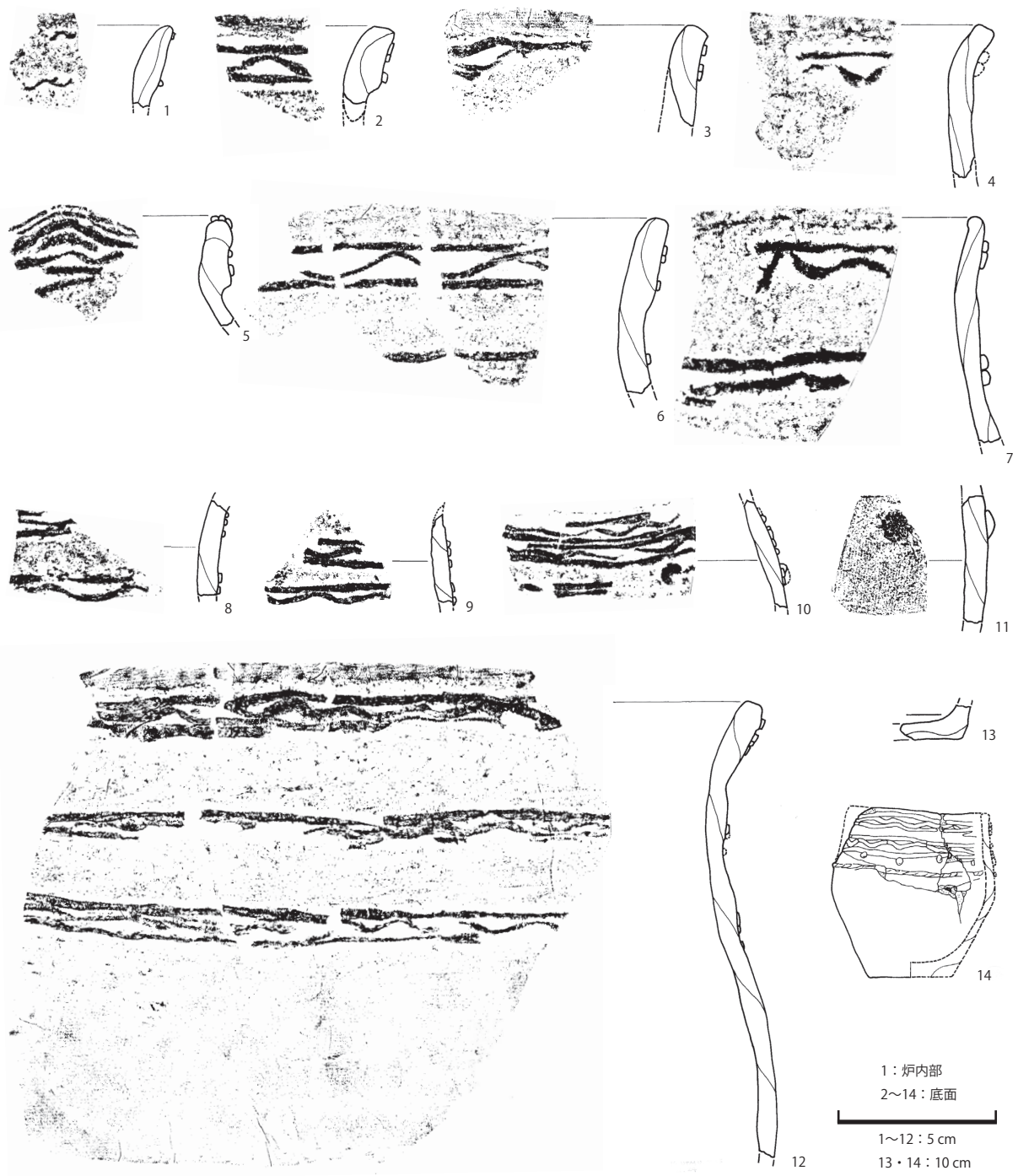
配石遺構と同一面で出土した擦文土器とトビニタイ土器である。また、第46図10～13は出土状況から同時期的な廃棄と推察される。

1はⅠ群土器の頸部破片であり、4条の横走沈線の上端に工具による刺突が施されている。2～9はⅡ群b類土器の口縁部～胴部である。オホーツク土器とは器形や文様構成が異なるが、胎土に差は見られない。Ⅱ群b類土器は口縁部が強く外反するもの(2)が一般的であるが、やや内傾するもの(3)も出土している。

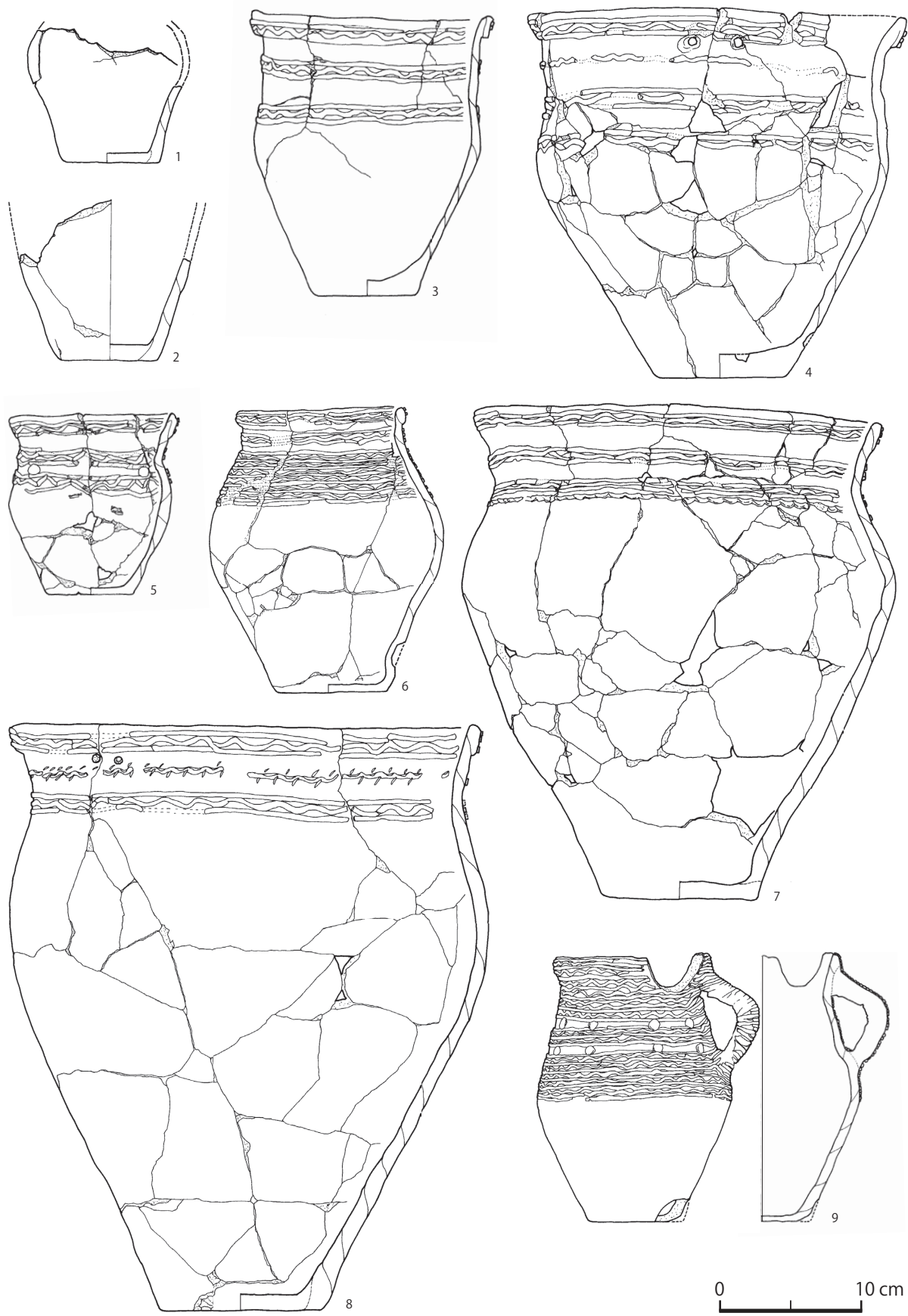
10は小型のトビニタイ土器である。文様は口縁部に1



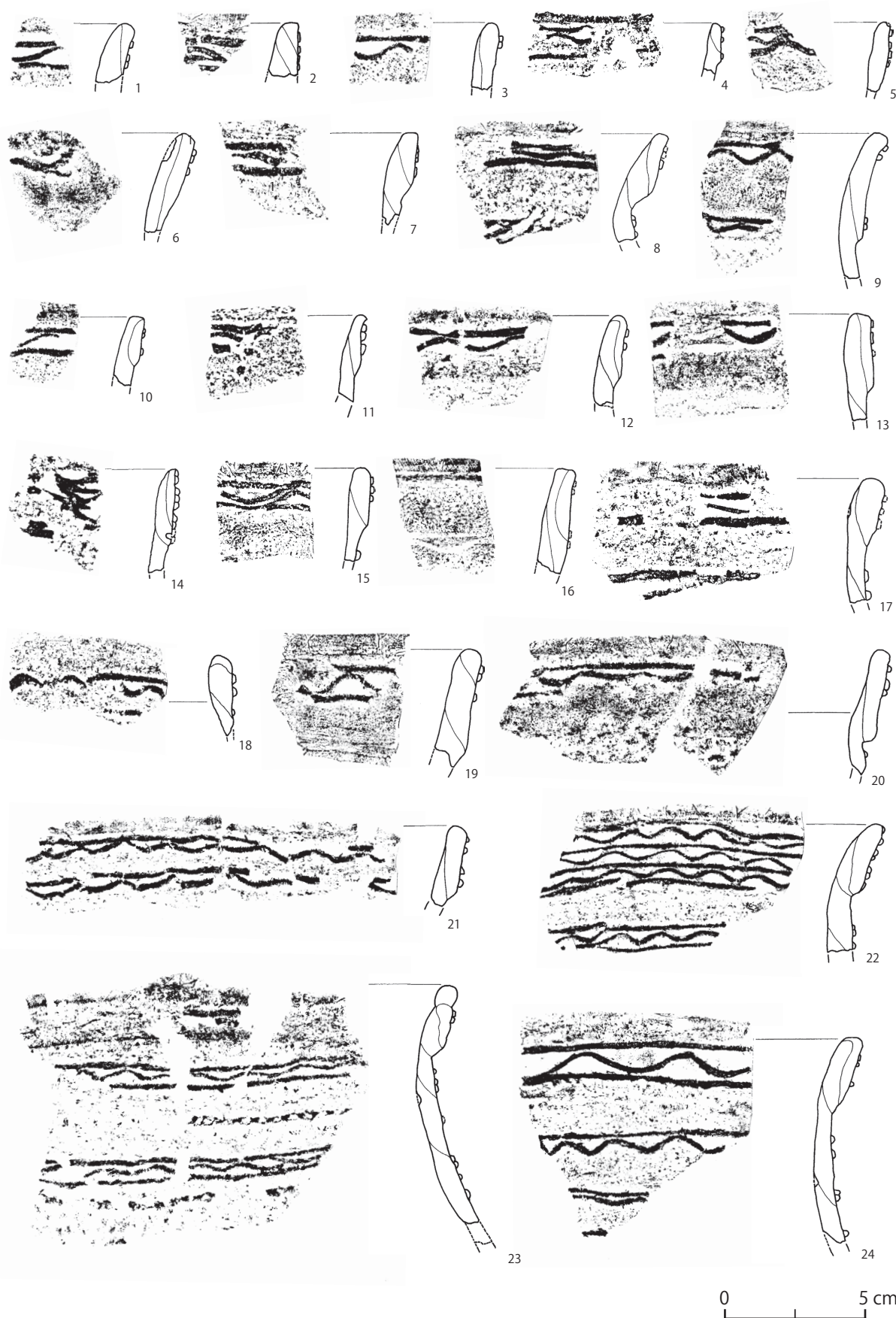
第28图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(1)



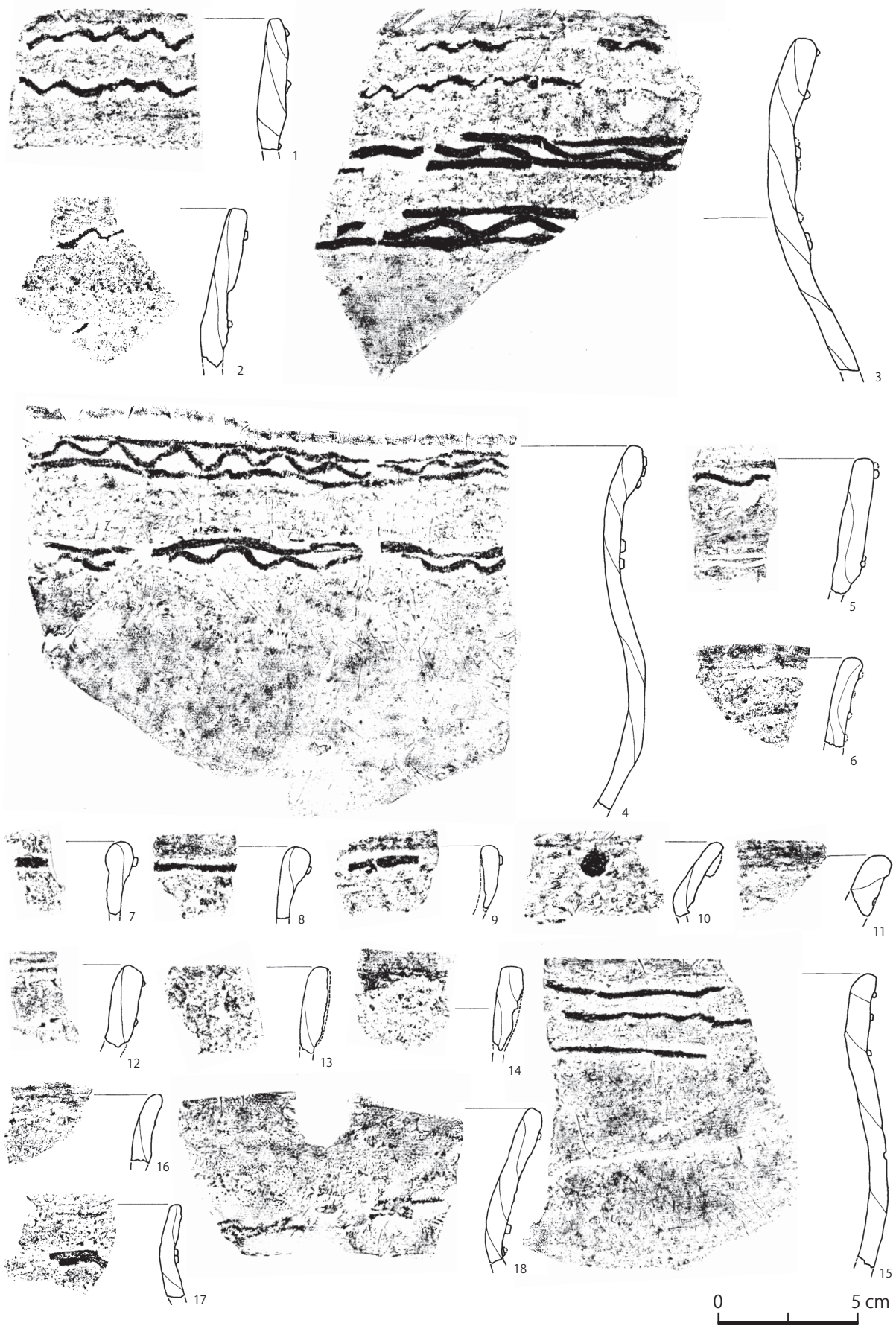
第29图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(2)



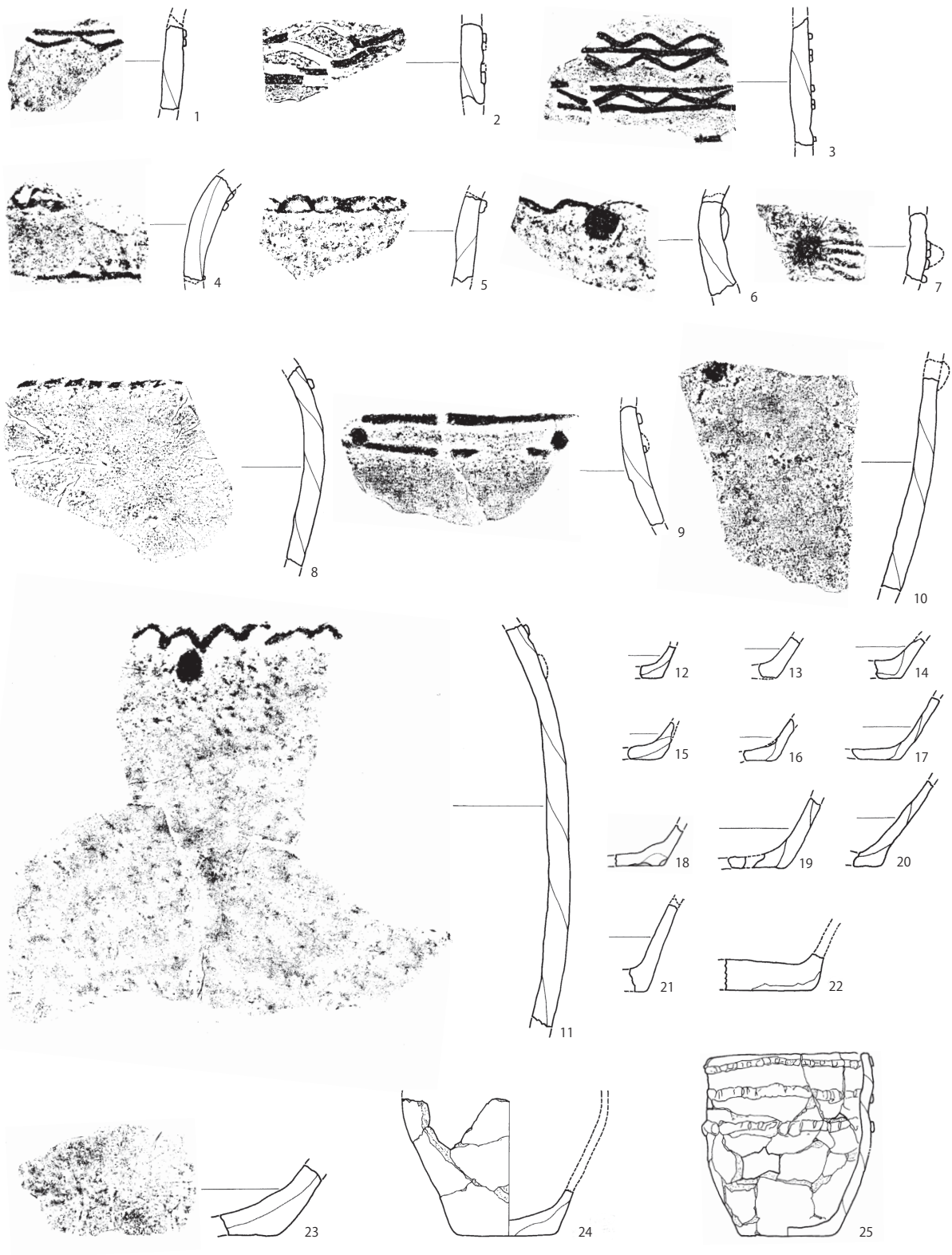
第30图 5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚 出土土器



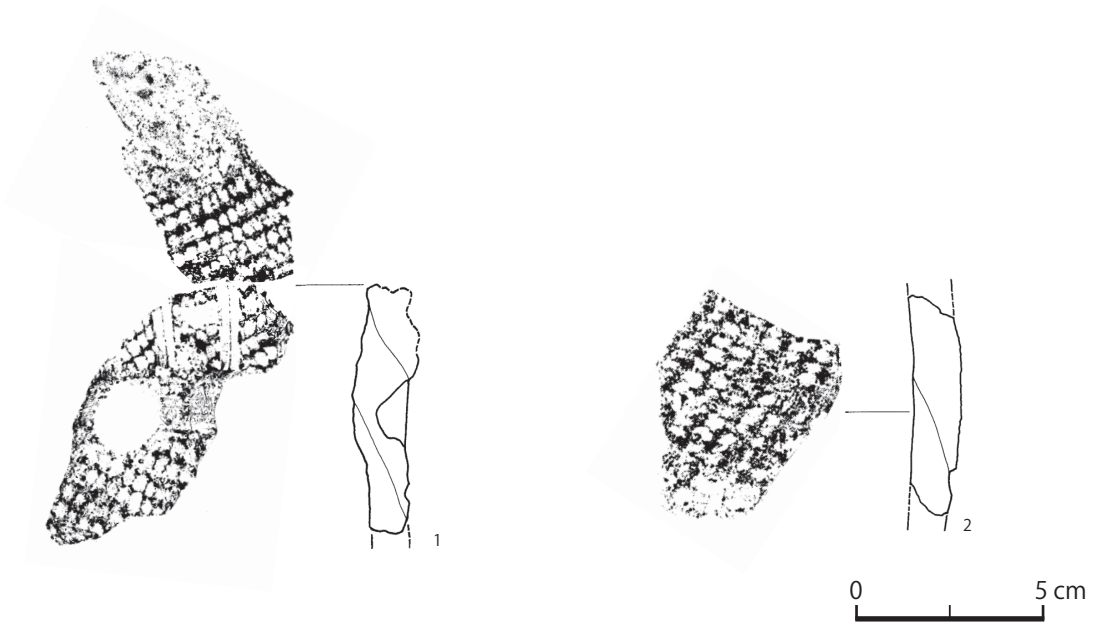
第31图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(1)



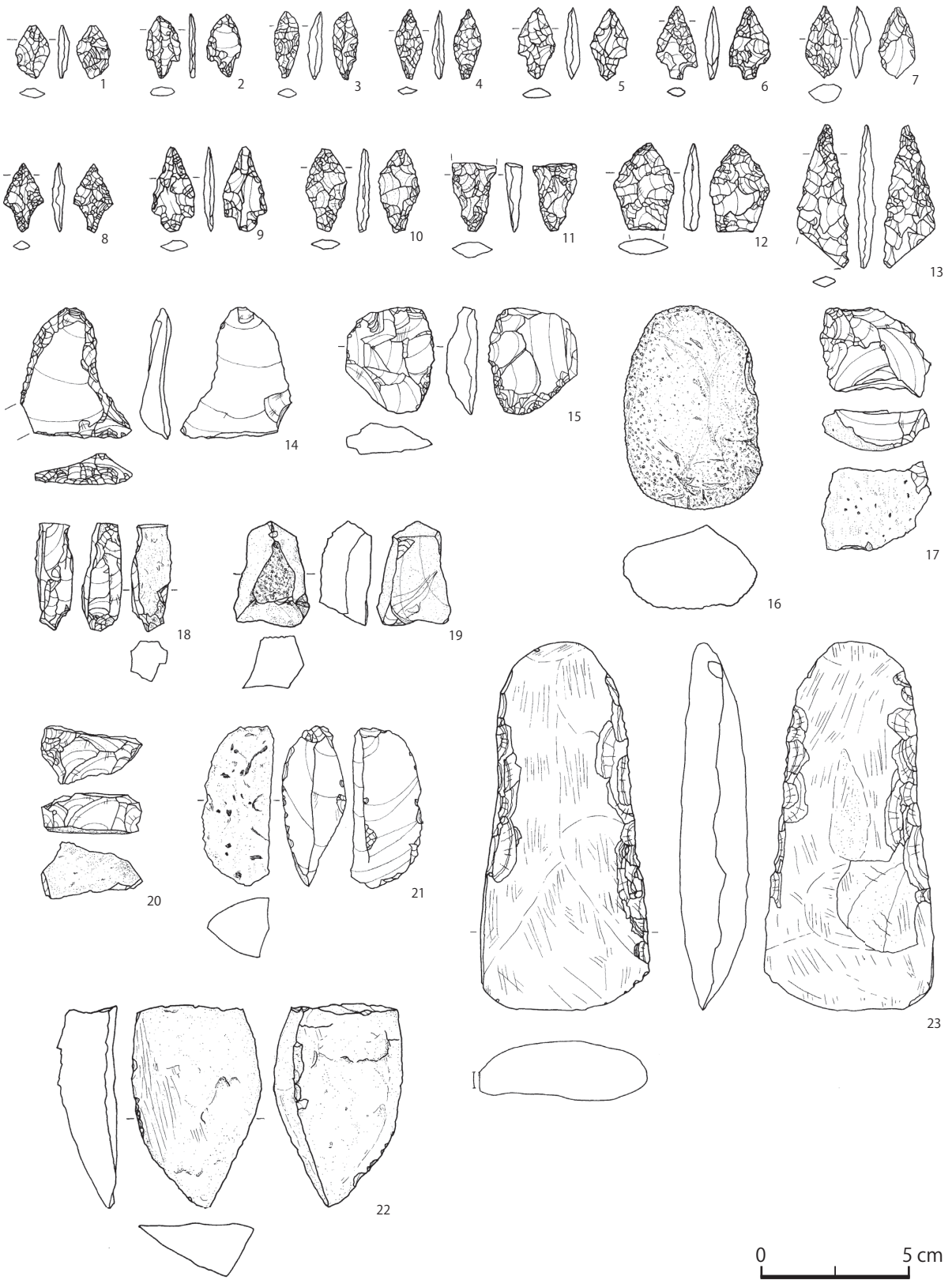
第32图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(2)



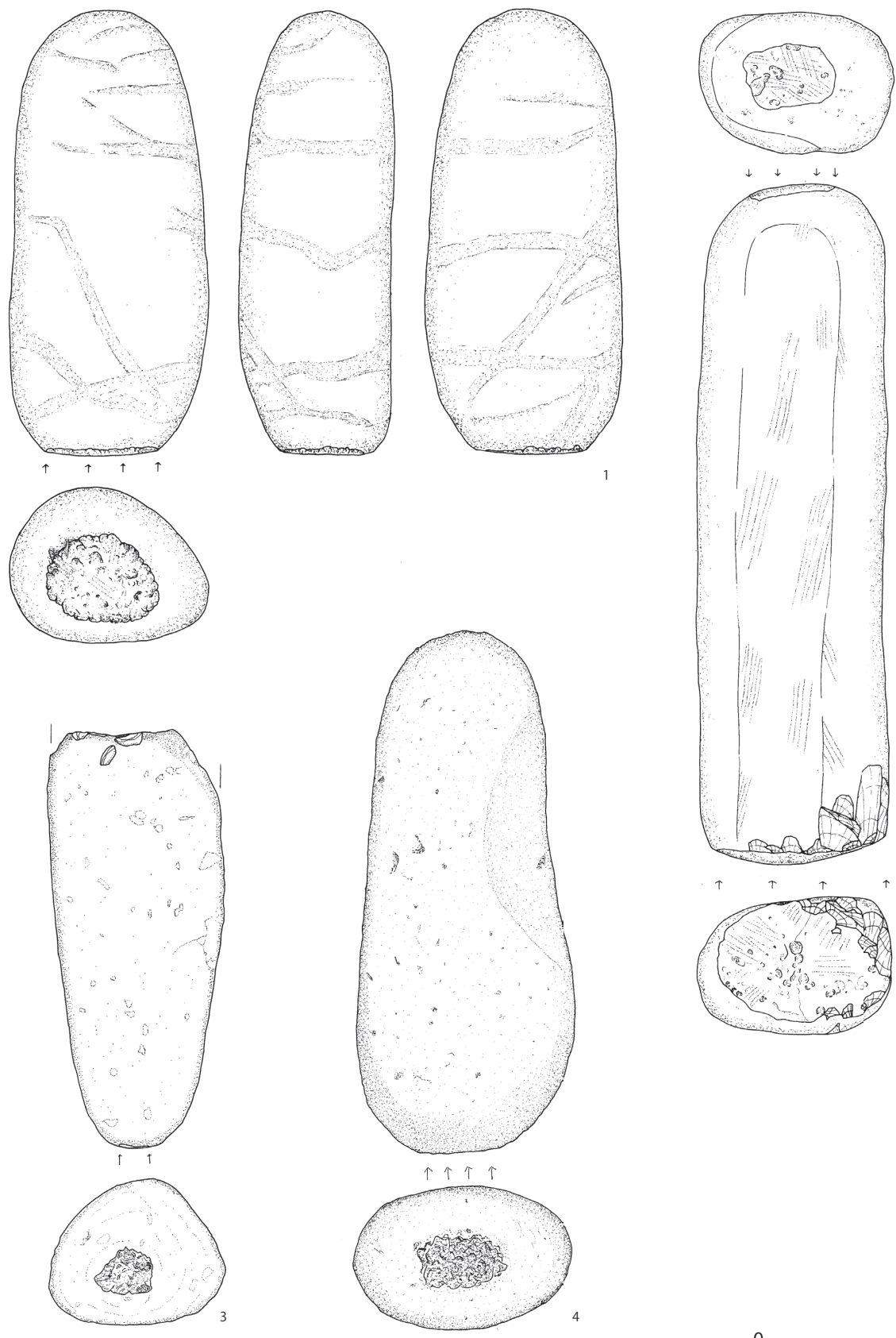
第33图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(3)



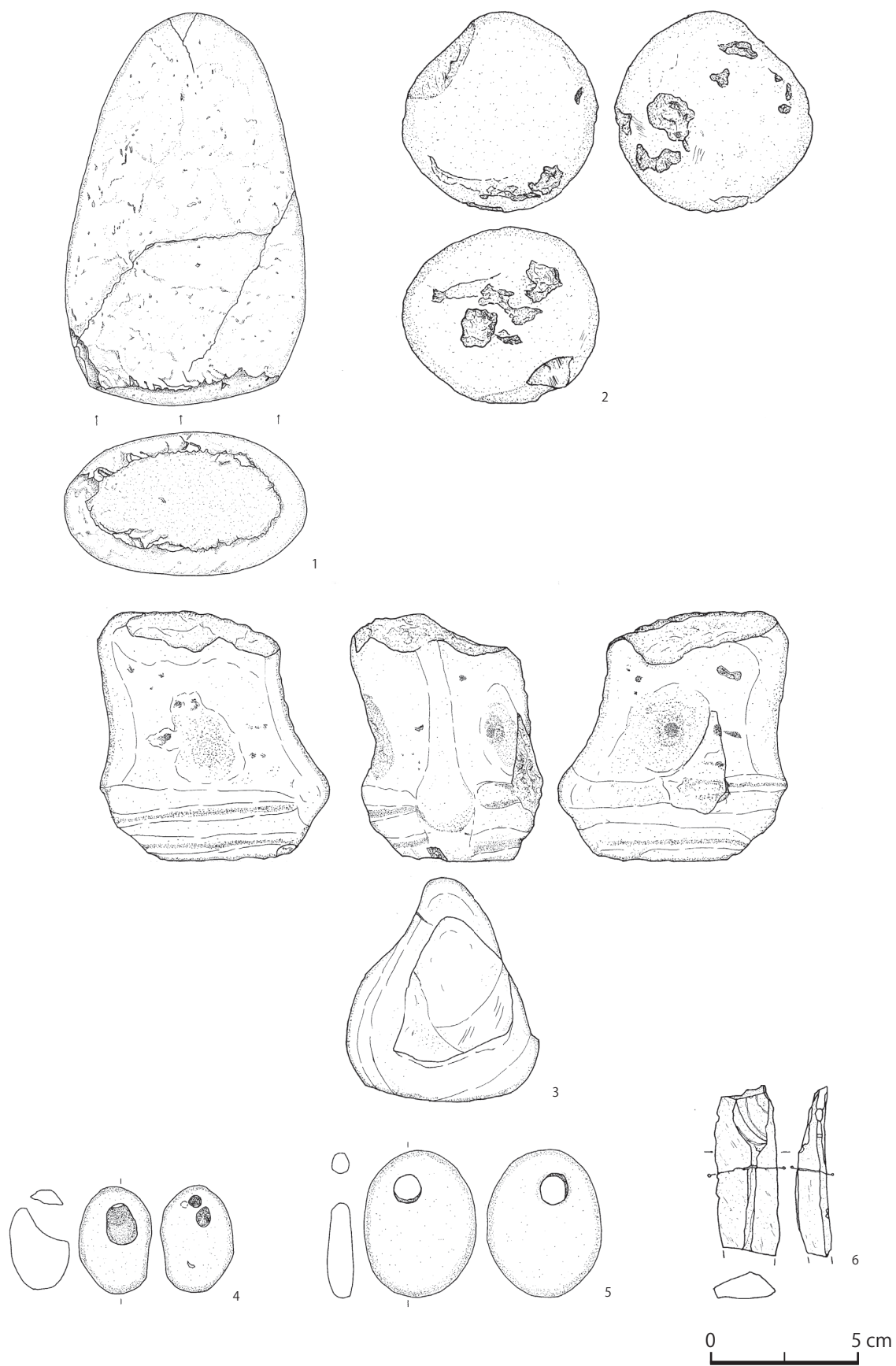
第34图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(4)



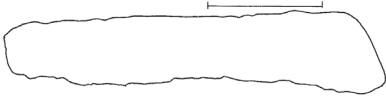
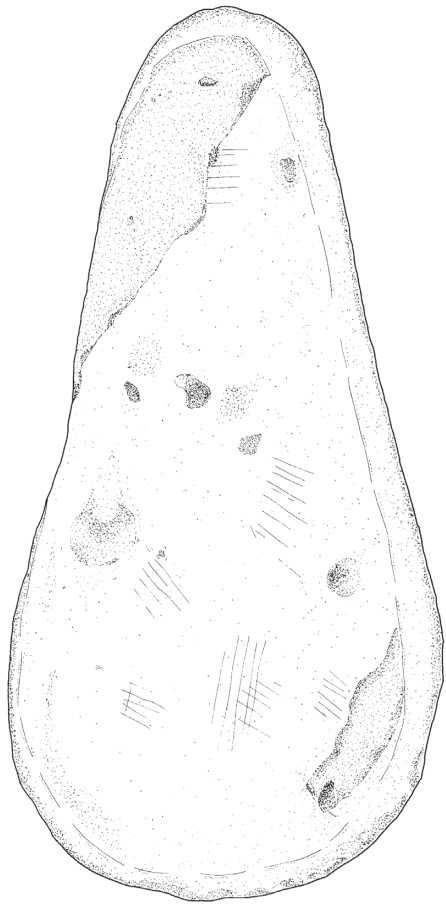
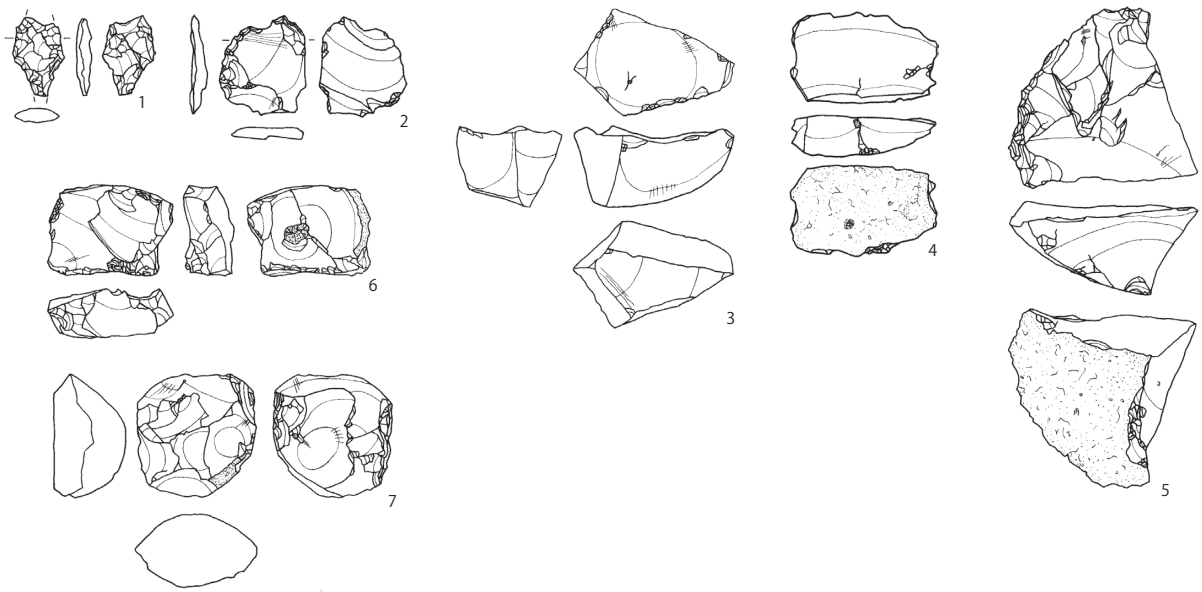
第35图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(1)



第36图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(2)



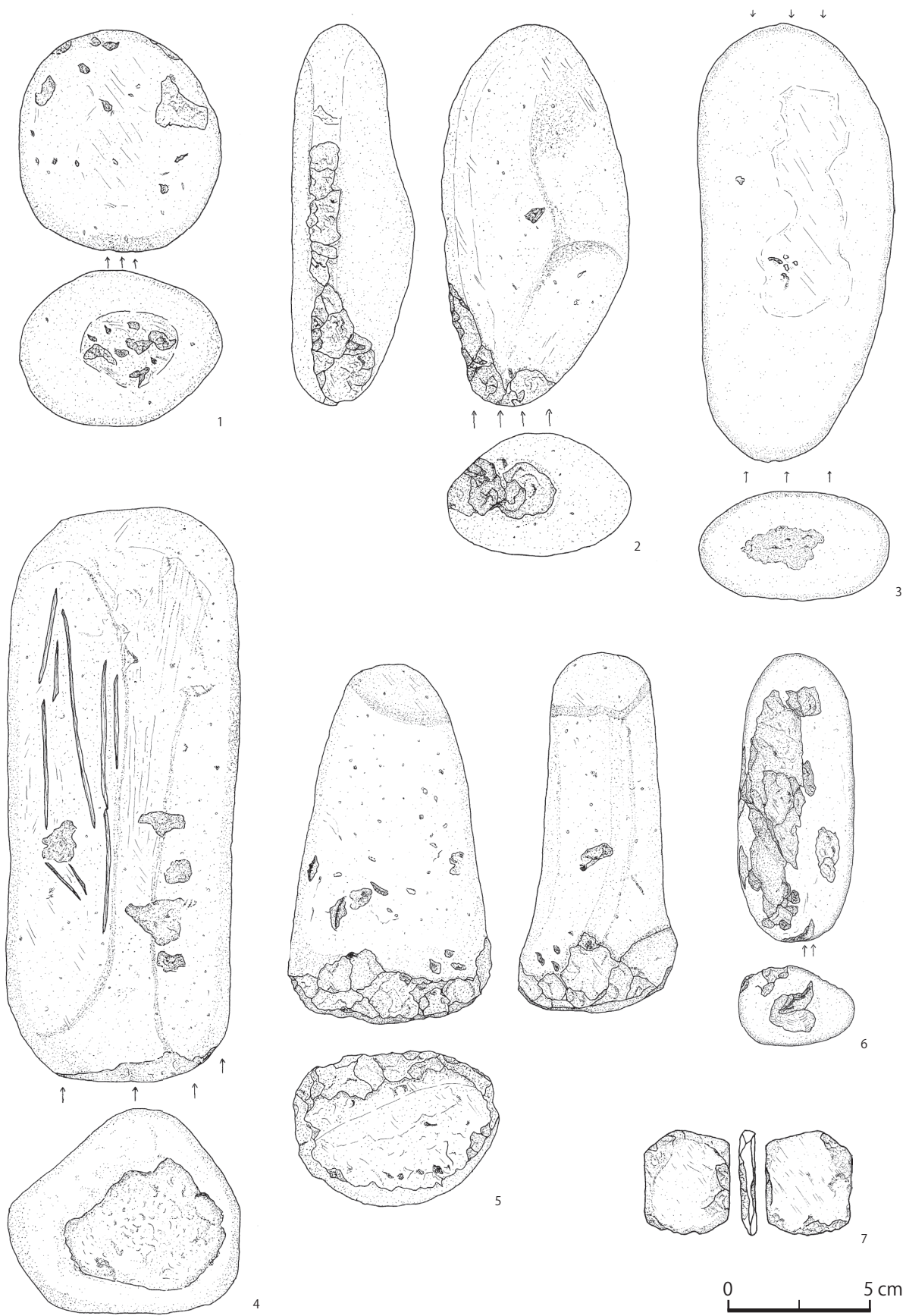
第37图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(3)



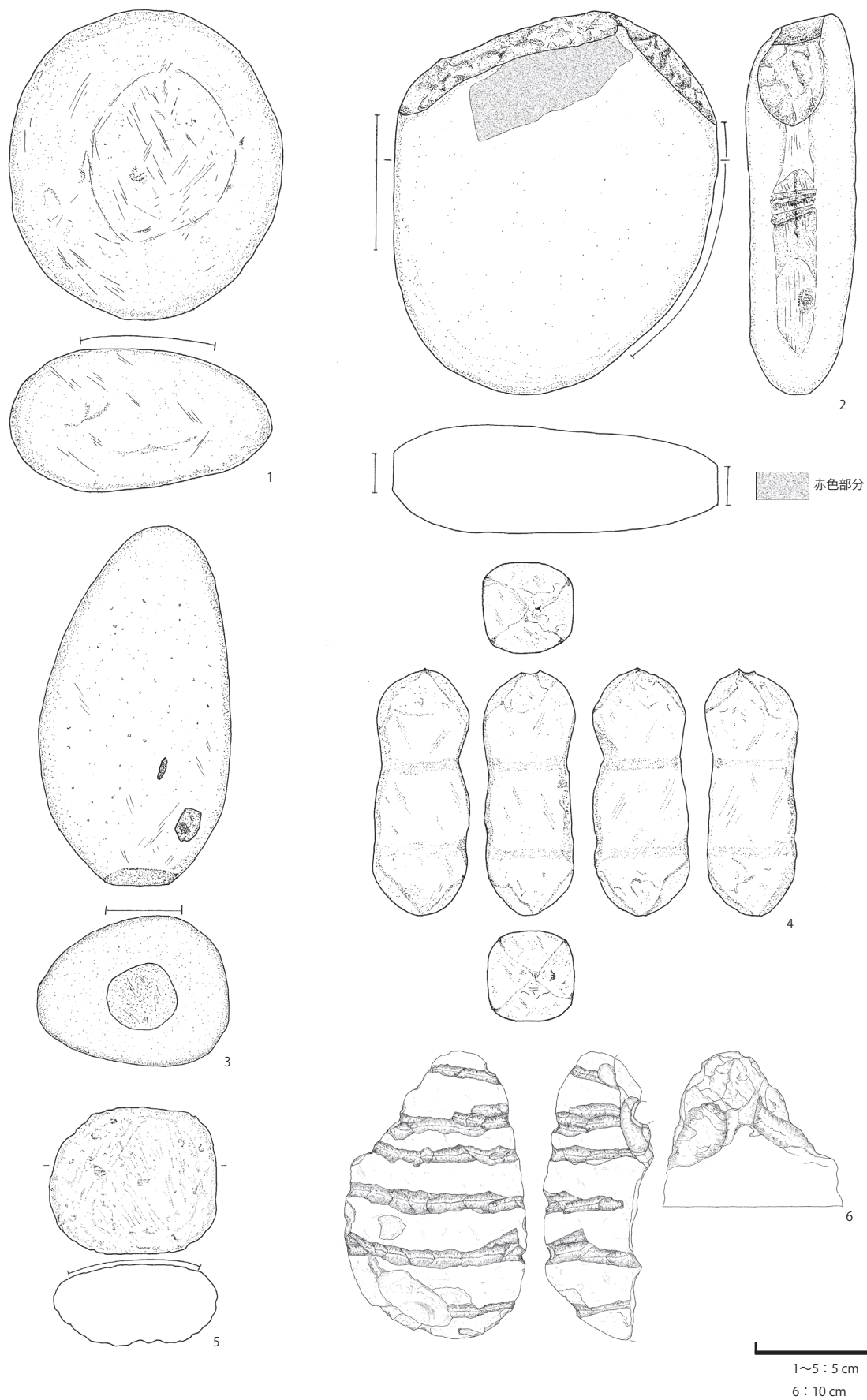
第38图 5号竖穴(TR5-Pit3)炉·圜炉裏 出土石器



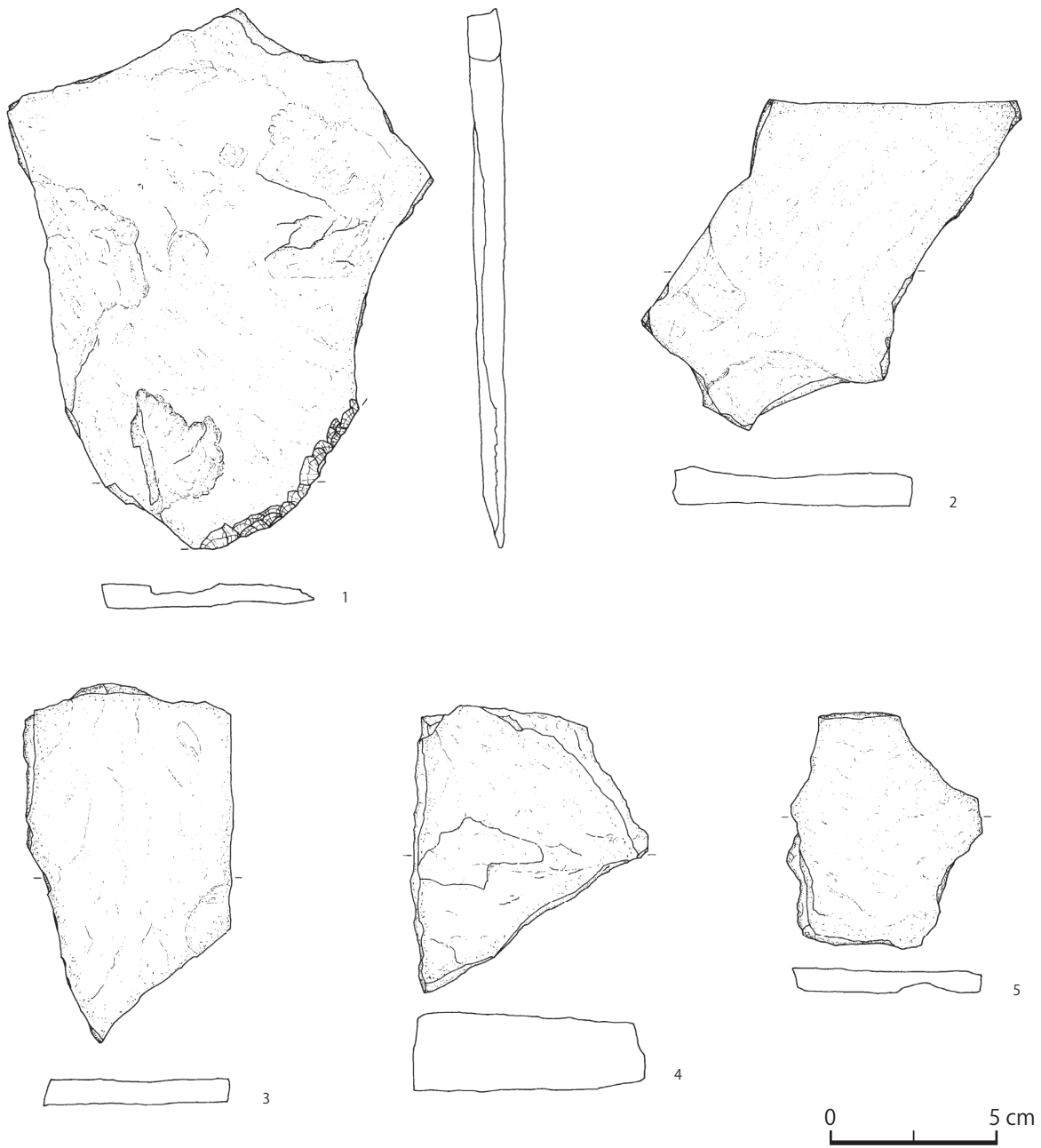
第39图 5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (1)



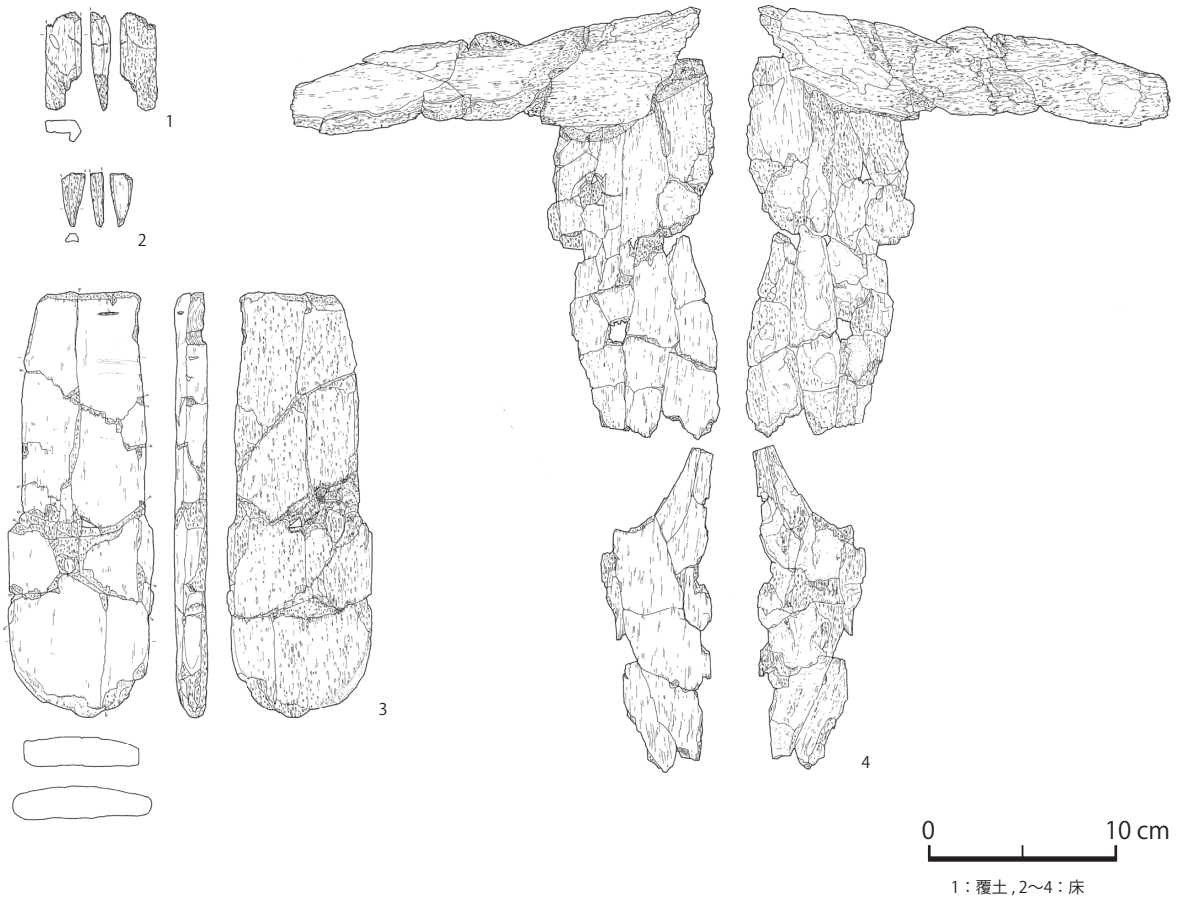
第40图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(2)



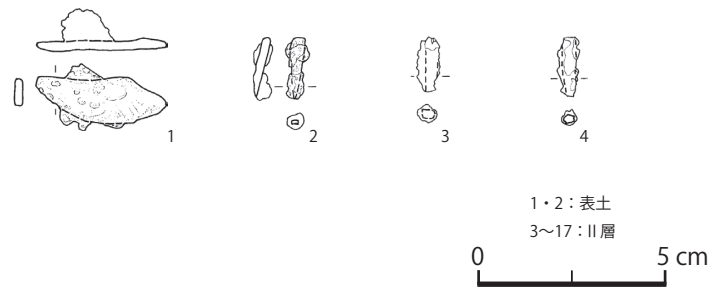
第41图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(3)



第42図 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(4)



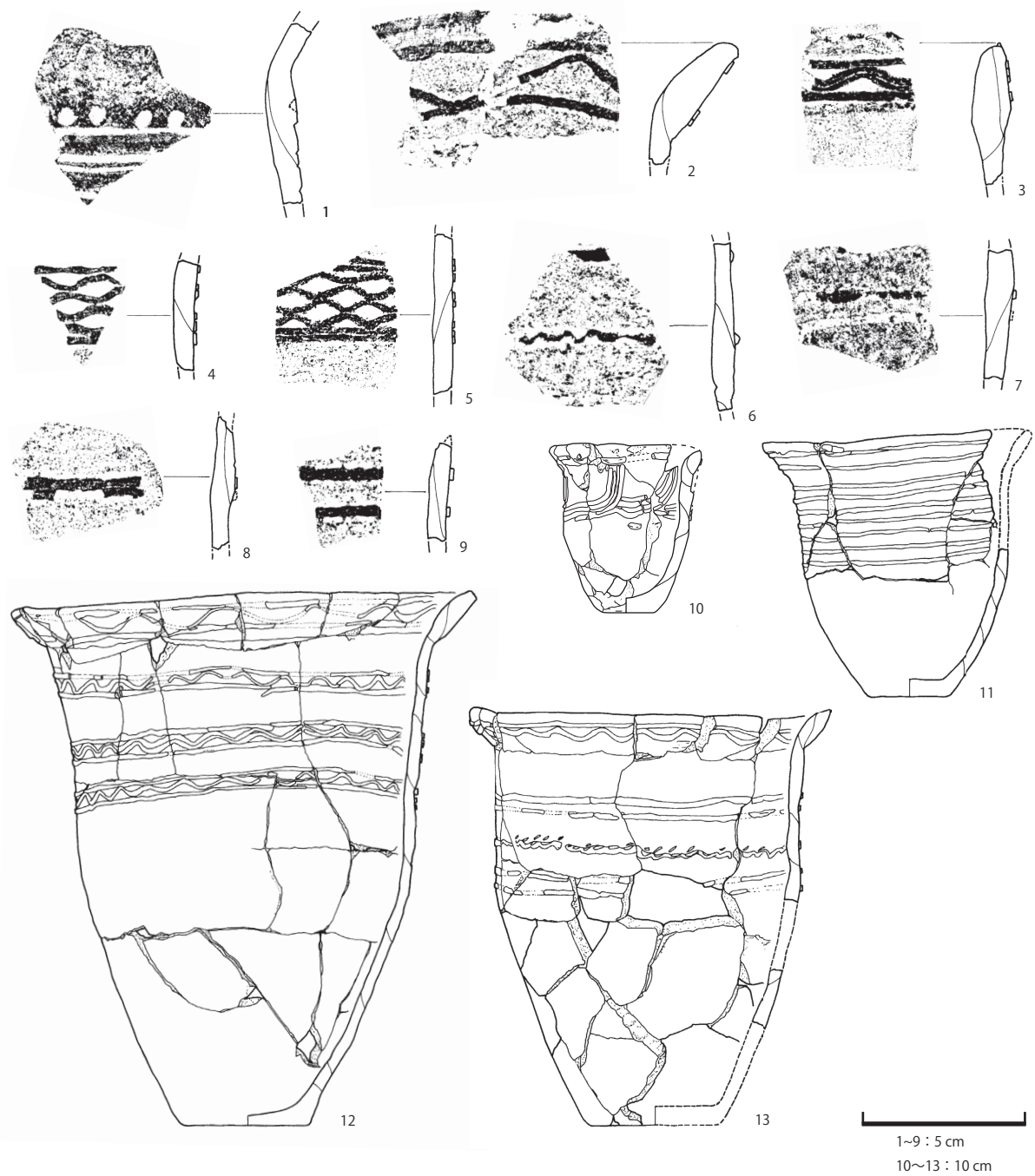
第43图 5号竖穴(TR5-Pit3)出土骨角器



第44图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土金属製品



第45图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土金属製品



第46图 5号竖穴上層配石遺構(TR5)出土土器

本の紐状貼付文を施文し、頸部には口縁部へ迫り上がるような印象の紐状貼付文が連続して施文されている。11は中型のトビニタイ土器である。他の3個体と異なり、頸部は直立せずに底部へむかって緩やかにすぼまっている。文様は紐状貼付文による直線文のみで構成され、口縁部には2本配置し、口縁直下から間隔をあけて頸部から胴部へかけて7本が等間隔に施文されている。12は本遺跡で出土したトビニタイ土器の中で最も大容量のものである。肥厚する口縁には波線幅の広い3本単位貼付文が施文され、頸部から胴部にかけては上下に3本単位貼付文を、その間に2重波線文を直線文で挟んだ4本1単位の紐状貼付文が配置されている。13は12に次ぐ容量を有している。文様は肥厚する口縁部に直線文と波線文の2本1単位の紐状貼付文を施し、胴部にはひねりによる爪形の残る紐状貼付文の上下にやや間隔をあけて2本ずつ直線文が配置されている。

4. 23号竪穴 (TR7-Pit6) 出土遺物

(土器：第47図)

床面の魚骨集中からは小破片ではあるがⅢ群e類に分類されるオホーツク土器が出土している。一方、覆土からはオホーツク土器底部(2)のほか、続縄文土器(3)や縄文中期土器(4)も出土している。また、(3)は口唇部に突起を有し、口縁部に2本の微隆起と斜行縄文が施されている。

(骨角器：第48図)

覆土中から出土した鳥骨製の刺突具である。アホウドリの上腕骨の一端を斜めに研磨して尖らせたものである。

5. 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7) 出土遺物

(土器：第49図)

廃棄層から出土した土器はすべてオホーツク土器である。Ⅲ群e類土器が主体であるが、刻文を有するⅢ群b類土器(20)や沈線文を有するⅢ群c類土器(19)も出土している。本遺跡からの沈線文系オホーツク土器の出土例は19のみである。文様は先の尖った工具による沈線であり、施文後の器面調整により若干沈線が埋まりかけている。胎土は他のⅢ群土器と同じである。

(石器：第50図)

廃棄層から出土した石器では、主に石鏃が多く、刃部調整の粗いものが目につく。2は被熱している。

(骨角器：第51図)

廃棄層中から出土した骨角器である。1・2は開窩式の銚頭であり、欠損品ではあるが索溝部分や縄を通す孔が残存している。3は小型の彫像であり、フクロウを思われる彫刻が施されている。目やくちばしだけでなく、翼部分にも放射状に刻線がつけられている。残存部の直径30 mm、厚さはわずか3.6 mmと華奢な作りである。

4は鳥骨の先端部を斜めに切断した骨鏃である。5は骨針であり、針穴の上部には糸通りを良くするための溝がもうけられている。8は骨匙の欠損品と推察され、歯クジラの歯のセメント質年輪が観察できる。4本のスリット状の隆起には水平方向の刻みが施され、匙のくびれ部分からスリット部分にかけて縁に櫛歯状の加工が残存している。また、厚さが約1.6 mmと極端に薄く加工されている。6・7は鯨骨を尖端加工し、9・10は原材と思われる。11は円盤状製品である。

(金属製品：第52図)

廃棄層からは2点の金属器が出土している。第52図1は刀子であり、切先部分を欠損している。2は調査区の壁際から出土した神功開寶である。神功開寶は765(天平神護元)年初鑄で、皇朝十二銭の3番目に発行された貨幣である。銭文ははっきりしており、字体は「功」字の作りが刀になりノの部分の長い「長刀」、「開」字を隸書にする「隸開」であり、「寶」字の貝がやや小振りである。外縁外径は24.51 cmと標準的な大きさであるが、縁厚1.06 cm、内厚0.37 cmと非常に薄いという特徴がある。また、その影響か重量が2.19 gと大変軽いことも注目される。皇朝十二銭の出土はオホーツク文化の遺跡では初例であるため、その意義については4章総括の中で述べることとする。

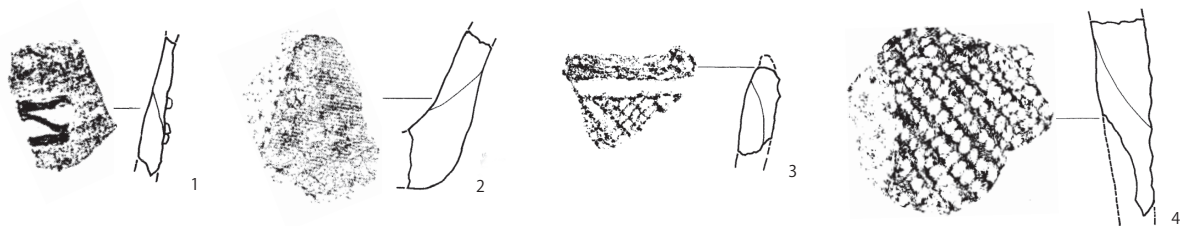
6. 1号墓 (TR4-Pit1) 出土遺物

(土器：第53図)

1~3は覆土中から出土したオホーツク土器である。3は完形品であり、出土状況から被葬者の頭部に被せた被甕と推察される。文様は3本単位貼付文を口縁部から3段配置するもので、Ⅲ群e類に分類される。器面は黒色を呈し、煮こぼれの炭化物が内外面に付着している。また、縄文中期のV群b類土器も1点出土している。

(石器：第54図)

覆土出土の石器である。出土している剥片石器の多くは石鏃である。7の泥岩製の扁平のすり石は側縁部や長



1: 床, 2~4: 覆土

2: 10 cm

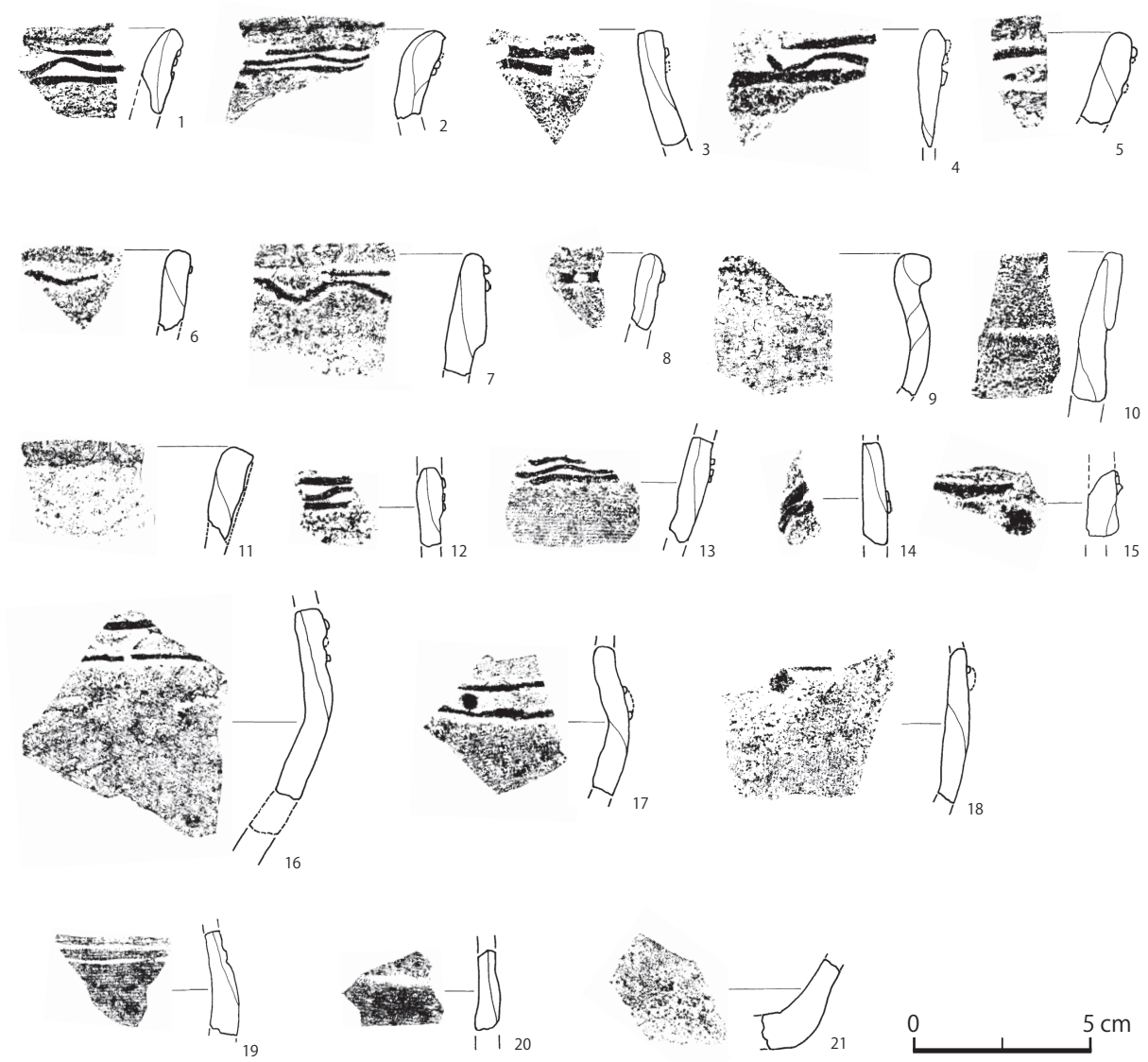
1·3·4: 5 cm

第47图 23号竖穴(TR7-Pit6)出土土器

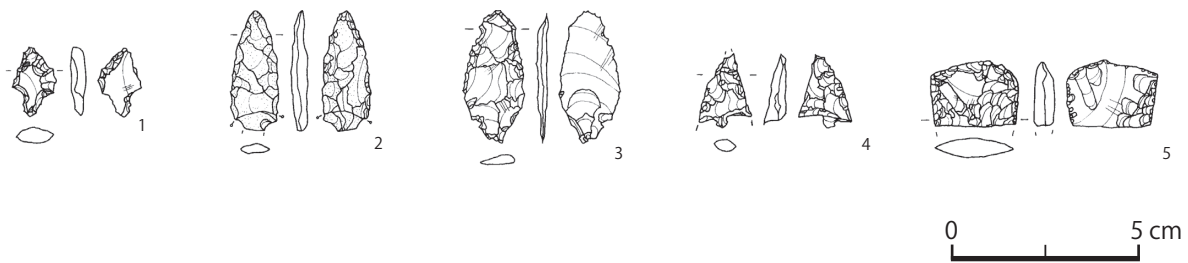


0 5 cm

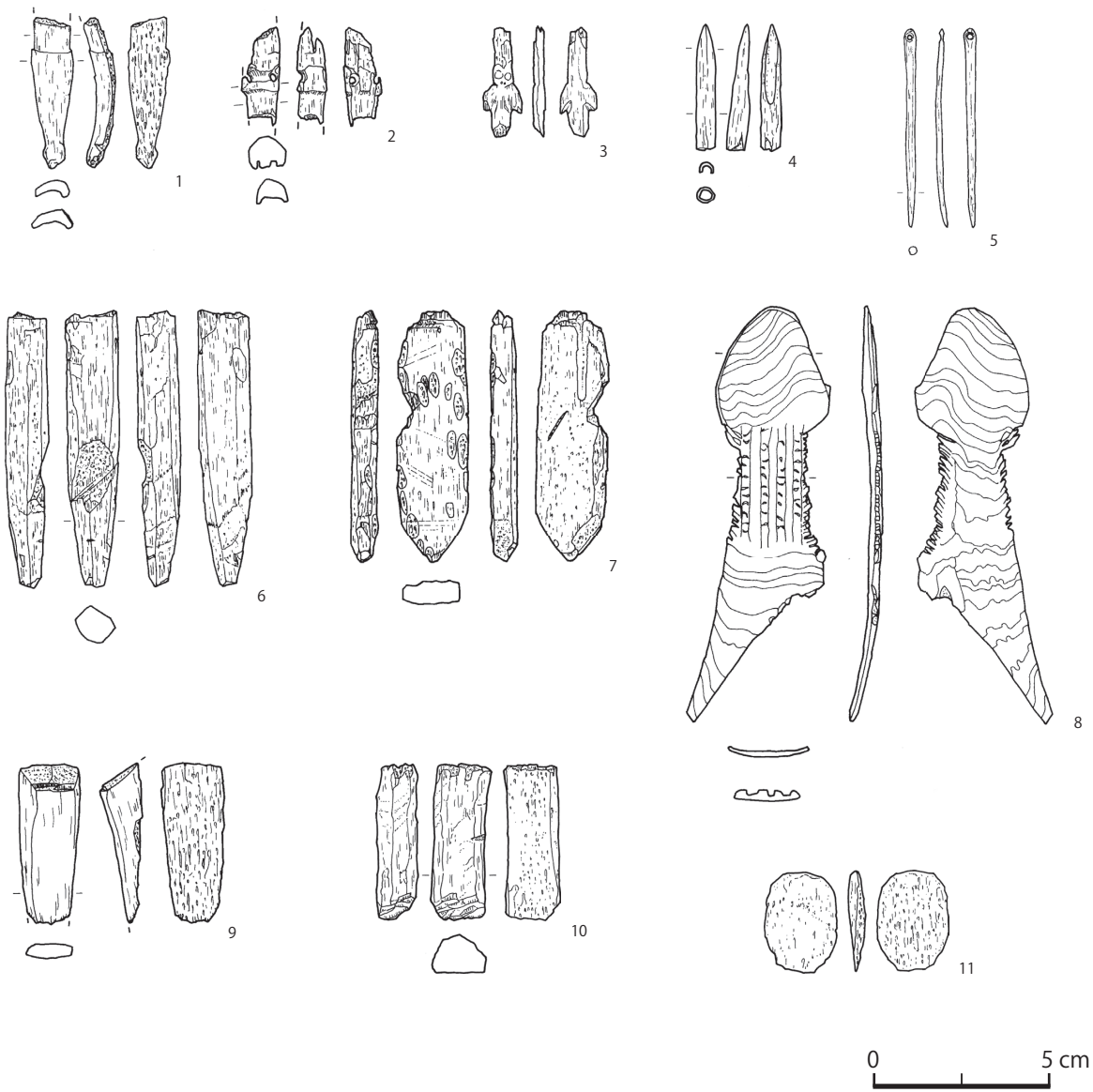
第48图 23号竖穴(TR7-Pit6)出土骨角器



第49图 22·23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土土器



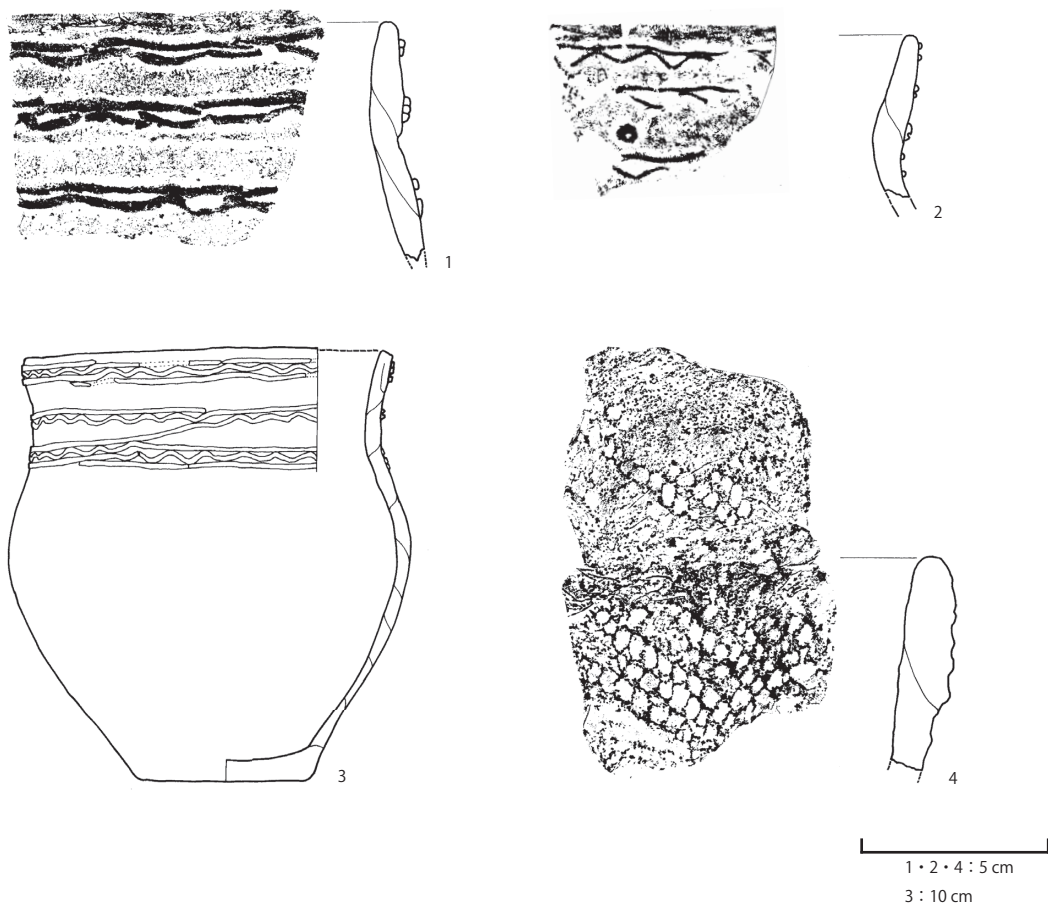
第50图 22·23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土石器



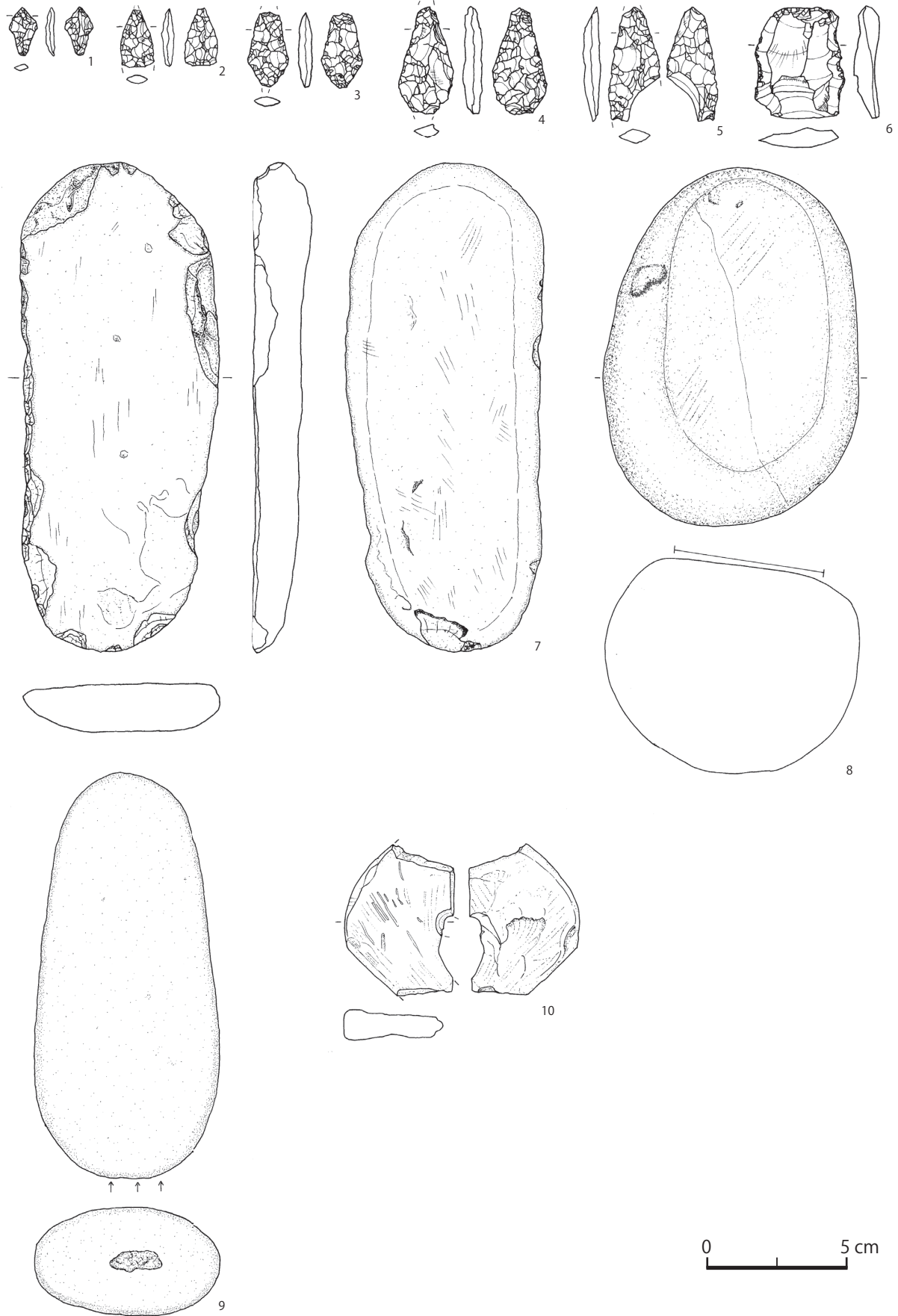
第51图 22·23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 出土骨角器



第52图 22·23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 金属製品



第53图 1号墓(TR4-Pit1)出土土器



第54图 1号墓(TR4-Pit1)出土石器

軸端部に打痕調整が見られる。擦痕は観察していないが、土を掻く石鍬などの用途も考えられる。10は泥岩製の有孔石製品で中央に穿孔が観察できる。側縁部を含め全体に研磨されている。

(金属器：第55図)

覆土中からは2点の鉄製品が出土している。第32図1は刀子の茎部分であり、片側には骨製の柄（鹿角か）が残存し、中央に目釘孔もみとめられる。2は鉄針であり、両端が欠損している。

7. 2号墓 (TR5-Pit4) 出土遺物

(土器：第56図)

覆土中から4点のオホーツク土器が出土した。1と4は人骨（歯）に近接して出土した個体である。文様は均整のとれていない紐状貼付文によるもので、口縁部から3本単貼付文、工具により凹凸が付けられた3本単貼付文、直線文と波線文を交互に施文した5本1単位の貼付文が配置されている（1）。出土位置や胎土・焼成から1・4は同一個体と推察されるが、直接接合はしない。

(石器：第57図)

覆土出土の石器である。出土している石器は全て石核状フレイクである。3の形状はみかんの房に類似し、特徴的である。

(金属器：第58図)

覆土中から刀子が出土している。1片は積石直下の坑上から出土し、残りの2片はやや離れた北側から出土しているがそれぞれ接合した。棟部がやや湾曲している。

(繊維製品：第3章4節写真1～6)

2号墓の積石の直下から炭化した織物製品が出土した。出土時は同一破片であったが、取り上げの際に分離したため2点として取り上げた。いずれも平織組織の断片であり、非常に緻密に織られている。その他、本遺物に関する詳細な分析結果は第3章4節を参照されたい。

8. 土坑 (TR4-Pit2a) 出土遺物

(土器：第59・60図)

第59図はPit2aの底面出土土器である。一般的な直線文と波線文の単位貼付文だけでなく（1・2）、紐状貼付文に工具で刺突を施して鎖状にしたもの（3）が底面から出土している。また、小破片ではあるがⅡ群c類土器が出土している点には留意したい。文様は縦の沈線を施した後に横の沈線を施文しており、胴部の格子状沈線

文と推察される。第60図は覆土出土土器である。1は強く外反した口縁と平坦な貼付文が特徴的なⅡ群b類土器である。その他はⅢ群土器であるが、4は短い粘土紐を十字に配置することで一種の意匠としており、類似する土器片は他の遺跡からも出土しておらず、独創的な文様である。

(石器：第61図)

第61図4はPit2a底面出土、他は覆土中より出土している。この中からも石核状フレイクが出土している。同図5の安山岩製のたたき石は球状の一端に打痕が観察できた。

(金属器：第62図)

Pit2aの覆土から刀子1点が出土している。第45図4と同じく、切先は折れ曲がった状態である。

9. 土坑 (TR4-Pit2b) 出土遺物

(土器：第63図)

Pit2bの覆土および底面出土土器である。底面からはⅢ群e類のオホーツク土器が出土しており、本遺構に伴うものと推察される。また、1点ではあるが縄文中期の土器片も出土している。

(石器：第64図)

第64図はPit2b覆土出土である。1は石鍬であり、被熱している。4は側縁部全面に刃部調整を施したラウンドスクレイパーである。

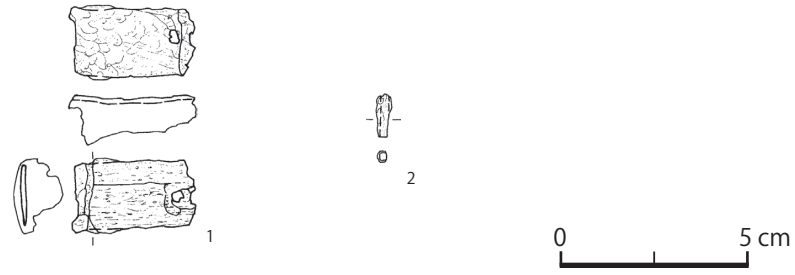
10. 配石遺構 (TR6-Pit5) 出土遺物

配石遺構に明確に伴うものを判別することが困難なため、Ⅱ層中の配石遺構範囲内から出土した遺物をすべて抽出し、本節で紹介することとした。

(土器：第65～68図)

配石遺構が構築されたⅡ層中から出土した土器である。大部分はオホーツク土器で構成されるが、擦文土器（第65図1～3）やトビニタイ土器（第65図4・5）もわずかに確認された。復元可能であった第65図5はPit5の周辺から出土した個体である。口縁部は緩く外反し、胴部が張り出さずに底部へかけてすぼまる器形であることから、Ⅱ群a類に分類した。また、底部外面には凹凸があり、器体も元々傾いた作りであるため、平坦な場所では自立することができない。

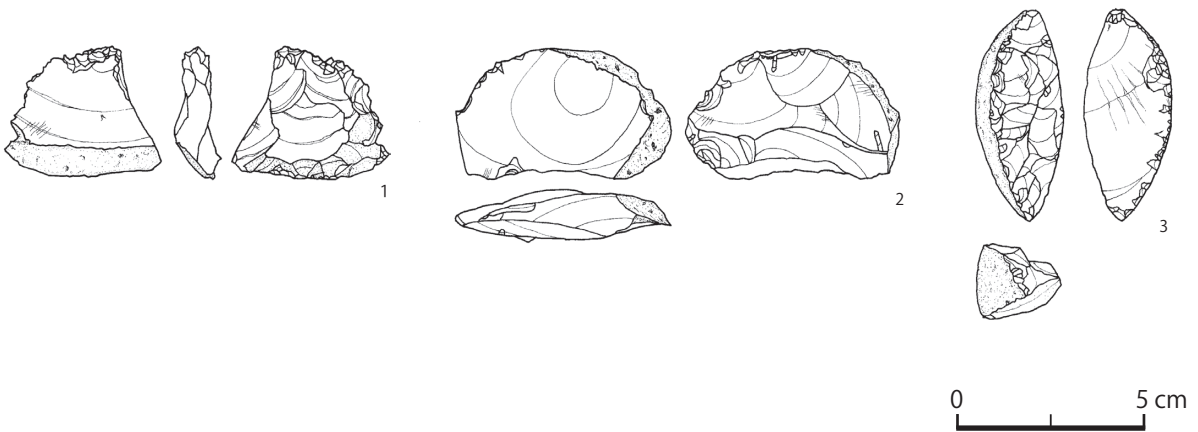
第66・67図はすべてオホーツク土器である。他の遺構同様、Ⅲ群e類主体であるが第67図9はⅢ群b類に分類



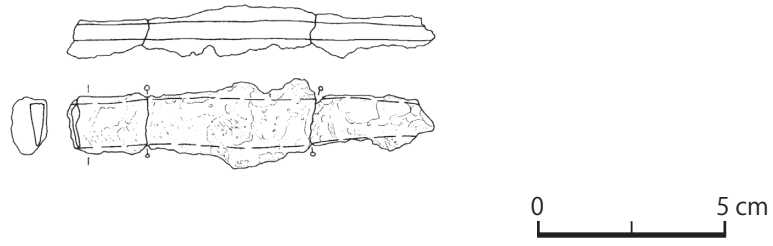
第55图 1号墓(TR4-Pit1)出土金属製品



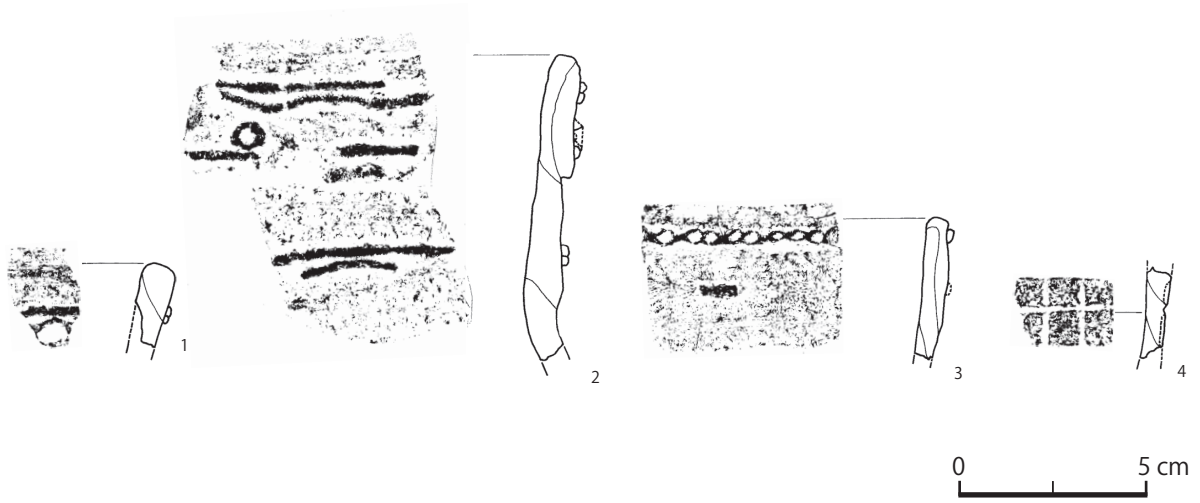
第56图 2号墓(TR5-Pit4)出土土器



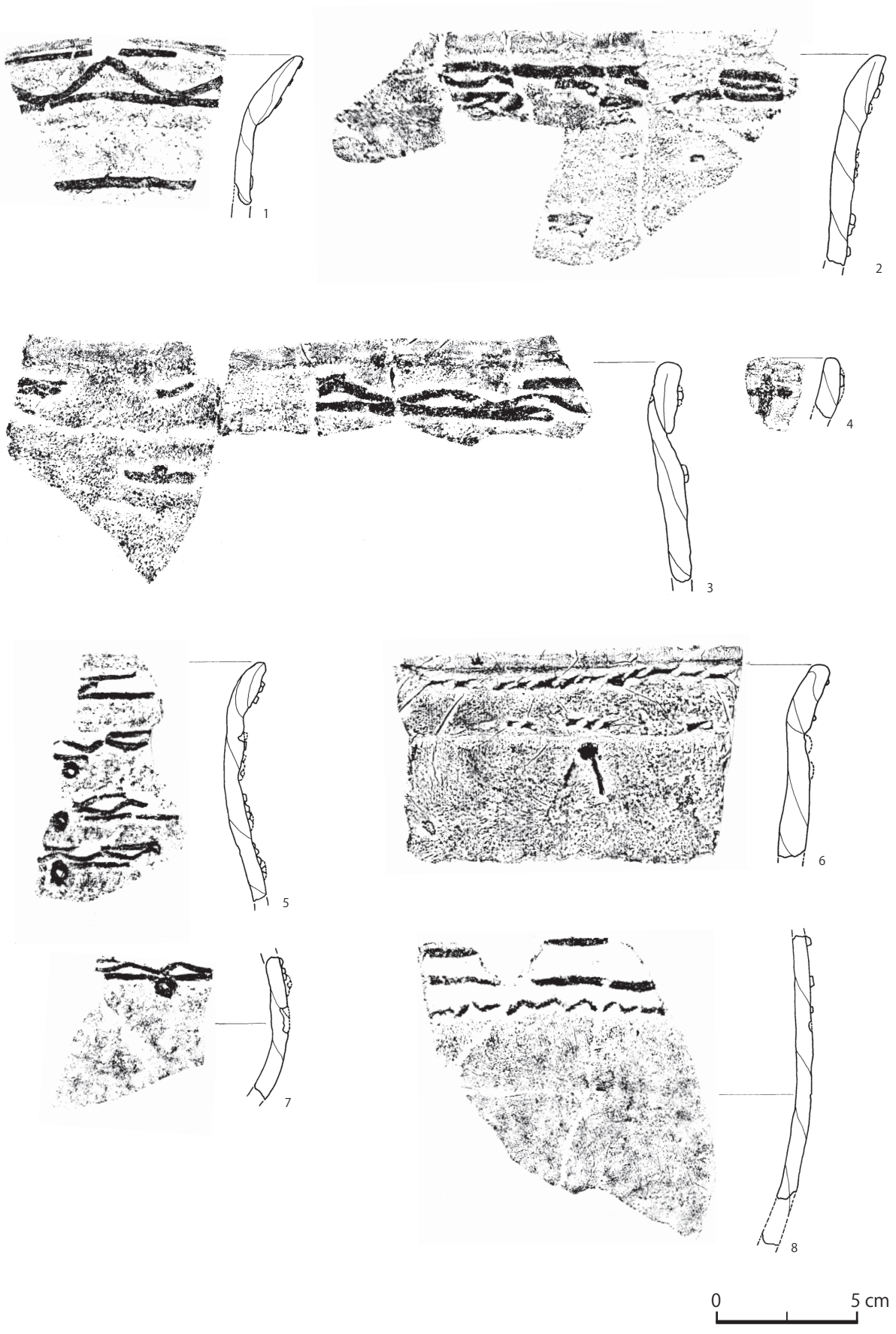
第57图 2号墓(TR5-Pit4)出土石器



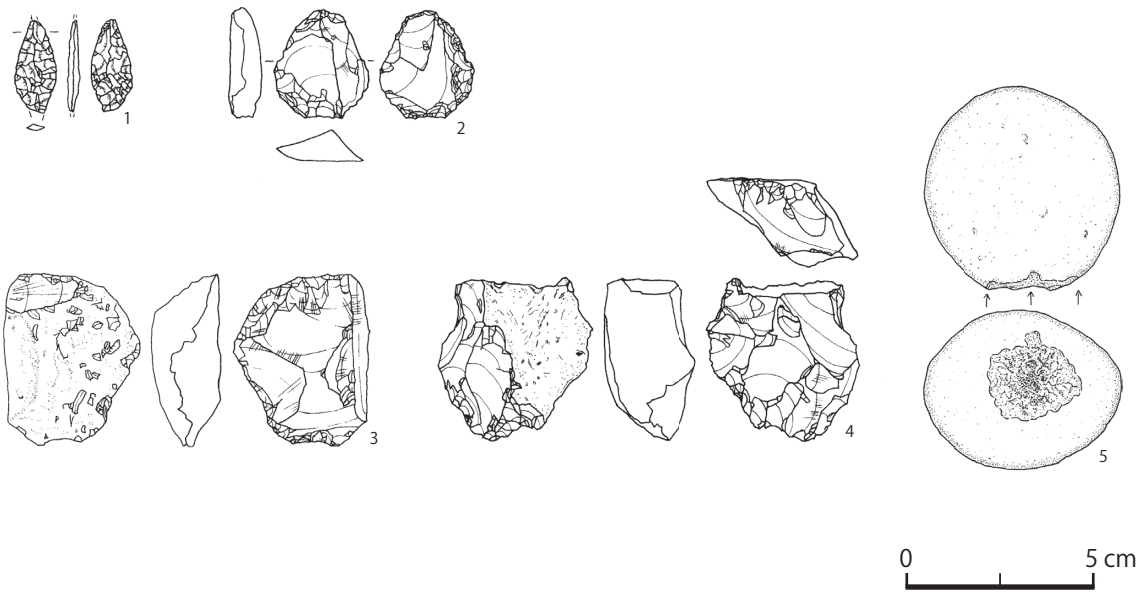
第58图 2号墓(TR5-Pit4)出土金属製品



第59图 土坑(TR4-Pit2a)床面 出土土器

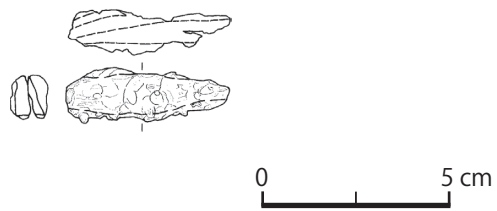


第60図 土坑(TR4-Pit2a)覆土 出土土器

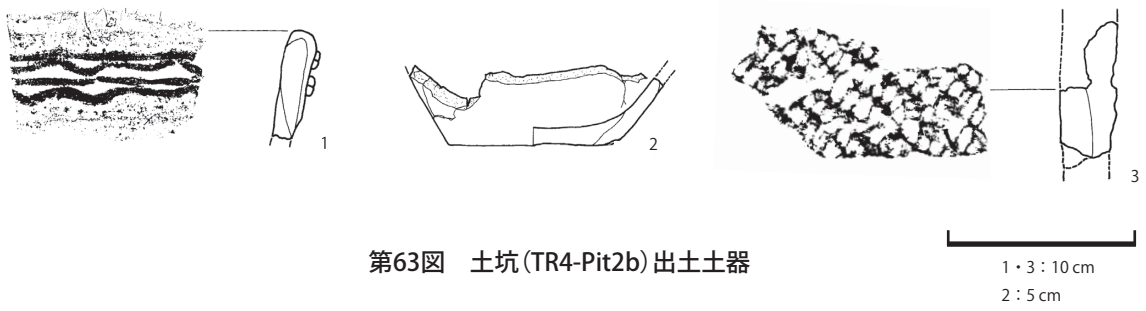


第61图 土坑 (TR4-Pit2a) 出土石器

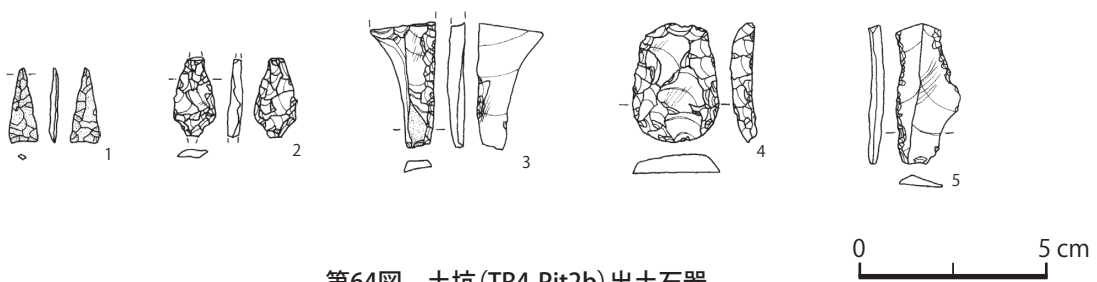
1~3·5: 覆土
4: 底面



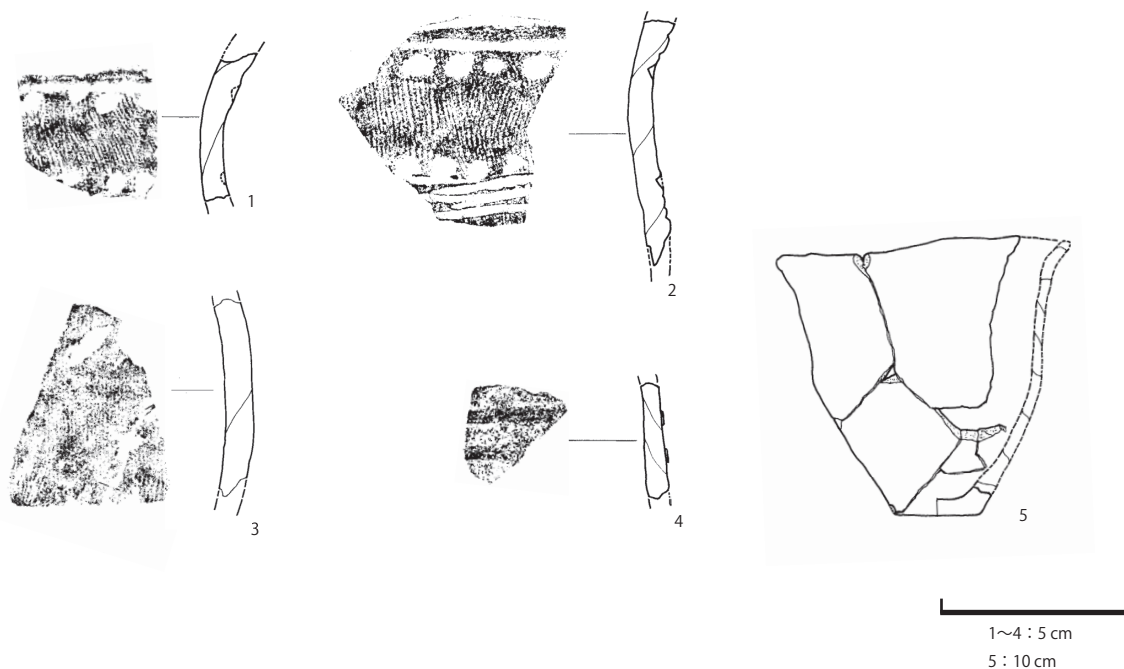
第62图 土坑 (TR4-Pit2a) 出土金属製品



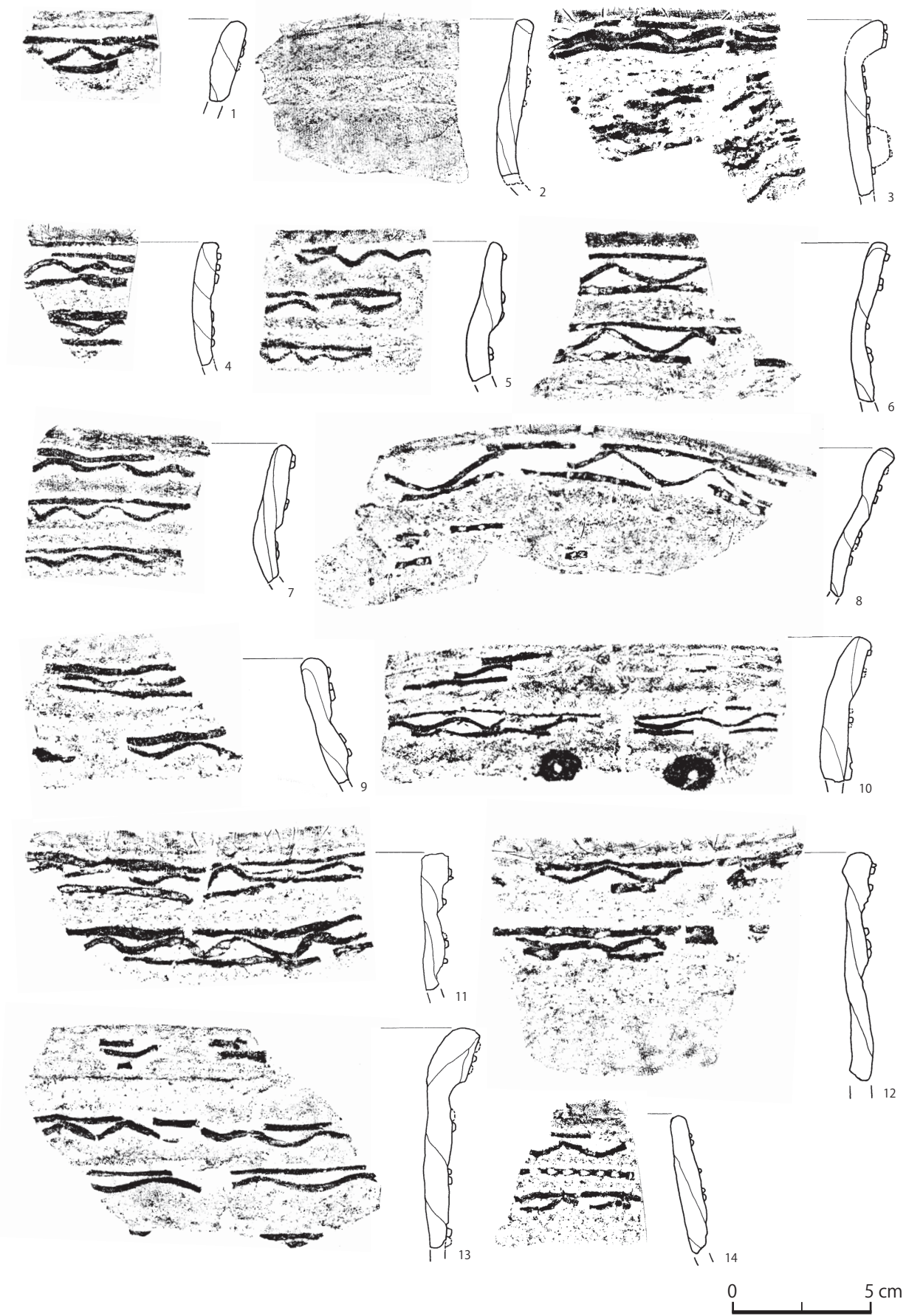
第63图 土坑 (TR4-Pit2b) 出土土器



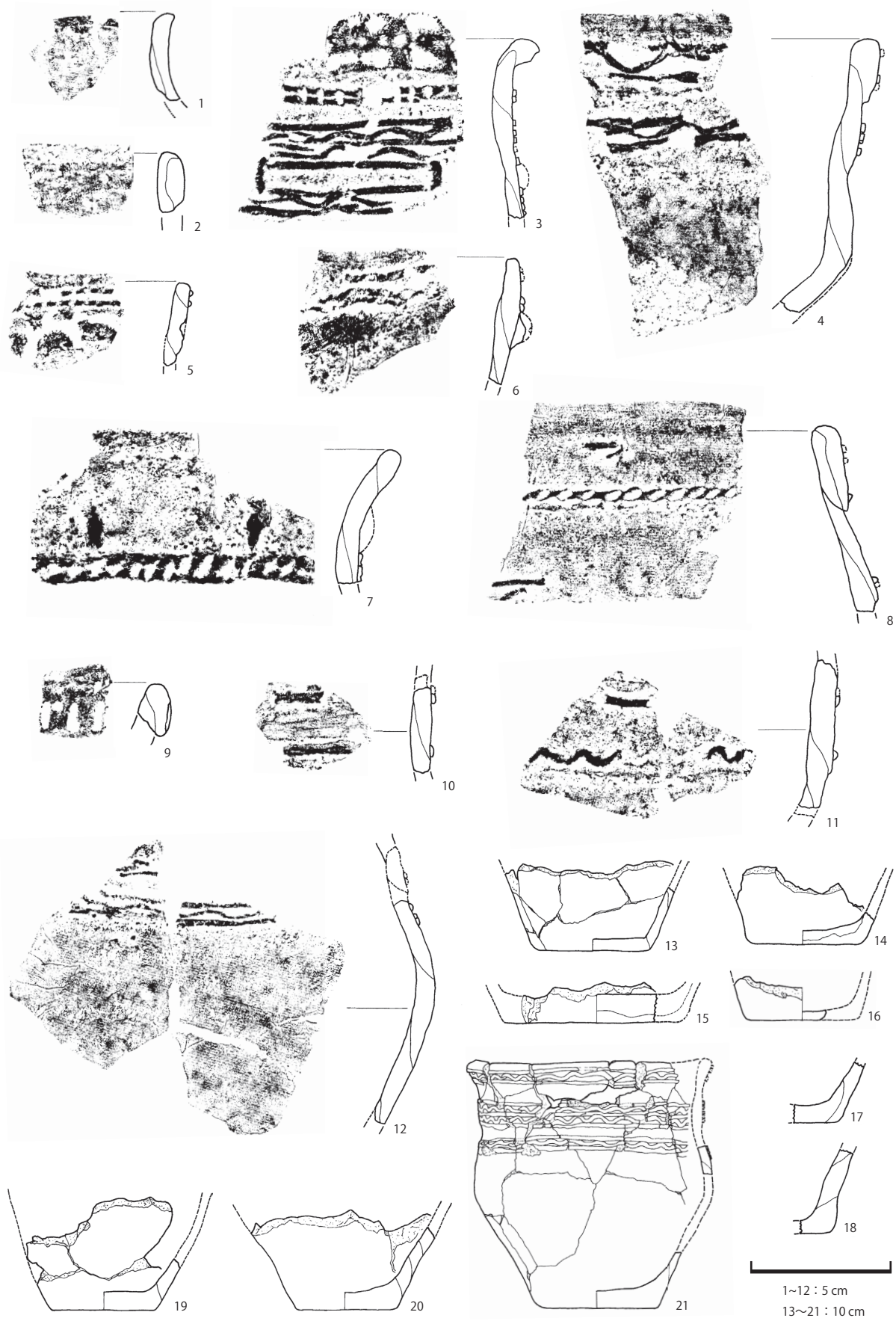
第64图 土坑 (TR4-Pit2b) 出土石器



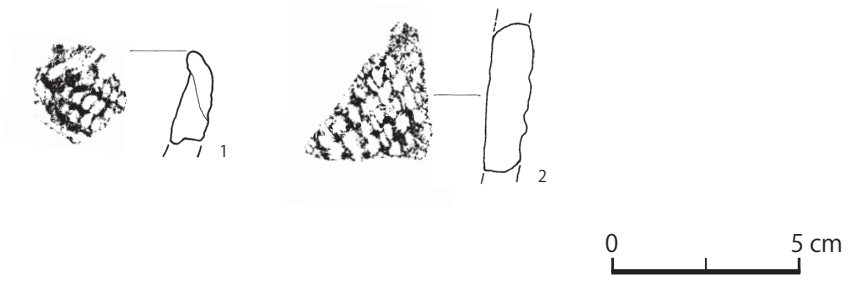
第65図 配石遺構(TR6)出土土器(1)



第66图 配石遺構(TR6)出土土器(2)



第67図 配石遺構(TR6)出土土器(3)



第68図 配石遺構 (TR6) 出土土器 (4)

され、オホーツク文化刻文期に相当する。胎土はやや荒い砂粒を多く含んでおり他のⅢ群土器とは異なる。一方、復元可能であった第67図21は器高約18cmと中型であり、断面平坦な紐状貼付文が螺旋状に施文されることからⅢ群e類に分類される。3本単位貼付文を上下に配置し、その間に直線と波線を交互に5本配置した単位貼付文を配置した文様構成となっている。器面は黒色を呈し、胴部下半は縦位のナデ成形がなされている。また、配石中からは第68図の縄文土器片も出土している。

(石器：第69～71図)

第69図～第71図は配石遺構が構築されたⅠ～Ⅱ層中から出土した石器である。第69図1～20は石鏃で、1のように粗雑な調整のものもあれば、20のように押圧剥離による微細剥離痕が観察できるものもある。5の将棋駒形石鏃は被熱している。

第70図40～44、第71図45～47はすり石と、たたき石である。44や46のように擦り面に打痕が見られるものや、42や47のように擦り面のみのものがある。たたき石も含め、元としている石の大きさには大小はあるが、ほぼ棒状の石材を利用する点では共通している。第70図39～44、第71図45～47のうち、39は砂岩製、40は硬質頁岩製で、それ以外は安山岩製である。

(骨角器：第72図)

配石遺構が構築されたⅡ層中から出土した鯨類骨の骨角器である。用途は不明であるが断面D字型になるよう加工を施し、先端部には3条の刻線が認められる。

11. 遺物集中 (TR6) 出土遺物

(土器：第73図)

Ⅱ層下部～Ⅲ層上面で出土したもので、すべてⅢ群土器である。唯一文様の分かる個体(1)は口縁部と底部を欠いた大甕である。出土時の状況から1と4は同一個体であるが直接接合はしなかった。文様は1本の波線を2本の直線で挟んだ3単位貼付文であり、Ⅲ群e類に分類される。本遺構に伴う土器に口縁部が含まれず、底部が多く存在することには留意すべきである。

(骨角器：第74図)

遺物集中に伴う骨角器である。1は骨斧である。1段のくびれによって柄部と刃部に区別され、基部に突起を有する。2は釣針の接続部を欠損しているがU字形の組み合わせ式釣針軸と推察する。残存部には糸掛け用の溝が片面のみ掘られている。

12. Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

(土器：第75・76図)

第75図はTR4のⅠ・Ⅱ層出土土器である。TR5と同様にⅢ群e類土器を主体とするが、1点のみⅢ群b類土器が出土している(9)。文様は横長レンズ状の爪形刻文を口縁部の下半に2段配置し、互い違いになるよう連続施文している。

第76図はTR5のⅠ・Ⅱ層出土土器である。3本単位貼付文を複段配置したⅢ群e類土器を主体とするが、中には粒状貼付文を施文する例もみられる(10・11・13)。

(石器：第77～79図)

第77図1～4はTR4のⅠ層出土石器である。4は非常に小さなプラットフォームから微小剥片を剥ぎ取っている痕跡が見られる。同図5～20はTR4のⅡ層出土のものである。この中には石鏃が多いが、5～7の粗雑な刃部調整のものもある一方、8～14のように全面に微細調整を行なっているものなどもある。中でも8の石鏃は将棋駒形からひし形へと変化の過程を示すと考えられる良い資料である。19は砂岩製の砥石で全面を研磨している。

第78図1～5はTR7のⅠ層出土石器である。2は基部調整途中の石鏃未製品である。

第79図1～4はTR5のⅡ層出土石器である。1は側縁部に微細な刃部調整を施している石鏃である。4は安山岩製の石錘で長軸方向に1条の溝が見られる。形状はいびつである。

(骨角器：第80図)

TR7のⅠ層から出土した骨角器である。1は丸みを帯びたヘラ状製品の一部と推察される。先端部は使用により摩滅している。2は鹿角製の刺突具である。

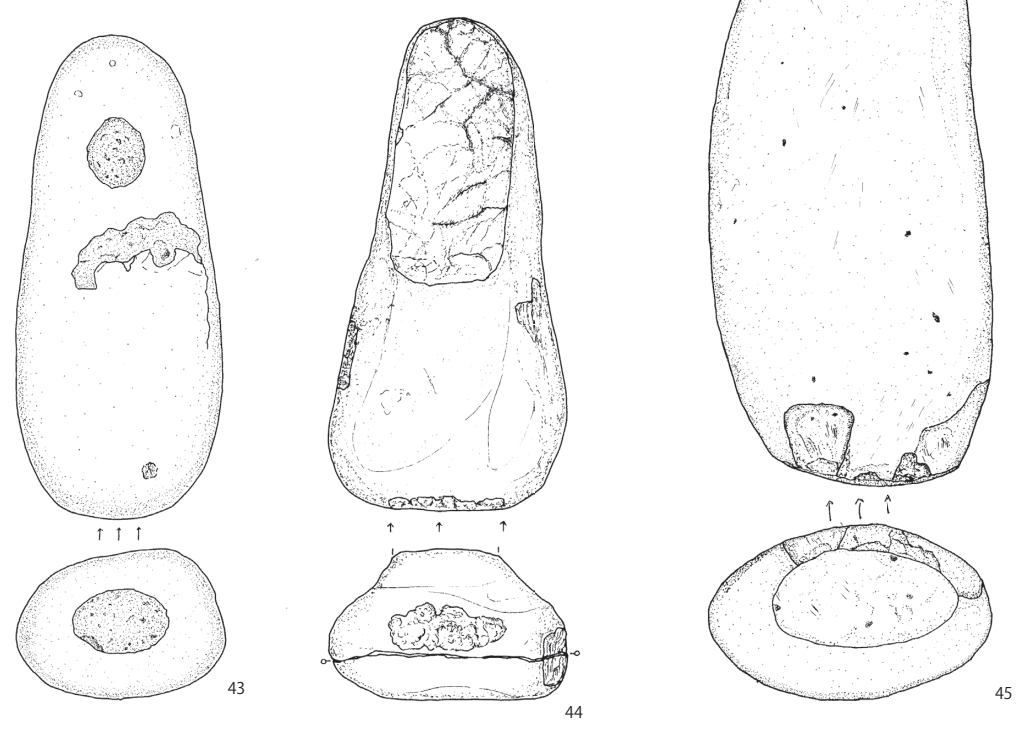
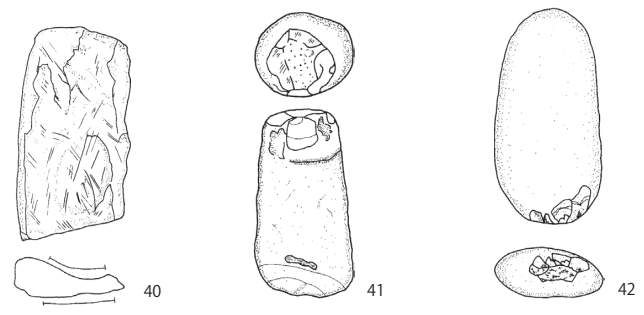
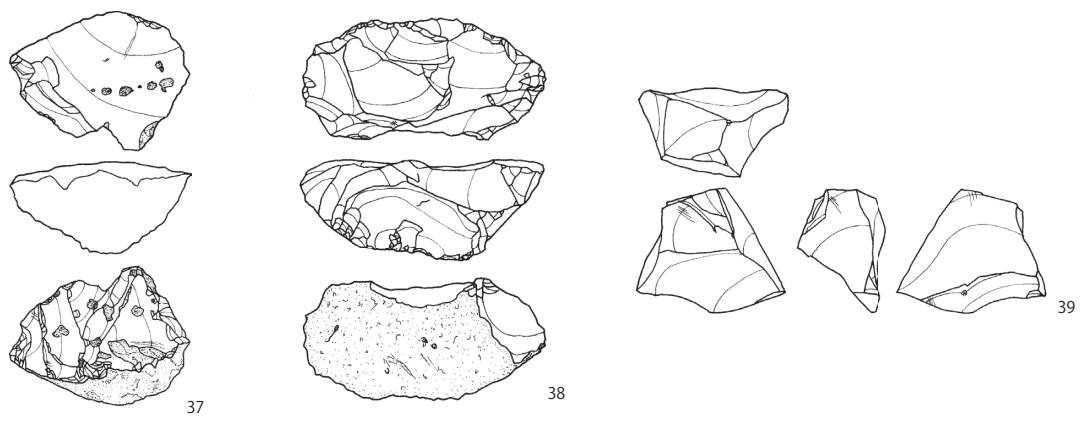
(金属器：第81・82図)

第81図1はTR4のⅠ層から出土した鉤状の鉄製品である。トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の9c号床面から出土したものより小さく、釣針としての機能も考えられる。2は不明鉄片である。刀子の刃部とも考えられるが、非常に薄いため不明鉄片とした。

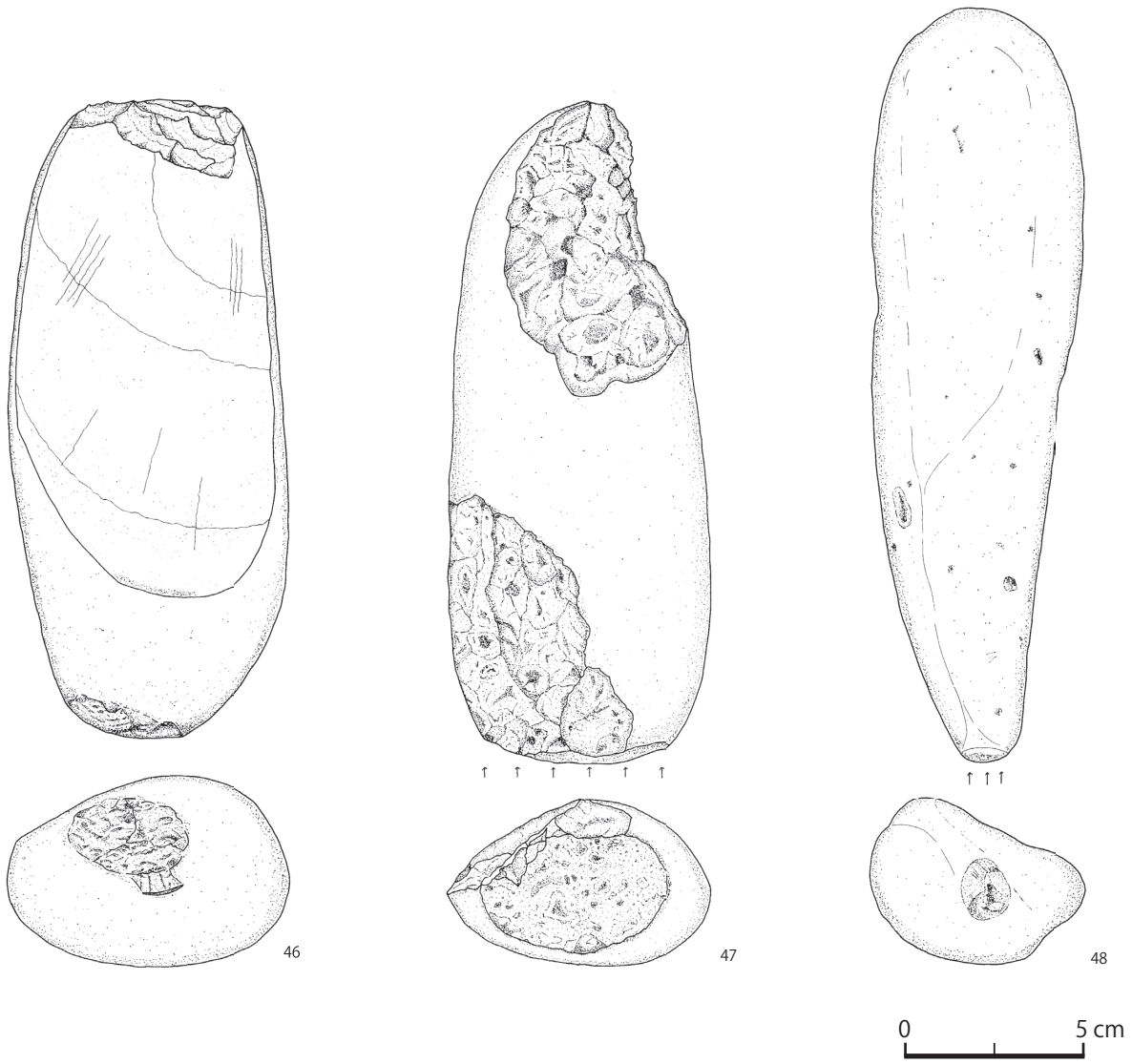
第82図はTR5のⅡ層中から出土した刀子である。1の刀子は刃部先端と茎尻を欠損している。2は比較的小型の刀子で茎尻を欠損している。3は柄口に金具が巻かれており、斜里町の須藤遺跡から出土したトビニタイ文化期の刀子に類似する。



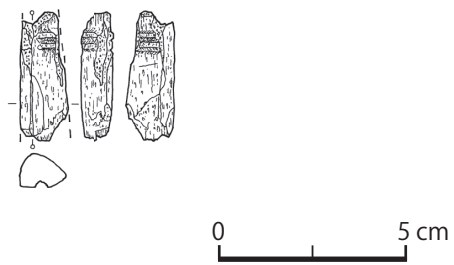
第69图 配石遺構(TR6)出土石器(1)



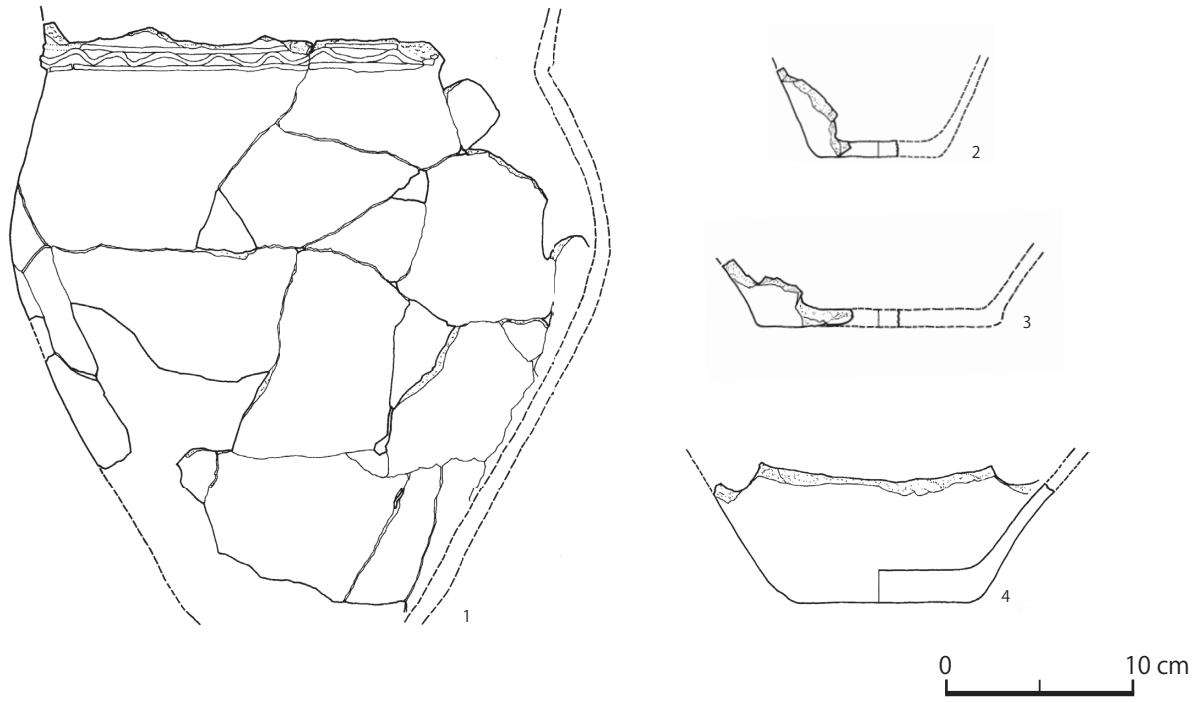
第70図 配石遺構(TR6)出土石器(2)



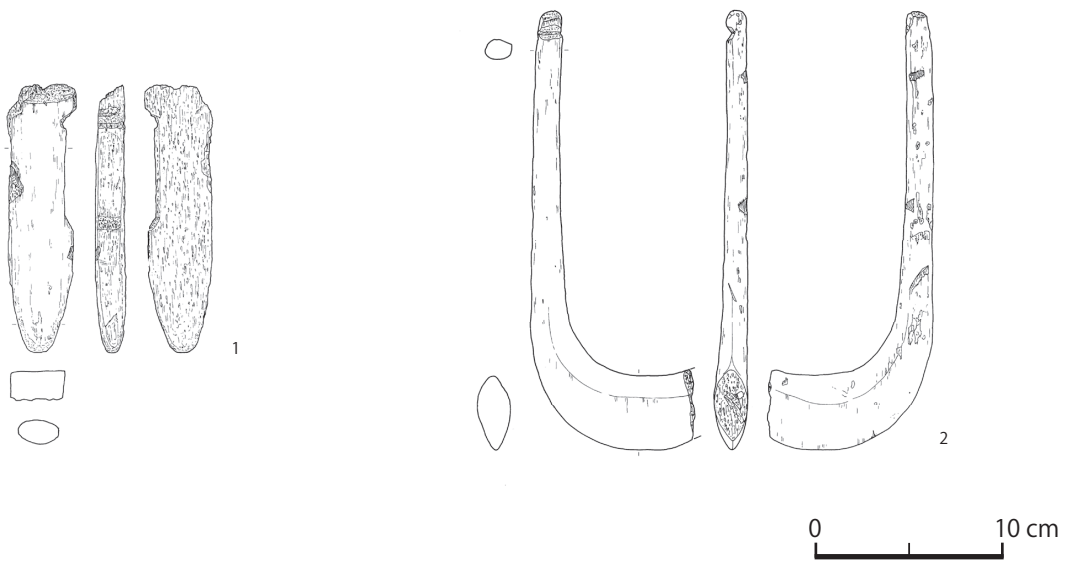
第71図 配石遺構(TR6)出土石器(3)



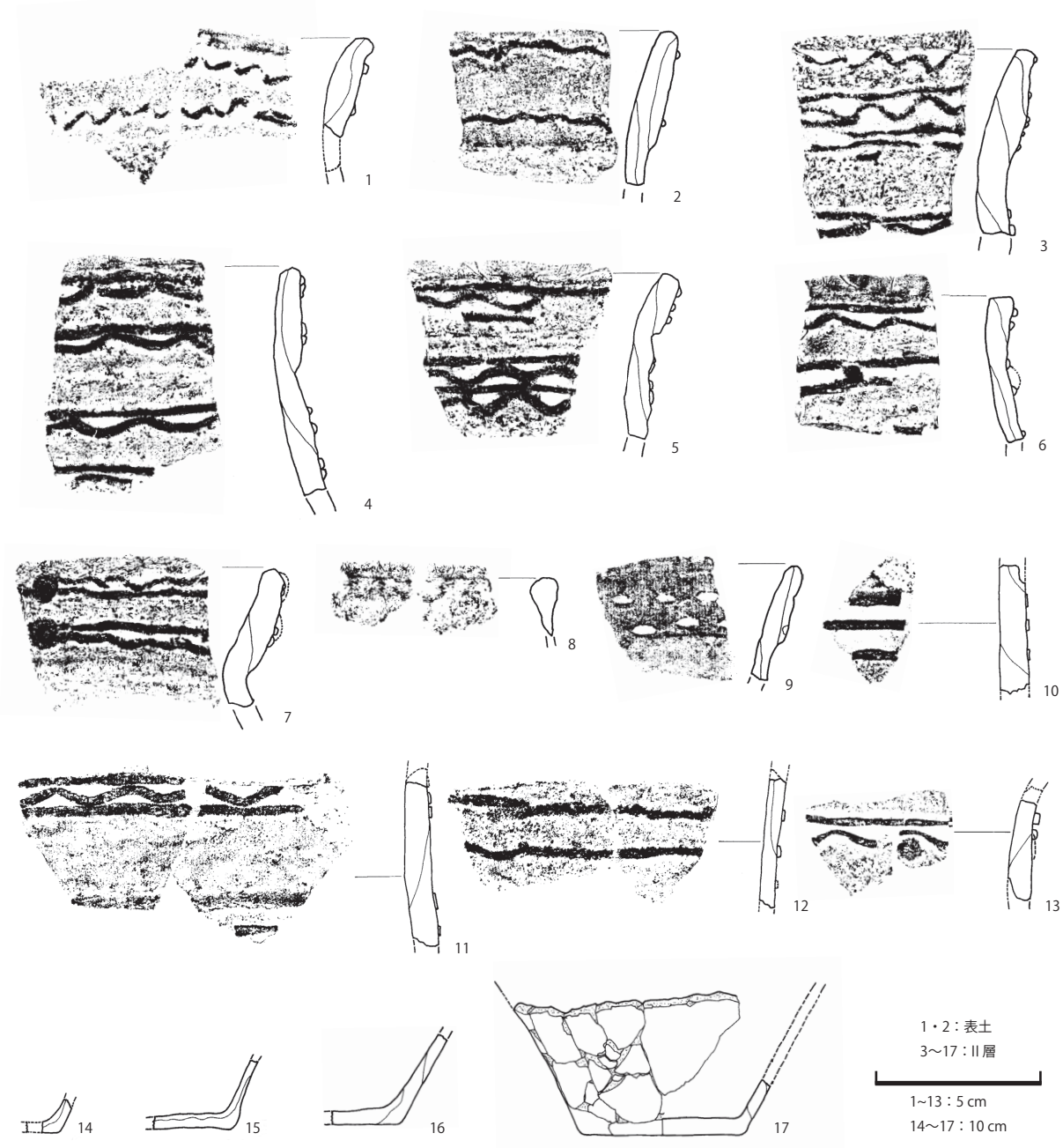
第72図 配石遺構(TR6)出土骨角器



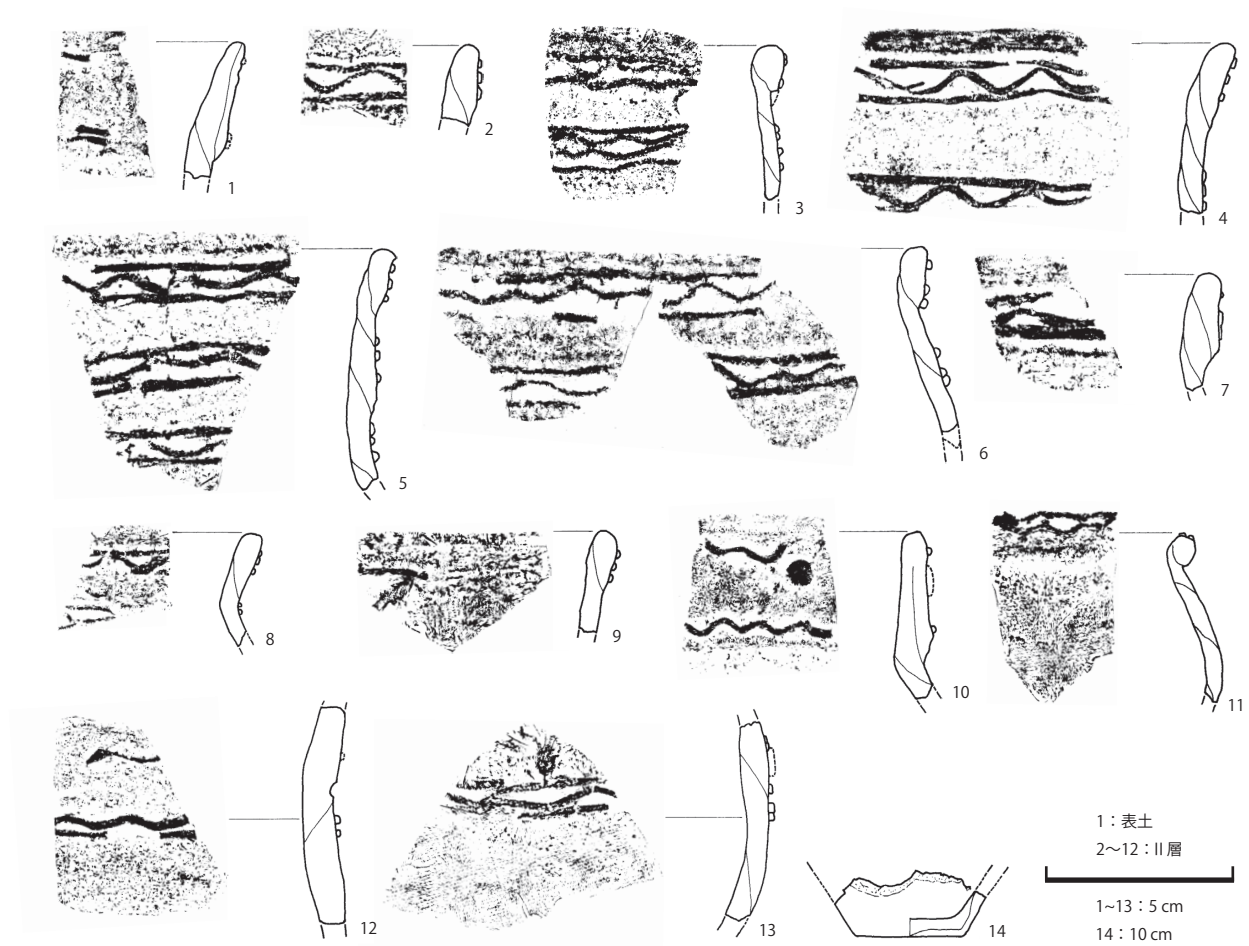
第73図 遺物集中(TR6)出土土器



第74図 遺物集中(TR6)出土骨角器

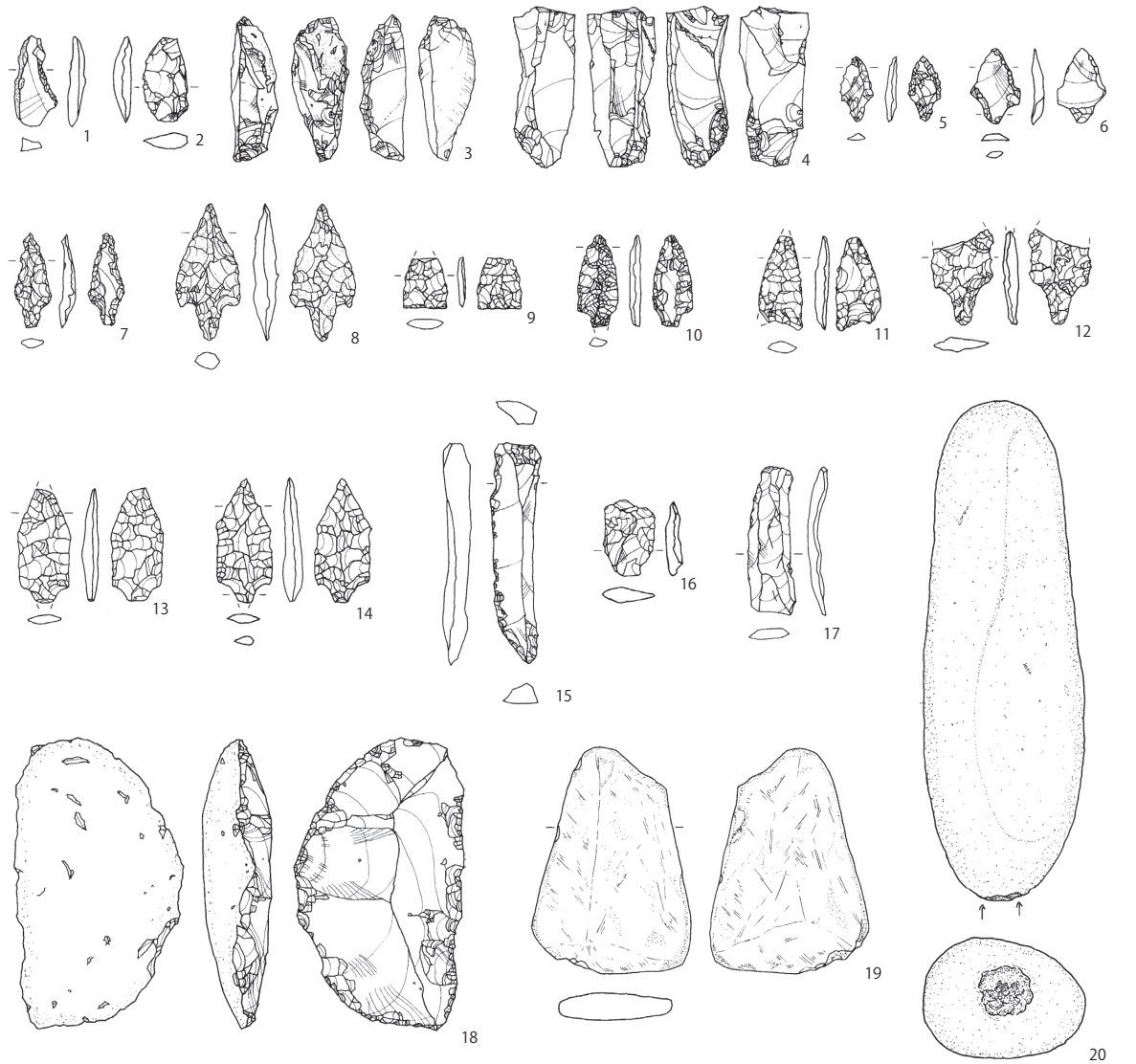


第75図 I・II層出土土器(TR4)



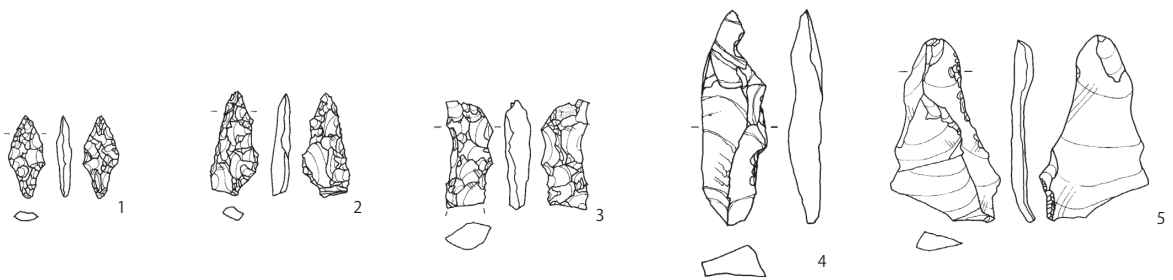
第76図 I・II層出土土器(TR5)

TR4_ I層・II層



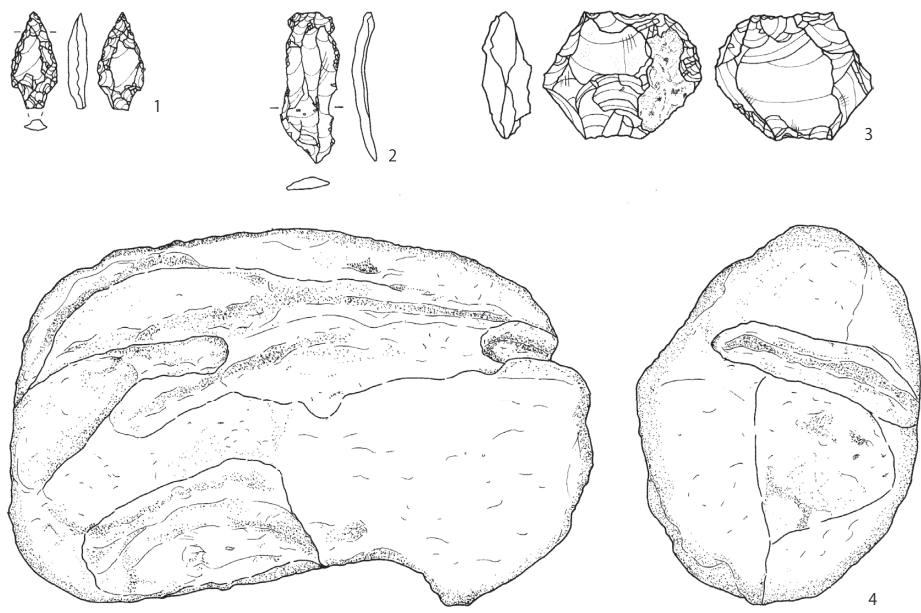
第77図 I・II層出土石器(TR4)

0 5 cm
1~4 : 表土
5~20 : II層



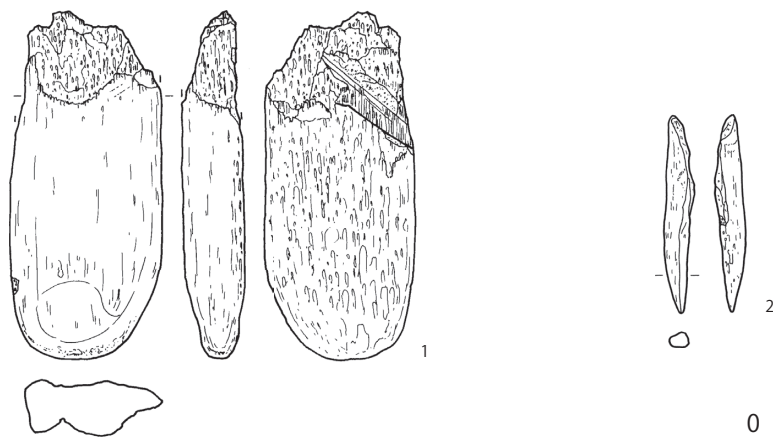
第78図 I層出土石器(TR7)

0 5 cm
1・3・4 : 表土
2・5 : 攪乱



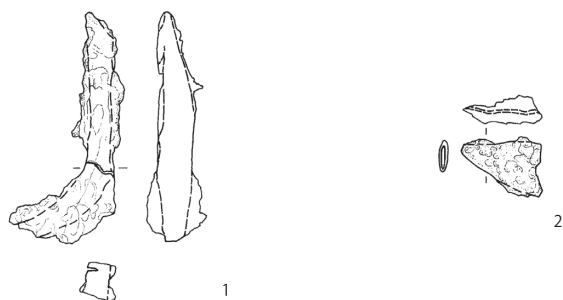
第79图 II層出土石器 (TR5)

0 5 cm



第80图 I層出土骨角器 (TR7)

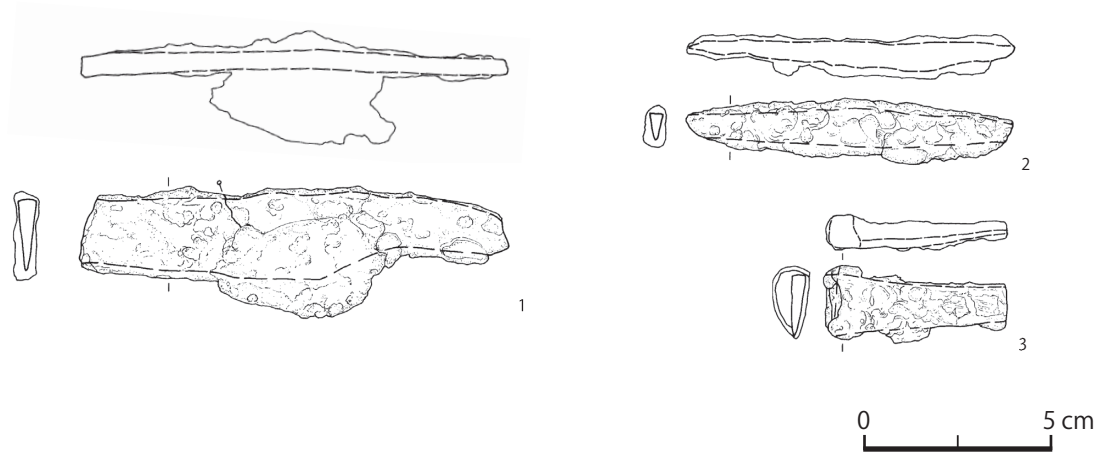
0 5 cm



第81图 I層出土金属製品 (TR4)

0 5 cm

1: 表土, 2: II層



第82図 II層出土金属製品(TR5)

13. III層出土遺物

(土器：第83図)

TR4のIII層出土土器である。III群e類土器が主体であるが、刻文が施文されたb類土器（4・9）など時期差があるものが含まれている。その他、斜行縄文や羽状縄文が施文されたV群b類の縄文中期土器も出土している（11・12）。

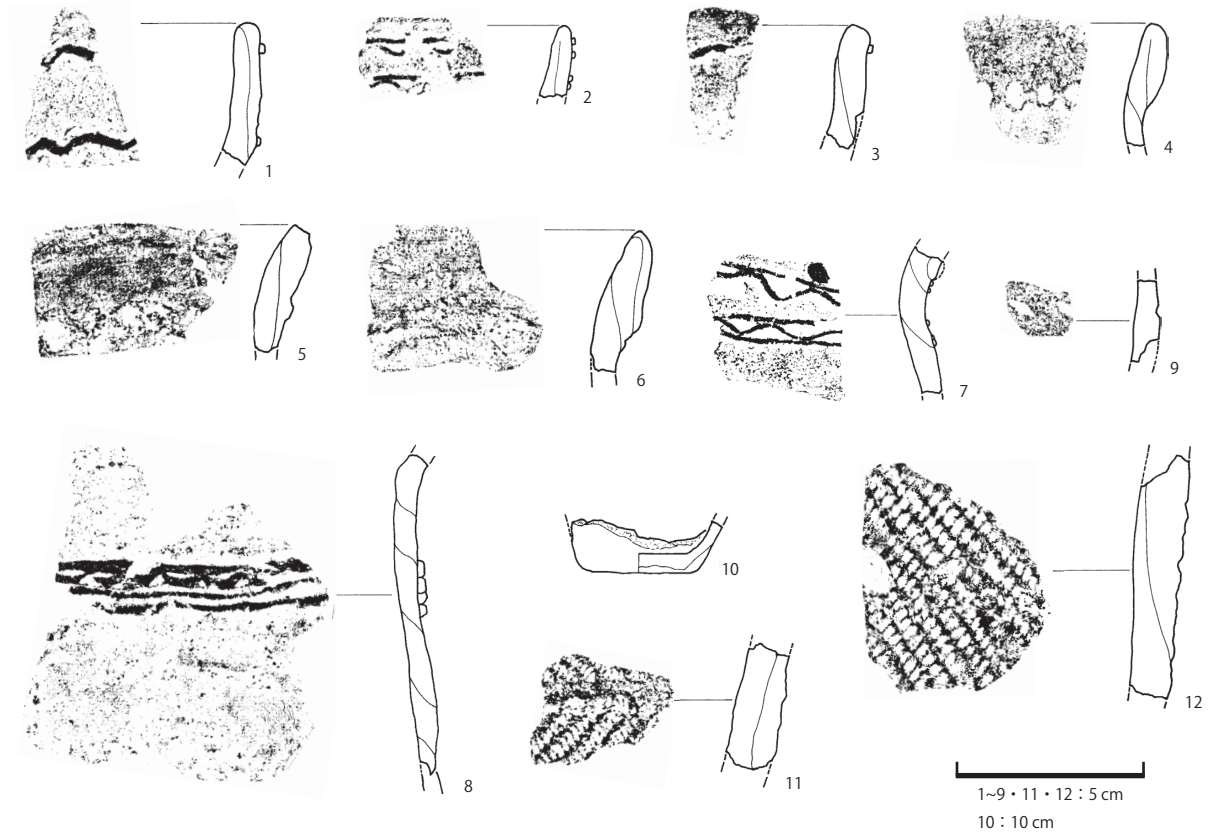
(石器：第84図)

第84図はTR4のIII層出土石器である。3は逆刺の位置がずれており、銚先のようなものを意識したのであろうか。5のリタッチドフレイクは比較的大型で、石材は硬質頁岩を利用している。

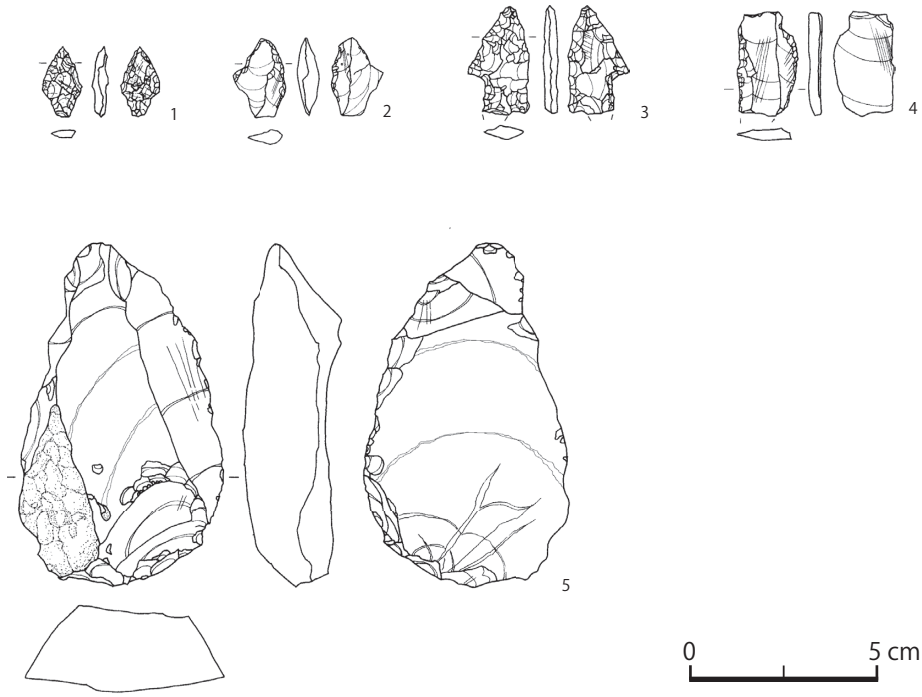
(骨角器：第85図)

TR4のIII層から出土した鯨骨製の骨斧である。刃部はやや湾曲する片刃で、幅広に作られている。

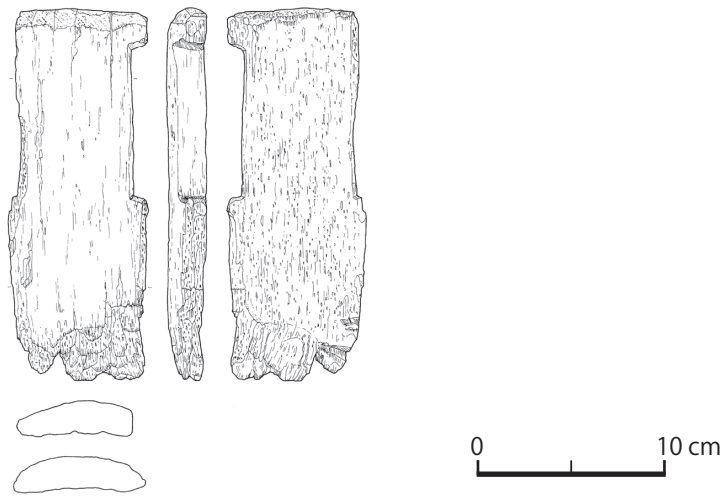
(平河内毅、松田功)



第83図 III層出土土器(TR4)



第84图 III層出土石器 (TR4)



第85图 III層出土骨角器 (TR4)

表2. 出土土器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
28	1	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1H・1H/3P・3P)				1.2	
28	2	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1H・1H/3P・3P)				1.1	
29	1	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.9	
29	2	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
29	3	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
29	4	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
29	5	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・2P)				0.8	突帯あり
29	6	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				1.1	
29	7	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P/2P)				0.7	
29	8	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・2P)				0.7	
29	9	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				1.1	
29	10	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(6P・粒状・2P)				0.8	
29	11	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(粒状)				0.7	
29	12	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P・3P)				0.9	
29	13	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.0	
29	14	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~底部	貼付文(3P/3P+粒状・1K)	—	5.1	10.4	0.6~1.1	螺旋技法
30	1	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群f類	頸部~底部	—	—	6.9	—	0.7	
30	2	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群f類	胴部~底部	—	—	6.8	—	1.1	
30	3	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・3P)	16.5	6.9	19.1	0.5~1.1	螺旋技法
30	4	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/1P・3P・2P)	25.8	8.8	25.9	0.6~2.3	螺旋技法
30	5	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P+粒状・3P)	11.1	5.9	12.7	0.4~1.0	螺旋技法
30	6	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・13P)	11.3	7.7	20.0	0.5~0.8	
30	7	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・3P・1H)	28.5	10.6	24.5	0.6~1.2	螺旋技法
30	8	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/1H・3P)	32.3	11.3	40.8	0.7~1.3	螺旋技法
30	9	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(15P+粒状・5P+粒状・12P)	9.9	6.7	18.8	0.4~0.8	
31	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
31	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.5	
31	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
31	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
31	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・3K)				1.1	
31	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P)				0.8	
31	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.6	
31	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
31	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(9P)				0.7	
31	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
31	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文全て剥落
31	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・2P)				1.1	
31	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.8	
31	19	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	20	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/1P)				0.9	
31	21	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.1	
31	22	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(7P/3P)				1.0	
31	23	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P・1K・3P・1K)				0.9	突帯あり
31	24	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/2P・2P・1P)				1.0	
32	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				1.0	
32	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1H/1H)				0.9	貼付文1条剥落
32	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1P・1P/3P・3P)				1.0	
32	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/2P)				0.8	
32	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文3条剥落
32	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				0.7	貼付文全て剥落
32	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P)				0.9	
32	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P)				0.9	
32	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
32	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(ボタン状)				0.7	
32	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.9	表面風化
32	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(不明)				1.1	貼付文大部分剥落
32	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.8	表面風化
32	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.6	表面風化
32	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1P・1P/1P)				0.8	
32	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.9	表面風化
32	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.6	
32	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・1P)				0.9	口縁部貼付文3条剥落

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
33	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
33	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(4P)				0.7	
33	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				0.8	
33	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・1P)				0.8	
33	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1C)				0.7	
33	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.9	
33	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(4P・粒状)				0.6	
33	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1K)				0.6	
33	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状・1P)				0.6	
33	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(粒状)				0.6	
33	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.8	
33	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.8	
33	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.9	
33	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.2	
33	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.7	
33	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6	
33	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6	
33	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.8	
33	19	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.7	
33	20	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.9	
33	21	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.6	
33	22	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				2.1	
33	23	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.5	
33	24	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—		6.4		1.4	
33	25	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	完形	貼付文(1P/1P・1P)	10.7	6.0	12.2	0.5~1.2	
34	1	TR5	5号竪穴	覆土	縄文	V群b類	口縁部	外面:LR+RL,縦平行沈線,円形文 内面:LR				1.5	
34	2	TR5	5号竪穴	覆土	縄文	V群b類	胴部	LR,すり消し帯				1.1	
46	1	TR5	上層配石遺構	覆土	擦文	I群	頸部	刺突,横走沈線4条				0.7	
46	2	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(3P)				1.2	
46	3	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(4P)				1.1	
46	4	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(6P)				0.7	
46	5	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(8P)				0.6	
46	6	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1H・1P)				0.7	
46	7	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
46	8	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.7	
46	9	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.7	
46	10	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(1P/4P)	9.0	3.2	10.1	0.6~1.6	
46	11	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(2P/7P)	—	4.8	16.2	0.6~1.2	
46	12	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(3P/3P・3P・3P)	28.2	7.6	32.5	0.6~1.2	
46	13	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(2P/1P+1P・1P・1P+1P)	21.7	—	25.1	0.6~1.4	
47	1	TR7	23号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部	貼付文(3P)				0.7	
47	2	TR7	23号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.8	
47	3	TR7	23号竪穴	覆土	縄文	Ⅳ群	口縁部	突起,すり消し帯,RL縄文				0.9	
47	4	TR7	23号竪穴	覆土	縄文	V群b類	胴部	RL縄文				1.3	
49	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
49	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
49	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
49	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.5	
49	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
49	6	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P)				0.7	
49	7	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				1.0	
49	8	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1K)				0.7	
49	9	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.5	
49	10	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.8	
49	11	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	不明				0.8	表面風化
49	12	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.6	
49	13	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.7	
49	14	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
49	15	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・粒状)				0.7	
49	16	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.7	貼付文1条剥落
49	17	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状・1P)				0.6	
49	18	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.6	
49	19	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群c類	胴部	沈線文(横3条)				0.7	
49	20	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群b類	胴部	刻文(横)				0.5	
49	21	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.9	
53	1	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P/2P)				1.1	

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
53	2	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P・ボタン状/2P)				1	
53	3	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/2P・3P)	19.4	8.7	23.2	0.5~1.2	螺旋技法
53	4	TR4	1号墓	覆土	縄文	V群b類	口縁部	RL縄文				1.4	
56	1	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3K・5P)				0.6	
56	2	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.6	
56	3	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部					1.0	
56	4	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6~1.0	
65	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	頸部	外面:横走沈線,刺突,縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	頸部	外面:横走沈線,刺突,縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	胴部	外面:縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P+1P)				0.5	
65	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	トビニタイ	Ⅱ群a類	口縁~底部	無文	15.5	4.2	14.7	0.6~0.8	
66	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
66	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.6	貼付文全て剥落
66	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/8P・1P) (8Pの下に貼瘤状)				0.6	
66	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
66	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P/2P)				0.8	
66	6	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.6	
66	7	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P/2P)				0.8	
66	8	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.5	
66	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.8	
66	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・ボタン状)				0.9	
66	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
66	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.7	
66	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/2P・2P・2P)				0.8	
66	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+1K+2P)				0.8	
67	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.5	
67	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.7	
67	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(2K・5P・縦長貼付文・3P)				0.5	口縁部に工具による凹凸あり
67	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P)				0.8	
67	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(2K)				0.6	
67	6	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1K+2K・貼瘤状)				0.8	
67	7	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(縦長貼付文・2K)				0.7	
67	8	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~頸部	貼付文(2P+1K/2P)				1.0	
67	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(縦)				1.1	
67	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+1P)				0.8	
67	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+3P)				0.9	貼付文2条剥落
67	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				0.6	
67	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.7		0.6	
67	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.5		0.7~1.0	
67	15	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.5		0.7	
67	16	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.7~1.8	
67	17	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.7~1.1	
67	18	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				1.0	
67	19	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.3		0.8~1.2	
67	20	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		6.7		0.7~1.3	
67	21	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/5P・3P)	17.0	8.5	17.7	0.5~1.9	螺旋技法
68	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	縄文	V群a類	口縁部	LRとRLの絡条体圧痕文				0.8	
68	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	縄文	V群b類	胴部	RLR縄文				0.9	羅臼式
59	1	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.9	
59	2	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・ボタン状+1P/2P)				1.1	
59	3	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1C・1P)				0.8	
59	4	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅱ群b類	胴部	沈線文(縦・横の順に施文)				0.7	
60	1	TR4	土坑(2a)	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(3P/1P)				1	
60	2	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・2P)				0.9	
60	3	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・2P)				1.1	
60	4	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(十字)				0.8	
60	5	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・3P・3P) (頸~胴部は3P下にボタン状)				1	
60	6	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1K・1K/粒状から2P垂下)				1	
60	7	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P+ボタン状)				0.8	
60	8	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P・1H)				0.7	
—1	1	TR4	土坑(2b)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(4P)				0.8	

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
1-2	2	TR4	土坑(2b)	底面	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6~1.0	
1-3	3	TR4	土坑(2b)	底面	縄文中期	V群b類	胴部	RL縄文				1.3	
73	1	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部~胴部	貼付文(3P)				0.7~1.1	
73	2	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~0.7	
73	3	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.6~1.0	
73	4	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		9.9		0.7~1.7	
76	1	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	
76	2	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
76	3	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/4P)				0.9	
76	4	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
76	5	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・3P)				0.7	
76	6	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.5	
76	7	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
76	8	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
76	9	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
76	10	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P+粒状・1P)				0.9	
76	11	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(2P+粒状)				0.6	貼付文は口唇上
76	12	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文1条剥落
76	13	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・粒状・3P)				0.6	
76	14	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	底部	不明		5.4		0.9	
75	1	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1K・1K)				0.9	
75	2	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.9	
75	3	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1P・5P/2P)				1.2	
75	4	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P/2P・2P)				0.7	
75	5	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/4P)				0.8	
75	6	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P/2P+粒状・1P)				0.6	
75	7	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+粒状・2P+粒状)				1.0	
75	8	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.8	
75	9	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(横)				0.8	
75	10	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P・1P)				0.8	
75	11	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・2P)				0.8	
75	12	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.5	
75	13	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・粒状)				0.6	
75	14	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.8	
75	15	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~0.9	
75	16	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.9	
75	17	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		9.7		0.6~0.9	
83	1	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.7	
83	2	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				0.6	
83	3	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P)				0.8	
83	4	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(縦)				0.8	
83	5	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.9	
83	6	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				1.1	
83	7	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(粒状・2P・3P)				0.8	
83	8	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+1K+2P)				0.6	
83	9	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群b類	胴部	刻文(斜)				0.7	
83	10	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~1.0	
83	11	TR4	遺構外	Ⅲ層	縄文中期	V群b類	胴部	RLとLRの羽状縄文				1.2	
83	12	TR4	遺構外	Ⅲ層	縄文中期	V群b類	胴部	LR縄文				1.1	

註)オホーツク土器の文様要素は熊本2012に準じた。

数字は貼付文の本数、Cは鎖状(chain)、Kは刻み(kizami)、Hは貼付文にひねり(Hineri)、Pは施文を行わない(Plain)例である。

表3. 出土石器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
35	1	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(柳葉形:Y)	I a	1.8	1.15	0.4	0.6	黒曜石	先端部欠け・幅広
35	2	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(ひし形:H)	I b	2.1(1.5/0.6)	1.2	0.2	0.52	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺、鏃身部微細調整のみ
35	3	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(Y)	I a	2.25	0.8	0.5	0.76	黒曜石	左右非対称
35	4	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.35(1.8/5.5)	0.95	0.4	0.66	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
35	5	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.4(1.65/0.75)	1.2	0.5	1.04	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺片側不明瞭
35	6	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.4(2.0/*0.4)	1.3*	0.5	1.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺一部欠
35	7	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(Y)	I a	2.4	1.2	0.6	1.31	黒曜石	基部側細部調整粗雑
35	8	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.3(1.4/0.9)	1.3	0.4	0.8	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
35	9	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(将棋駒形:K)	I d	2.8(2.3/0.5)	1.4	0.4	1.08	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端・基部調整あり
35	10	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.7(1.85/*0.85)	1.3	0.4	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、焼け、逆刺やや不明瞭
35	11	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)?	I b	*2.3	1.5	0.6	1.33	黒曜石	鏃身部欠け、焼け、欠損品
35	12	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.9(1.7/*1.2)	2	0.55	2.85	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、銛先鏃の可能性あり
35	13	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(三角形:S)	I c	4.3	1.7*	0.6	3.23	黒曜石	基部一部欠、銛先鏃の可能性あり
35	14	TR5	5号竪穴	床面	スクレイパー	IV d	4.3	3.3	0.95	9.86	黒曜石	3つの側縁部に調整あり
35	15	TR5	5号竪穴	床面	リタッチドフレイク	V a	3.5	2.9	10.5	11.7	黒曜石	細部調整
35	16	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	6.7	4.4	2.6	13.5	黒曜石	焼けて発泡している
35	17	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	2.8	3.5	1.4	16.73	黒曜石	原石面あり
35	18	TR5	5号竪穴	床面	石核	VI b	3.6	1.35	1.3	6.82	黒曜石	原石面あり
35	19	TR5	5号竪穴	床面	フレイク	V b	3.3	2.1	1.7	11.2	黒曜石	焼けて発泡している
35	20	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	3.35	1.85	1.4	8.29	黒曜石	原石面あり、焼けている
35	21	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	5.3	2.3	2.1	23.87	黒曜石	原石面あり
35	22	TR5	5号竪穴	床面	リタッチドフレイク	V a	6.7	4.15	1.9	31.1	泥岩	微細調整あり
35	23	TR5	5号竪穴	床面	石斧	VII b	12.2	5.1	1.85	222	角閃石	両刃、側縁打撃調整あり
36	1	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X a	14.8	6.6	5.05	750	安山岩	打痕後、すり石利用。紐状痕跡あり
36	2	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X a	22.5	6.3	4.65	1100	安山岩	打痕後、すり石利用。長軸両端にあり
36	3	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII a	14.1	5.8	4.9	514	安山岩	長軸一端に打痕
36	4	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII a	17.4	7.3	4.85	840	安山岩	長軸一端に打痕
37	1	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X c	13.4	8.2	5.1	809	安山岩	打痕後、すり石利用。長軸一端
37	2	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII c	6.25	6.5	5.8	325	安山岩	球形、数カ所に打痕あり
37	3	TR5	5号竪穴	床面	くぼみ石状すり石	IX a	81.5	61	76	410	安山岩	くぼみ2箇所、長軸面に擦り痕
37	4	TR5	5号竪穴	床面	有孔石製品	a	3.5	2.45	1.95	12.2	泥岩	貫通孔1つ、垂飾?
37	5	TR5	5号竪穴	床面	有孔石製品	a	4.9	3.8	0.95	12.8	泥岩	貫通孔1つ、垂飾?
37	6	TR5	5号竪穴	床面	すり石状石製品?	X d	5.7	2.05	0.9	9	硬質頁岩	剥片素材を利用したもの、側縁と稜部に擦面あり
38	1	TR5	5号竪穴	炉	石鏃(K)	I d	1.95(*1.1/*0.85)	1.35	0.4	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
38	2	TR5	5号竪穴	炉	リタッチドフレイク	V a	2.55	2.3	0.4	2.08	黒曜石	縁辺一部に細部加工あり
38	3	TR5	5号竪穴	炉	石核	VI b	4.2	2.75	2	18.7	黒曜石	残核の可能性あり
38	4	TR5	5号竪穴	炉	フレイク	V b	2.3	3.7	1.05	9.5	黒曜石	原石面あり
38	5	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	4.5	4.6	2.3	39.3	黒曜石	原石面あり
38	6	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	2.3	3.1	1.2	12	黒曜石	微細剥離痕あり
38	7	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	3.2	3.2	1.9	21.7	黒曜石	原石面あり、微細剥離痕あり
38	8	TR5	5号竪穴	炉	すり石	X b	23.6	11.1	2.1	760	安山岩	鏃状工具の可能性あり、灰掻き用具
39	1	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.65(1.25/0.4)	0.8	0.3	0.26	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面調整縁辺部の一部のみ、逆刺やや不明瞭
39	2	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	18(1.25/0.55)	0.8	0.3	0.25	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺片側欠損
39	3	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.8(1.05/0.75)	1.2	0.5	0.65	黒曜石	(鏃身部/茎部)裏面先端部のみ調整、逆刺明瞭
39	4	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(K)	I d	2.25(1.7/*0.55)	1.2	0.5	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺明瞭
39	5	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.5(1.3/1.2)	1	0.4	0.74	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
39	6	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.35(*1.5/0.85)	2	6.05	1.33	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、先端部再調整、逆刺明瞭
39	7	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.9(2.2/0.7)	1.7	0.5	1.25	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	8	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.05(1.95/1.1)	1.6	0.6	2.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	9	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(S)	I c	3.1	2.2	0.7	3.51	黒曜石	基部両端部に調整あり
39	10	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(S)	I c	3.5	1.7	0.5	2.47	黒曜石	鏃身縁辺部緩やかな曲線
39	11	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.5(2.3/1.2)	1.3	0.6	2.18	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	12	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.8(2.0/1.8)	1.3	0.5	2.07	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
39	13	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.6(*0.7/0.9)	1.2	0.3	0.37	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺明瞭
39	14	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.1(*0.9/*0.2)	0.9	0.4	0.31	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	15	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.1(1.75/*0.35)	1.1	0.5	0.97	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	16	TR5	5号竪穴	覆土	銛先鏃?	I	2.45	1.55	0.6	1.66	黒曜石	基部欠損品
39	17	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.8(*2.3/*0.5)	1.3	0.45	1.48	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	18	TR5	5号竪穴	覆土	銛先鏃(H)?	I b	3.85(*1.2/2.65)	2.25	0.5	3.9	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺あり、鏃身部欠損
39	19	TR5	5号竪穴	覆土	ドリル	II	2.9	1.5	0.8	2.84	黒曜石	棒状の形態、刃部断面ひし形
39	20	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	1.8	1.7	0.3	0.67	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	21	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	2.35	1.7	0.5	1.64	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	22	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	2.4	2.3	0.6	2.65	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	23	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3	1.8	0.8	2.84	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	24	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3.4	2.25	0.65	4	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	25	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3.5	2.05	0.8	5.34	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	26	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	4.35	1.7	0.5	2.41	黒曜石	縁辺一部に二次調整

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
39	27	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	5	3.5	1.15	16.42	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	28	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	4.9	2.8	1.3	13.75	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	29	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	2.25	1.9	0.7	2.8	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	30	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.3	2.25	1.2	9.74	黒曜石	原石面あり
39	31	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.6	4.4	1.6	27.91	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	32	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.15	4.2	2.55	27.82	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	33	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.6	4.15	2.3	28.11	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	34	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	4.35	2.7	1.85	19.6	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	35	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	4.8	4.5	1.6	36.28	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	36	TR5	5号竪穴	覆土	フレイク	Vb	2.8	3	1.8	19.3	黒曜石	原石面あり
39	37	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	2.3	4.2	1.35	14.4	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	38	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	7.1	2.85	2	39.08	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	39	TR5	5号竪穴	覆土	石核	VIb	3.6	4.7	2.6	43.4	黒曜石	不明瞭なプラットフォーム
40	1	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIc	7.6	7	5.3	425	安山岩	球形数カ所に打撃痕あり
40	2	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIb	13.8	6.6	4.5	525	安山岩	打痕は長軸端部から側縁部にあり
40	3	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIb	15.05	6.5	3.7	641	安山岩	長軸両端に打撃痕、平坦面に磨き調整あり
40	4	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	20.1	7.9	7.1	1760	安山岩	打痕後、すり石として利用。線条痕跡あり
40	5	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	12.5	7.1	5.5	510	安山岩	打痕後、すり石として利用。
40	6	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIa	11.2	4.4	3.4	287	安山岩	被熱による剥落あり
40	7	TR5	5号竪穴	覆土	砥石	XI	3.6	3	0.6	6.37	泥岩	打痕後研磨調整、全体に研磨面がある
41	1	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	10.4	9.1	4.95	686	安山岩	扁平面に擦痕あり
41	2	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	12.3	10.9	3.55	804	安山岩	赤色顔料?付着あり、側縁部に擦痕と線条痕あり
41	3	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	12	6.45	5.1	600	安山岩	長軸の一端に擦痕あり
41	4	TR5	5号竪穴	覆土	両頭調整石製品	c	8.2	3.1	3.2	111.18	砂岩	長軸両端を尖らせ、体部2箇所に括れを作る
41	5	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	4.9	5.6	2.95	87.74	安山岩	扁平面に擦痕あり
41	6	TR5	5号竪穴	覆土	有孔有溝石錘	XIIa	19	12.1	6.7	810	砂岩	有孔石錘、6条の溝を有する。長軸側で半裁している
42	1	TR5	5号竪穴	覆土	ナイフ	IIIb	16.5	12.7	1	236.02	玄武岩	剥片端部に刃部を有する、鉄平石を利用
42	2	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	9.8	11.2	1.2	139.63	玄武岩	鉄平石原岩
42	3	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	10.75	6.2	1.2	97.3	玄武岩	鉄平石原岩
42	4	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	8.55	7.05	2.4	175	玄武岩	鉄平石原岩
42	5	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	7.1	5.8	0.7	45.85	玄武岩	鉄平石原岩
50	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	1.75(1.15/0.6)	1.1	0.35	0.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整、左右非対称
50	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	3.1(2.9*/0.2)	1.2	0.45	1.7	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、焼けている
50	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	3.3(2.8/0.5)	1.4	0.2	1.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整、裏面調整なし、未製品
50	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(?)	I	1.45	1.3	0.55	0.7	黒曜石	基部欠損、銛先鏃の可能性もあり
50	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	ナイフ	IIIa	1.75	2.3	0.5	2.6	黒曜石	両面調整
54	1	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	1.7(0.7/1.0)	1	0.3	0.37	黒曜石	(鏃身部/茎部)、基部が長い
54	2	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	2(1.9*/0.1)	1.2	0.35	0.89	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
54	3	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	2.65(1.65*/1.0)	1.45	0.5	1.67	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
54	4	TR4	1号墓	覆土	石鏃(Y)	Ia	3.8	1.9	0.7	3.79	黒曜石	先端部再加工あり
54	5	TR4	1号墓	覆土	銛先鏃	Ic	4.3	1.9	0.7	4.74	黒曜石	銛先鏃の可能性あり
54	6	TR4	1号墓	覆土	リタッチドフレイク	Va	3.9	3.1	0.75	8.82	黒曜石	長軸両側縁部に加工あり
54	7	TR4	1号墓	覆土	石鏃状すり石	Xb	15.95	6.35	1.95	276	泥岩	先端部及び側縁部に打痕あり、平坦面に擦痕あり
54	8	TR4	1号墓	覆土	すり石	Xc	12.65	9.1	7.35	1290	安山岩	擦面1箇所
54	9	TR4	1号墓	覆土	たたき石	VIIIa	14.35	6.5	3.85	610	安山岩	長軸一端に打痕
54	10	TR4	1号墓	覆土	有孔石製品	b	5.25	3.9	1.05	13.6	泥岩	中央に1つの穿孔、円板状製品
57	1	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	3.4	4.05	1	10.99	黒曜石	焼けている、原石面あり、細部剥離あり
57	2	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	3.3	5.6	1.3	22.9	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
57	3	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	5.6	2.3	2	20.72	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
61	1	TR4	土坑(2a)	覆土	石鏃(Y)	Ia	2.4	1.1	0.3	0.76	硬質頁岩	先端・基部に再加工あり
61	2	TR4	土坑(2a)	覆土	リタッチドフレイク	Va	2.85	2.5	0.9	5.29	黒曜石	長軸両側縁部に加工あり
61	3	TR4	土坑(2a)	覆土	石核状フレイク	VIc	4.5	3.6	1.8	30.3	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
61	4	TR4	土坑(2a)	底面	石核	VIb	4.3	4.1	2.4	31.82	黒曜石	原石面あり、明瞭なプラットフォームなし
61	5	TR4	土坑(2a)	覆土	たたき石	VIIIc	53	51	44	165.19	安山岩	球形、一端に打痕あり
64	1	TR4	土坑(2b)	覆土	石鏃(S)	Ic	1.9	0.8	0.2	0.23	黒曜石	焼けている
64	2	TR4	土坑(2b)	覆土	石鏃(H)	Ib	2.1(*1.7*/0.4)	1.1	0.4	0.84	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、先端・基部欠損
64	3	TR4	土坑(2b)	覆土	ナイフ	IIIa	3.25	1.75	0.5	1.92	黒曜石	側縁部に刃部あり
64	4	TR4	土坑(2b)	覆土	スクレイパー	IVa	3.15	2.3	0.6	4.61	黒曜石	ラウンドタイプ
64	5	TR4	土坑(2b)	覆土	リタッチドフレイク	Va	3.65	1.7	0.4	1.85	黒曜石	微細調整あり
69	1	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	1.6(1.0/0.6)	1.6	1.6	1.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、鏃身部微細加工
69	2	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	2.2(1.6/0.6)	0.95	0.3	0.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面一部のみ細部調整
69	3	TR6	配石遺構	II層	石鏃(Y)?	Ia	2.2(*2.05/0.15)	1.45	0.45	1.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部欠損
69	4	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	2.4(1.4/1.0)	1.15	0.3	0.8	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面一部のみ細部調整
69	5	TR6	配石遺構	II層	石鏃(K)	Id	3.5(2.5/1.0)	1.7	0.5	2	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整、焼けている
69	6	TR6	配石遺構	II層	石鏃(K)	Id	4.6(3.4/1.2)	1.55	0.55	3.3	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整
69	7	TR6	配石遺構	II層	石鏃(?)	I	1.3	1.05	0.3	0.4	黒曜石	基部欠損
69	8	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	1.4(1.25*/0.15)	0.95	0.3	0.4	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
69	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	1.35	1.3	0.2	0.4	黒曜石	基部欠損
69	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.2(1.8/*0.4)	1.4	0.35	0.9	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	1.5	1.5	0.4	0.9	黒曜石	鏃身部欠損、未製品
69	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I a b	2.9(*2.7/*0.2)	1.85	0.55	2.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	2.15	1.2	0.45	1.2	黒曜石	先端・基部欠損
69	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(*1.5/1.0)	1.35	0.35	1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、一部微細調整あり
69	15	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	2.15	1.25	0.5	1.9	黒曜石	先端部欠損、未製品
69	16	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3(*1.9/1.1)	1.1	0.4	1.2	チャート	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	17	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3.35(*2.7/0.65)	1.65	0.4	2.3	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	18	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	3	1.75	0.45	2.2	黒曜石	基部一部欠損
69	19	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	3.65	1.8	0.6	3.4	黒曜石	先端部一部欠損
69	20	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	5.2(5.2/*0)	1.25	0.45	2.8	硬質頁岩	(鏃身部/茎部)*=欠け、細身の基部欠損
69	21	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ドリル	Ⅱ	2.15	0.9	0.45	0.7	黒曜石	棒状の形態、刃部断面ひし形
69	22	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	4	1.65	0.75	5.3	黒曜石	両面調整
69	23	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	1.35	2.35	0.5	1.7	黒曜石	両面調整、刃部の多くが欠損
69	24	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	1.4	1.5	0.25	0.8	黒曜石	側縁部調整、欠損品
69	25	TR6	配石遺構	Ⅱ層	スクレイパー	Ⅳd	2.4	3.8	0.4	4.7	黒曜石	ミックスタイプ
69	26	TR6	配石遺構	Ⅱ層	スクレイパー	Ⅳb	2.25	2.65	0.65	4	黒曜石	原石面あり、側縁部のみ調整、欠損品
69	27	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.2	2.6	1.25	8.9	黒曜石	原石面あり
69	28	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	1.7	2.05	1	4.8	黒曜石	多面体状の剥片
69	29	TR6	配石遺構	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	3.9	2.55	1.2	14.9	黒曜石	原石面あり、縁辺一部に二次調整
69	30	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.9	2.75	2.05	20	黒曜石	原石面あり
69	31	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	4.15	3.25	1.9	24.5	黒曜石	原石面あり、焼けている
69	32	TR6	配石遺構	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	3.3	2.3	0.5	4.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
69	33	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	5.45	2.8	1.7	20.6	黒曜石	多面体状の剥片
69	34	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	5.3	2.6	1.6	21.7	黒曜石	多面体状の剥片
69	35	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	5.4	3.4	1.85	24.8	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	36	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.5	4.55	2.4	30.4	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	37	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	2.95	6.4	2.45	45.6	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	38	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核	Ⅵb	3.2	3.9	2.2	21.5	黒曜石	残核
70	39	TR6	配石遺構	Ⅱ層	砥石	X I	5.55	2.95	1.1	16.9	砂岩	研磨面が抉れている
70	40	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	4.9	2.5	2.2	40.3	硬質頁岩	長軸一端に擦痕、円柱型に表面を擦っている
70	41	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	X b	5.65	3.15	1.25	24.9	安山岩	長軸一端に打痕
70	42	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	12.8	5.4	3.9	39.7	安山岩	長軸一端に擦痕、浅い窪みあり
70	43	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	VⅢa	12.95	6.3	3.9	31.0	安山岩	長軸一端に打痕
70	44	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	17.35	7.1	4.4	88.0	安山岩	長軸両端に打痕と擦痕
71	45	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	VⅢa	17.7	7.75	4.3	88.2	安山岩	長軸両端に打痕、一端に擦痕
71	46	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	18.35	7.3	4.6	77.3	安山岩	長軸一端に擦痕
71	47	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	20.8	5.9	4.6	64.6	安山岩	長軸一端に擦痕
77	1	TR4	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.55	1.15	0.45	0.08	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	2	TR4	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.4	1.2	0.5	1.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	3	TR4	遺構外	I層	石核状フレイク	Ⅵc	4.05	1.6	1.25	7.29	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
77	4	TR4	遺構外	I層	石核	Ⅵa	4.4	1.9	1.7	13.4	黒曜石	プラットフォーム1面有り
77	5	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	1.8(1.2/0.6)	0.95	0.3	0.29	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整
77	6	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.1(1.65/0.45)	1.35	0.3	0.58	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁・基部調整
77	7	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.6(2.0/0.6)	1	0.4	0.71	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面側縁部のみ調整
77	8	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3.8(2.8/1.0)	1.8	0.7	2.95	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整
77	9	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	1.35	1.25	0.25	0.38	黒曜石	先端部欠け
77	10	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(2.05/*0.45)	1.1	0.3	0.87	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、微細調整あり
77	11	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	2.45	1.2*	0.4	1.01	黒曜石	先端部・基部欠け
77	12	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	2.3(*1.2/1.1)	1.7	0.4	1.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部先端欠損
77	13	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	3.25(*2.85/*0.4)	1.55	0.5	2.01	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
77	14	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	3.35(2.85/*0.5)	2	0.55	1.98	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
77	15	TR4	遺構外	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	6.05	1.3	0.8	4.68	黒曜石	先端部加工、側縁一部に刃こぼれあり
77	16	TR4	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.1	1.35	0.45	1.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	17	TR4	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4.24	1.35	0.3	1.94	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	18	TR4	遺構外	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	7.95	4.7	1.9	69.4	黒曜石	原石面あり、微細調整があり削り器として使用?
77	19	TR4	遺構外	Ⅱ層	砥石	X I	6	4.2	1	18.73	砂岩	全面に調整痕あり
77	20	TR4	遺構外	Ⅱ層	たたき石	VⅢa	138.5	45	35	300	安山岩	長軸一端に打痕あり
78	1	TR7	遺構外	I層	石鏃(H)	I b	2.2(1.3/0.9)	0.85	0.35	0.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、鏃身部微細調整
78	2	TR7	遺構外	I層	石鏃(H)?	I	2.7(2/0.7)	1.15	0.45	1.2	黒曜石	(鏃身部/茎部)、基部調整途中の未製品
78	3	TR7	遺構外	I層	ドリル	Ⅱ	2.75	1.1	0.75	2.4	黒曜石	刃部欠
78	4	TR7	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	5.6	1.7	0.9	6.7	硬質頁岩	縁辺一部に二次調整
78	5	TR7	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4.75	2.85	0.45	3.9	黒曜石	縁辺一部に二次調整
79	1	TR5	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(1.9/*0.6)	1.2	0.5	1.21	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部微細加工
79	2	TR5	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4	1.9	0.4	2.06	黒曜石	縁辺一部に二次調整
79	3	TR5	遺構外	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.4	4.15	1.25	13.95	黒曜石	原石面あり、両端部に微細剥離痕あり

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
79	4	TR5	遺構外	Ⅱ層	石錘	XⅡ b	9.4	15.4	7.3	1350	安山岩	長軸1条溝
84	1	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	1.9(1.2/*0.7)	1.05	0.4	0.58	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
84	2	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	2.1(1/1.1)	1.35	0.6	0.94	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁一部微細調整、未製品?
84	3	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	2.45(1.4/*1.05)	1.6	0.4	1.51	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、左右の逆刺の位置にズレあり、銚先石鏃?
84	4	TR4	遺構外	Ⅲ層	リタッチドフレイク	Va	2.25	1.6	0.35	1.78	黒曜石	縁辺一部に二次調整
84	5	TR4	遺構外	Ⅲ層	リタッチドフレイク	Va	9	5.35	2.4	111.84	硬質頁岩	縁辺一部に二次調整

表4. 出土骨角器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
43	1	TR5	5号竪穴	覆土	へら状製品	鯨骨	50	18	10	
43	2	TR6	5号竪穴	床	不明	海獣骨	29	12	6	
43	3	TR7	5号竪穴	床	骨斧	鯨骨	226	76	18	先端及び背面を中心に被熱・黒色化
43	4	TR8	5号竪穴	床	不明	鯨骨	400	84	28	一部被熱・黒色化
48	—	TR7	23号竪穴	覆土	刺突具	鳥骨	16	37	14	アホウドリ上腕骨(L)近位部～骨幹部
51	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	銚頭	海獣骨	43	12	5.5	開窩式
51	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	銚頭	海獣骨	28	11	9	開窩式
51	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	彫像	海獣骨	30	11	3.6	フクロウと思しき彫刻あり
51	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨鏃	鳥骨	36	6	6	
51	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨針	鳥骨?	56	3	2	
51	6	TR7	上層廃棄層	廃棄層	未製品	鯨骨	77	15	12	
51	7	TR7	上層廃棄層	廃棄層	未製品	鯨骨	72	20	8	
51	8	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨匙	鯨歯	117	33	4	マッコウクジラか?
51	9	TR7	上層廃棄層	廃棄層	原材	鯨骨	45	17	12	
51	10	TR7	上層廃棄層	廃棄層	原材	鯨骨	43	14	11	
51	11	TR7	上層廃棄層	廃棄層	円盤状製品	海獣骨	28	20	4	
72	—	TR6	配石遺構	Ⅱ層	不明	鯨骨	35	12	8	先端部に3条の刻線あり、銚頭か?
74	1	TR6	遺物集中	Ⅱ層	骨斧	鯨骨	142	34	16	
74	2	TR7	遺物集中	Ⅱ層	釣針軸	鯨骨	232	88	18	U字型組合せ式釣針軸、糸掛溝あり
80	1	TR7	遺構外	I層	へら状製品	鯨骨	92	41	16	
80	2	TR7	遺構外	I層	刺突具	鹿角	53	7	5	
85	—	TR4	遺構外	Ⅲ層	骨斧	鯨骨	196	73	20	

表5. 出土鉄製品計測値一覧

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
44	1	TR5	5号竪穴	床	刀子	鉄	34	14	3	欠損
44	2	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	16	2	1	欠損
44	3	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	13	4	3	欠損
44	4	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	15	3	3	欠損
45	1	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	39	13	3	欠損
45	2	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	23	11	3	欠損
45	3	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	18	14	3	欠損
45	4	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	24	17	4	欠損
45	5	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	28	21	3	欠損
45	6	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	76	14	3	欠損
45	7	TR5	5号竪穴	覆土	棒状製品	鉄	35	14	5	欠損
52	1	TR7	22・23号竪穴上層廃棄層	廃棄層	刀子	鉄	61	16	3	欠損
55	1	TR4	1号墓	覆土	刀子	鉄	33	19	3	欠損
55	2	TR4	1号墓	覆土	針	鉄	12	3	3	欠損
58	—	TR5	2号墓	覆土	刀子	鉄	96	14	4	欠損
62	—	TR4	土坑(2a)	覆土	刀子	鉄	44	12	4	欠損
81	1	TR4	—	I層	鉤状製品	鉄	60	26	7	欠損
81	2	TR4	—	II層	不明破片	鉄	22	16	2	欠損
82	1	TR5	—	II層	刀子	鉄	114	24	5	欠損
82	2	TR5	—	II層	刀子	鉄	86	10	7	欠損
82	3	TR5	—	II層	刀子	鉄	48	17	3	欠損、金具有り

表6. 神功開竇計測値

図	番号	調査区	遺構名	層位	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
52	2	TR7	22・23号竪穴上層廃棄層	廃棄層	24.51	20.6	0.09	8.38	6.39	0.31	1.06	0.37	2.19